『豊饒の海』論

―三島由紀夫による「世界解釈」の視点―

G13213
中尾　莉奈

目次

序　…… 1

第一章　「春の雪」論　―嘘を核とした作品構造―
第一節　「春の雪」を構成するモチーフ　…… 4
第二節　清顕と聡子を繋ぐ嘘の役割　…… 6
第三節　嘘から見える女性優位の構図　…… 17
第四節　本多の嘘の役割　…… 19
第五節　輪廻転生の観察者本多の誕生　…… 22

第二章　「奔馬」論　―純粋を貫くための死―
第一節　純粋の体現者　勲　…… 28
第二節　死という孤独を求める勲　…… 30
第三節　純粋を貫くための「自刃」　…… 38
第四節　「論理の世界」の崩壊　…… 42

第三章　「暁の寺」論　―法の受肉者と模倣者―
第一節　「理智」の破棄　…… 48
第二節　「覗見」に現れた「情熱」　…… 54
第三節　認識と行為の矛盾　…… 57
第四節　法の受肉者　ジン・ジャン　…… 61

第四章　「天人五衰」論　―本多と透の自意識―
第一節　観察者本多の終焉　…… 69
第二節　透の特異性　…… 78

第五章　『豊饒の海』論　―「世界解釈」の視点―
第一節　世界の破綻　…… 91
第二節　「世界解釈」の視点　…… 99

結び　…… 104

参考文献目録　…… 109

序

三島由紀夫の『豊饒の海』は、「春の雪」「奔馬」「暁の寺」「天人五衰」の四巻からなる長編小説だ。初出は文芸雑誌『新潮』。連載期間は、一九六五（昭和四〇）年九月号から一九七一（昭和四十六）年一月号である。「天人五衰」の末尾に、三島が自衛隊市ヶ谷駐屯地で自決した「昭和四十五年十一月二十五日」の日付と共に「『豊饒の海』完。」と記載されている。その経緯や内容から、『豊饒の海』は三島の死と関連付けて論じられてきた。こうした作家論的側面だけでなく、テクスト自体も様々な角度から論じられている。

『豊饒の海』を貫流する輪廻転生のモチーフについては、テクストを考察するだけでなく、その典拠となった『浜松中納言物語』の素材論、言葉そのものの意味、三島がどのように捉えていたかも含めて論じられてきた。それと密接に関係する唯識や阿頼耶識は、仏教的な観点、テクスト内の位置づけ、そして三島自体がどのように理解し、作品世界に落とし込んでいったかなどが総合的に分析されてきた。また、「神風連」などテクスト内で描かれる史実については、先行研究において、三島が読んだ関連資料について明らかにするのは勿論のこと、「神風連史話」の三島の創作と史実のままの文とが精査され、論じられている。

登場人物については、輪廻転生する清顕やその転生者たちに留まらず、それを観察する本多繁邦などの周りを囲む人物たちに至るまで分析され、論じられてきた。中でも、本多は観察者という立場で唯一四巻全てに登場することから、多く論じられている。これら登場人物について論じる中で、転生者の真偽なども論じられてきた。

三島の他作品との比較も積極的に行われ、その作品群は『仮面の告白』『禁色』『金閣寺』『鏡子の家』『午後の曳航』など枚挙に暇がない。こうした側面から、『豊饒の海』は、作家三島由紀夫の集大成という位置づけが確立されていく。

発表当時、三島は自ら「『豊饒の海』について」（初出　毎日新聞一九六九年二月二十六日）と題して『豊饒の海』について言及している。そこで三島は、『豊饒の海』を「世界解釈の小説」と評した。この言葉から、三島が小説の中でどのように「世界解釈」しているのかが今日まで論じられることになる。

「春の雪」「奔馬」発表当時は、各作品を個別に論じることが多かった。しかし、「暁の寺」からは、観察者本多を中心とした物語が展開していることを磯田光一氏が“認識者”に徹した人物が主人公になるのである。」[注1]と指摘したことからもわかるように、一つの長編として捉える見方が強まっていく。三島の没後、先にも述べたように『豊饒の海』は三島の遺書のような位置づけをなされ、作者の死と関連付けて論じられた。八十年代に入

ると、七十年代の作家論の延長から、他作品との関連性、三島作品に一貫して表れるモチーフや思想を読み解こうという動きが活発になる。八十年代から九十年代に渡って、再度作品そのものの論が増え、登場人物の考察や、作品構造を明らかにしようとする動きが活発になった。二〇〇〇年代に入ると、有本伸子氏（「『豊饒の海』時系列データ表」二〇〇〇年九月）や奈良崎英穂氏（「『豊饒の海』における主人公たちの年齢について」二〇〇一年三月）によって、テクスト内の時系列が年表としてまとめられた。谷口敏夫氏は、二〇〇一年から二〇〇四年にかけて各巻を二〇一二年には『豊饒の海』全体のテクスト内の用語の分類を行うなどして小説構造の可視化をはかるなど、『豊饒の海』テクスト内情報のデータ化がなされた。今日では創作ノートの調査が進み、構想の段階から最終原稿への変遷など創作過程が明らかになってきている。

輪廻転生と夢によって繋がれたこの四部作を、三島は「世界解釈の小説」と銘打っている。本論は、三島がどのような方法で「世界解釈」をしようとしたのか。また、それによって何が示されたのかを主題とし、各巻ごとに章を分け、「世界解釈」の方法をテクストから考察していく。

第一章では、「春の雪」の嘘を核とした作品構造に注目する。松枝清顕と綾倉聡子の関係は、清顕の嘘を発端とした関係である。この二人が嘘によって繋がることで、「至高の禁」を犯し、清顕を死へと導く。死とは即ち転生の準備である。嘘が清顕を転生へと向かわせたのだ。また、二人の嘘を発端として、「理智」的であった本多が嘘を付き、清顕を助けるために「情熱」を燃やす。本多の変化は、次巻の転生へと繋ぐ重要な役割を担っている。以上のように、テクスト内の嘘を整理、考察することで、輪廻転生の起点としての「春の雪」を解明していきたい。

第二章では、「奔馬」の勲の死を、純粋を貫くための行為と位置づけて考察していく。勲の死について考える上で、彼の持つ純粋や忠義の定義、神風連への傾倒は大きな意味を持ってくる。これらを考察すると共に、「春の雪」から続く嘘の役割、転生を観察する本多の「理智」と「情熱」の問題についても合わせて論じていきたい。これらを考察することで、勲の死の持つ役割を明らかにすると共に、「春の雪」との繋がりについても明らかにしていきたい。

第三章では、「暁の寺」で『豊饒の海』における法、唯識、阿頼耶識が前面に打ち出されていることに注目する。法を受肉するジン・ジャンと法を模倣する本多の関係を中心に、唯識、阿頼耶識の作中での位置づけを定義したい。また、本多に付与される「覗見」の問題について、その出現の理由と意味を明らかにしたい。このように、転生、観察どちらの意味でも大きな転換期を迎えることから、「暁の寺」で提示されるものは、「天人五衰」に

とっても大きな意味を持つと考えられる。

第四章では、「天人五衰」に登場する本多と透の自意識に注目した。二人の自意識は「瓜二つ」であり、「悪」である。本多の観察及び透への教育の過程を考察すると共に、観察者本多が「天人五衰」で観察したものを本多と門跡の月修寺の場面を考察することで明らかにしたいと考えている。

一方透については、転生者たちとは異なる観察者としての側面に注目しつつ、何故夭折するのでは無く、失明という結末を迎えたのかを明らかにしていきたい。

第五章では、これら全てを『豊饒の海』という一つの作品として論じていく。各巻の作品構造上のキーワード、嘘、純粋、法が、どのように『豊饒の海』の終焉へ影響しているのかを明らかにする。また、三島の他作品と類似する表現を明らかにすることで、三島作品に貫流するテーマも認められると考えられる。

最後に、各巻で示された「世界解釈」のための視点から、『豊饒の海』においてどのように「世界解釈」されたのかを考察していく。その視点とは、「春の雪」、「奔馬」で最初に提示、実践された輪廻転生の視点、「暁の寺」で提示された唯識と阿頼耶識という法の視点、『豊饒の海』を通して表現された時間の流れの視点の三つの視点である。その三つに加え、第五章では、本多と聡子の対比による世界の視点を加える。この四つ目の視点について、再度「天人五衰」の最後、本多と聡子の月修寺の場面を取り上げて考察した上で、四つの視点から、どのように「世界解釈」がなされ、何が示されたのかを明らかにしたい。

注

（注１）磯田光一「“見えすぎる眼”の欲情　三島由紀夫『暁の寺』『群像』二十五巻十号　講談社　一九七〇年十月　三一〇頁

なお、本論のテキストは以下に拠る。

「春の雪」「奔馬」

三島由紀夫『決定版　三島由紀夫全集』第十三巻　新潮社　二〇〇一年十二月

「暁の寺」「天人五衰」

三島由紀夫『決定版　三島由紀夫全集』第十四巻　新潮社　二〇〇二年一月

第一章「春の雪」論
―嘘を核とする作品構造の解明―

第一節　「春の雪」を構成するモチーフ

『豊饒の海』第一巻「春の雪」は、その後続く夢と輪廻転生の物語の始点である。『豊饒の海』における輪廻転生の役割について、小林和子氏は次のように位置づけている。

この世界を成立させている根本理念として、作者によって敢えて選び取られたところの一種の方法論であった。[注1]

今後の物語を牽引する方法が輪廻転生なのだ。それが示された「春の雪」では、他三巻とは違い、転生をその身で証明する転生者が登場しない。輪廻転生が行われていない「春の雪」において、何が物語の展開を支えているのかについて明らかにする。

第一巻は「優雅」をめぐって展開される物語といってもよいほどで、それは重要なキーワードとなっている。[注2]

田坂昂氏が指摘するように、「優雅」は、物語を牽引するモチーフだ。清顕だけでは無く、聡子もまた「優雅」な人間であることから、物語のモチーフに「優雅」があることは疑いようも無い。しかし、清顕は生まれながらの「優雅」な人間では無い。幼少期綾倉家に預けられていた際に身に着けたものだ。そこに、清顕が聡子を疎ましく思う理由がある。

この優雅の出所としての「宮廷の文化的精華」を幼少期にかいなでするだけであった清顕が、優雅を内在した人間に負い目を感じざるをえないのは当然である。[注3]

柴田勝二氏の指摘の通り、清顕の自尊心が聡子に傷つけられるのは、聡子が生まれながらの本物の「優雅」な人間だからだ。この劣等感こそ、清顕が聡子を疎ましく思う理由である。だからこそ、清顕は本物の「優雅」を求めた。『優雅といふものは禁を犯すものだ、それも至高の禁を』（「春の雪」第二十五章）とし、自身の持つ「優雅」を高めるかのように清顕は聡子との禁忌の恋へと突き進んでいく。

続いて、夢について。清顕が見る夢は、夢日記として本多に託され、『豊饒の海』繋ぐ重要な役割を担っている。夢の役割について、蘭香代子氏の論を引用する。

無意識の意識化である「夢」日記が、前座として続く展開の予兆と転生を形づくっているということである。「夢」を暗示として「転生」を生むという前後の軸になって展開されているといっても過言ではない。[注4]

「春の雪」で示される夢は、清顕の行く末を暗示するだけに留まらず、その後の転生者の姿も予言している。夢日記が清顕からもたらされることで、本多は転生者を探す手がかりを得た。『豊饒の海』が『浜松中納言物語』を典拠とした夢と転生の物語であることからも、その重要性が窺い知れる。

先行研究では、『豊饒の海』全体を貫く輪廻転生のモチーフを夢が支えるという構造の典拠となった『浜松中納言物語』との関連性も論じられた。その中で、「春の雪」と『浜松中納言物語』の構造の類似性が指摘された。一方で、寺田透氏の『『豊饒の海』と『浜松中納言物語』との比較に意義を認めない。」[注5]という意見もあった。しかし、對馬勝淑氏は、典拠について「連載途中にそのことを指摘できた者は、たぶん皆無であっただろうと言っても過言では無い」[注6]と指摘した後、三島が『浜松中納言物語』を典拠とすると銘打った理由を次のように推論している。

> 作者三島由紀夫の読者に対する一種の「挑戦」ではなかったか、と考える。ここに言う「挑戦」とは、野坂昭如などに見られるような軽薄なケンカ好きとは異なって、慎重な計算のもとになされた、自己の文学的教養（これも一般的な意味ではなくもっと深い意味で）に裏打ちされたところの、強い自負心の表明みたいなものとしてのそれである。[注7]

對馬勝淑氏は、典拠と明言することで手の内を見せた三島に、強い自負心を見たのである。一九七六（昭和五十一）年に出されたこの論は、一九九九（平成十一）年においても西本匡克氏が「三島由紀夫は、自作品に対する解説や、彼の日記風エッセイ評論集の中で創作意図などを多く書き残している。」[注8]という言葉と共に肯定している。

以上のように、「春の雪」は多くのモチーフを内包した物語である。しかし、展開の中心は清顕と聡子のすれ違いだ。二人にすれ違いが生じる要因こそ、「春の雪」の展開を支えているものだ。ここでは、登場人物たちの嘘がそれと定義したい。まず、その作中の嘘について、佐藤秀明氏の指摘を引用する。

〈嘘〉をめぐる挿話は、〈嘘〉が紡ぎ出す物語となって、「夢と転生の物語」という枠（フレーム）を脅かすかもしれない。なぜなら、紡ぎ出される物語は、ほかならぬ〈嘘〉が構成しているのであるから。[注9]

物語は嘘によって展開し、その重要度は、『豊饒の海』が掲げる「夢と転生の物語」という枠を脅かしかねない程だと佐藤秀明氏は言う。確かに、「春の雪」においては、嘘の応酬によって清顕と聡子の関係の変化が促されているのは明らかである。その点で、転生者の問題が発生する以前の「春の雪」においては、「夢と転生の物語」という枠組みよりも重要視されるべきモチーフと言える。また、清顕と聡子の間だけではなく、他の登場人物もそれぞれの立場で嘘をつくことにより、その後の展開が起きている。清顕からタイの王子たち、蓼科から清顕、本多から同級生、それらも含めて、嘘は「春の雪」を構成する重要なモチーフであり、考察すべき問題だ。

そこで、本章では、登場人物たちがついた嘘に注目し、「春の雪」について考察していきたい。以降、作中でつかれた嘘と、それによって生じた事柄についてテクストを紐解いていく。

第二節　清顕と聡子を繋ぐ嘘の役割

「春の雪」において嘘の影響が顕著に表れているのは、清顕と聡子の関係である。当初、清顕は聡子からの好意を疎ましいと感じ拒絶していた。しかし、最終的に、聡子を求めた清顕を聡子が退けるという結末へと向かう。この変化も、嘘によるところではないか。それを明らかにすべく、この二人の関係に関わる嘘について整理していく。まず、清顕がタイの王子たちについた嘘を取り上げる。

> 若い虚栄心が、咄嗟の間に、清顕にかう言はせてしまつた。
> 「日本ではさうやつてお互ひの写真を交換する習慣はないけれど、近いうちにきつと彼女を御紹介しませう」（「春の雪」第六章）

清顕は、「若い虚栄心」に駆られて嘘をつく。引用したようにタイの王子たちへ約束しながら、清顕は、「聡子は女友達であると同時に敵」（「春の雪」第六章）という心持だ。しかし、あたかも聡子を恋人かのように王子たちに「御紹介しませう」と言っている。この時の清顕は、王子たちに嘘をつくことで自分の自尊心を守った。ところが、この嘘が清顕を傷つけてしまうことになる。

今では彼が自尊心から拒んでゐたものすべてが、逆に彼の自尊心を傷つけてゐた。
（「春の雪」第六章）

ここでの自尊心は、先の「若い虚栄心」の出所である。他者からの侮蔑を嫌う清顕は、その自尊心を守るべく拒み続けていたものを、あたかも持っているかのように嘘をついた。つまり、自ら拒んでいたにも関わらず、聡子のことを恋人だと嘘をついたことで、自分の行いを自分で否定することになった。これにより、清顕が自尊心を何よりも重んじる青年であることが明らかになった。そのために、清顕は自尊心を傷つける聡子の存在を疎ましく思っているのだ。次に、先に引用した場面と前後するが、清顕と聡子が作中で最初に二人きりで会話をした場面を見ていく。

「私がもし急にゐなくなつてしまつたとしたら、清様、どうなさる？」
と聡子は抑へた声で口迅に言つた。
尤も聡子は昔からそんな風に、故ら人をおどろかす口ぶりをすることがあつた。
意識して芝居がかりにしてゐるのではあるまいが、聴手をはじめから安心させる悪戯気などはみぢんも顔にあらはさず、大事中の大事を打明けるやうに、大まじめで、悲愁をこめて言ふのである。
馴れてゐる筈なのに、清顕も、ついかう訊かずにはゐられない。
「ゐなくなるつて、どうして？」
無関心を装ひながら不安を孕んだこの反問こそ、聡子が欲しがつてゐたものに他ならない。
「申し上げられないわ、そのわけは」
かうして聡子は、清顕の心のコップの透明な水の中へ一滴の墨汁をしたたらす。防ぐひまはなかつた。（「春の雪」第三・四章）

この会話の主導権は聡子にある。そのために、清顕は「聡子が欲しがつてゐたもの」を乞われるままに返してしまう。この状況について清顕は「これが彼をして聡子を憎ませるもとになるのだ。」（「春の雪」第四章）と述べている。つまり、清顕が聡子を疎ましく感じる理由の一つに、聡子に主導権を握られることへの苛立ちも含まれるのだ。清顕は、まるで聡子の掌の上で転がされているような現状に苛立ち、自分が聡子に深い関心を持ってしまうことに不満を持っていた。相手よりも優位な立場でありたい清顕にとって、聡子の言

動は自尊心を傷つけるものだった。それは、彼女が生まれながらの「優雅」な人間であり、清顕の二歳年上という変えようのない点において勝っているからだ。そういった点で清顕より勝る聡子は、清顕の嫉妬の対象であり、嫌悪すべき敵として存在している。それ故に、清顕は次のような考えを巡らせる。

『どうせう。どうやつたら、それが聡子なんかとは何の関はりもない、僕自身の抽象的な不安のあらはれだと、人を納得させることができるだらう』（「春の雪」第四章）

清顕は、自身の言動が彼女とは何ら関係ないことを証明したいと考えている。しかし、そう考えている時点で、清顕は聡子に支配されていると言えるだろう。聡子と離れたいと思えば思うほど、清顕は聡子のことを考えずにはいられない。この悪循環もまた、清顕に嫌悪を抱かせた。今のままの清顕では、聡子から脱却することは不可能だ。言い換えれば、清顕が変われば、聡子から脱却することが可能だということになる。そこで、清顕は新たな自分を作ることで、現状打破を図ろうと考えた。その打開策が嘘を綴った手紙を聡子に送るというものだ。

清顕は永ひ躊躇の末に、たうとう昨日、聡子に宛てて、物狂はしい侮辱の手紙を書いてしまつてゐた。（「春の雪」第六章）

この「侮辱の手紙」は、清顕が王子たちに対して、恋人が居るかのように嘘をついた会話の前に送ったものである。聡子からの脱却を願うあまり、清顕は自分を偽ることにした。聡子が好ましいと感じている清顕は消え失せたと綴った嘘の手紙によって、虚像と実像の入れ替えを行おうとした。このように、清顕が手紙上に嘘の自分を作り上げたのもまた、自尊心を守るためである。しかし、自尊心を守るための嘘が清顕自身を追い詰める。ここで、清顕が聡子へ送った手紙の一部を引用する。

『……あなたの威嚇に対して、こんな手紙を書かなければならないのは、小生としても甚だ遺憾なことです』といふ切口上で、その手紙ははじまつてゐた。『あなたはつまらない謎を、いかにも怖ろしい謎のやうに装つて、何の鍵も添へずに小生に手渡し、小生の手を痺れさせ真黒にしてしまひました。小生はかういふことをするあなたの感情的動機について、疑問を呈せずにはゐられません。そのやり方にはまるきりやさしさが欠けてゐて、愛情はもちろん、友情の片鱗も窺はれませんでした。（「春の雪」第

六章）

そこには、聡子の行動に対する強い非難が綴られており、清顕の聡子への反発心が滲み出ている。この部分だけを取れば、「侮辱の手紙」であろう。虚像の清顕に現実味を与えるには、実際に清顕が聡子に抱いている侮辱の感情を綴る必要がある。こうすることで、実際の清顕から嘘の清顕まで地続きになる。こうした下準備を経て、聡子への嘘の告白が綴られる。聡子への非難に続いて、清顕の嘘についても引用する。

しかし今では、あなたのすべての努力も企図も水泡に帰したと云へるでせう。実に不快な心境にゐた小生は、（間接的にあなたのおかげで）、人生の一つの閾（しきゐ）を踏み越えてしまゐました。たまたま父の誘ひに乗つて、折花攀柳（せつくわはんりう）の巷に遊び、男が誰しも通らなくてはならぬ道を通りました。ありていに言へば、父がすすめてくれた芸者と一夜を過したのです。（「春の雪」第六章）

手紙に書かれた「芸者と一夜を過ごしたのです。」は、勿論嘘だ。しかし、清顕の父が芸者遊びを清顕に勧めている事実はある。ここで清顕は、事実と虚偽を見事に織り交ぜて綴った。尤もらしい状況を織り交ぜることで、聡子の不安を煽ろうと考えたのだ。しかし、何故、あたかも女の扱いについて学んだような嘘が聡子の不安を煽るのか。清顕に特定の恋人や許嫁が出来たというわけではないが、聡子にとっては効果的であった。その根拠は、次に引用する手紙の文末にある。

あなたが子供のときから知つてゐた、あの大人しい、清純な、扱ひやすい、玩具にしやすい、可愛らしい「清様」は、もう永久に死んでしまつたものとお考へ下さい。……（「春の雪」第六章）

「「清様」はもう永久に死んでしまつたものとお考えください。」と書くことで、聡子の思い通りになる「清さま」からの脱却を図った。これは、清顕の自尊心を守るための手紙であり、聡子への決別の手紙でもあった。ところが、この手紙を出した後に、聡子にこの手紙を読まれると不都合な事態が起きた。それが、王子たちに聡子を紹介するという約束だ。この約束を果たすためには、聡子の協力が不可欠である。しかし、手紙を読まれ、聡子が清顕と決別するようなことがあっては、この約束を果たすことが出来ない。この状況は、先に引用した「今では彼が自尊心から拒んでゐたものすべてが、逆に彼の自尊心を傷

つけてゐた。」という言葉通りの状況だ。清顕の自尊心を守るべく送った手紙が、逆にその自尊心を守るためについた別の嘘の破綻を呼ぶ手紙にもなってしまった。そこで清顕は、王子たちとの約束を守るべく、聡子に手紙の破棄を約束させる。

「だから、何も言はずに約束して下さい。僕の手紙が届いたら、絶対に開封せずに、すぐ火中すると」

「はい」

「約束してくれますね」

「いたします」（「春の雪」第六章）

手紙の内容については、実に計算された手法で嘘を事実のように綴っていた清顕だが、その破棄については粗略だ。本当に手紙が読まれることを怖れるのならば、聡子の元へ行き、実物を自ら破棄するべきである。しかし、清顕は手紙の破棄を徹底しようとはしない。それは、清顕がどこかで自分の思った通りに物事が運ぶことを疑っていないからだ。清顕の自尊心は、彼にとって都合良く動くことが当たり前であるかのように捉えている。そのため、自身の行動と共に、相手の言動の真偽の程を測る場合も軽率になっている。

「ああ、あれでございますか。お電話のあとすぐお姫様からお話を伺ひまして、あくる日お手紙が届くやいなや、この私が封を切らずに火中いたしました。そのことでございましたら、どうぞ御放念下さいまし」（「春の雪」第十章）

聡子の同意の返事、蓼科の発言により清顕は自分の提案が受け入れられたと安堵する。何度か疑念に駆られるものの、事実を執拗に確かめることなく、言葉のままに受け取るのだ。この軽率さは、自尊心が生んだ弊害とも言える。そして、清顕を裏切るように、二人の言葉が嘘であったことが、みねを介し、飯沼から発覚する。清顕は「聡子があれだけ否定しながら、実は清顕のあの手紙を読んでゐたのだ」（「春の雪」第二十章）と幼稚な怒りを覚える。自分にとって不都合な出来事は、全て他人に起因すると清顕は考えた。

怒りのあまり清顕は、事件の発端がすべてあの嘘の手紙にあり、最初に清顕のついた嘘からすべてが起こつてゐることを忘れてしまつた。（「春の雪」第二十章）

清顕は、事の発端が自分にあることを忘れ、「ただ何事も聡子の背信に結びつけて考へ」

（「春の雪」第二十章）ている。この怒りは、清顕の嘘を知りながら、その事実を隠す聡子に対する怒りだ。言い換えれば、清顕は、聡子が知らぬ間に自分より優位に立っていたことに怒りを覚えたのだ。そして、清顕の手紙の内容が嘘だと知っていたからこそ、聡子は清顕を唐突に雪見に誘うなどの大胆な行動を取れたと清顕は思い至る。聡子の清顕に対する今までの対応を清顕は次のように言い変えた。

『聡子が一方では僕を子供だと云つて非難しながら、一方では僕を永久に子供のままに閉ぢ込めておきたかつたことは、もう疑ひの余地がない。何といふ奸智だらう。時折は人にたよるやうな女らしい風情を見せながら、心の中では軽侮を忘れず、奉るやうな素振りをしながら、実はあやしてくれてゐたのだ』（「春の雪」第二十章）

清顕は、聡子が清顕の幼さを非難しながら、その実、永遠に子供のままでいて欲しいと考えていたと結論付けた。その聡子の態度に清顕は怒りを感じる。

清顕から聡子への嘘、清顕から王子たちへの嘘、聡子から清顕への嘘は連動しており、嘘を重ねることで展開している。そして、清顕の自尊心を守るための嘘の破綻を「聡子の背信に結びつけて考へた」清顕は、聡子との接触を拒むようになる。電話も手紙も拒む様は、自分の思い通りに行かずにへそを曲げた子供だ。しかし、このまま聡子を拒み続ける一貫性を清顕は持ち合わせていない。聡子に勅許が下りると、清顕は再度聡子と接触しようと行動を起した。

「一度だけお会はせいたしませう。その代り、お手紙は返していただけますでございませうね」

「いいよ。しかしただ会はせるだけでは足りない。お前は遠慮して、本当に二人きりにしてくれなければいけない。手紙はそのあとで返す」（「春の雪」第二十六章）

この会話は、聡子に勅許が下りた後に、清顕が蓼科に聡子との密会の手引きを頼んだ場面だ。清顕が聡子を拒んでいた間に届いた手紙は、既に清顕が「わざわざ山田の目の前で、厚い手紙を千々に引き破いてみせて、それを捨てるやうに命じた」（「春の雪」第二十四章）後であり、手紙が手元に無い清顕の「手紙はそのあとで返す」は明らかな嘘だ。しかし、蓼科がその事実を知らない限りは、真実としてこの会話を成立させる効果を持っている。そのことを、清顕は聡子と蓼科の嘘から学んでいた。

『前には破いてくれとたのんだ手紙を読まれてしまつたのだから、今度は逆に、さうだ、あの粉々に引き裂いた手紙を活かせばいいのだ』（「春の雪」第二十六章）

先に挙げた聡子と蓼科の嘘を受けて、清顕はこの嘘を切札とすることを決めた。自尊心を傷つけられた清顕による一種の復讐劇である。このように、嘘はまた新たな嘘を生んだ。これにより、清顕は聡子との密会を実現する。その後に「手紙は返せない。又かうして逢ひたいからだ」（「春の雪」第二十七章）と蓼科に言い、嘘によって結んだ約束を反故にした。勿論、手紙は既に破棄しており、返すことは出来ない。手紙を持っているという嘘を事実であるように見せながら、清顕は聡子との関係を継続していく。しかし、この嘘の上乗せは、今までの自尊心を守るための独りよがりなものとは異なる。

聡子がつと目を上げた。清顕と目が合つた。その刹那、澄んだ激しい光りがよぎつて、清顕は聡子の決意を知つた。

（中略）

「いいのよ、蓼科。清様があの手紙を快く返して下さるまで、かうしてお目にかかる他はありません。お前と私を救ふ道は他にはありません。もしお前が、私をも救はうと思つておいでなら」（「春の雪」第二十七章）

この時聡子は、清顕の発言を嘘と察しながら従っている。この清顕の嘘は、今までのものとは目的が違う。清顕の自尊心を守ることが目的なのではなく、二人の秘密の恋を継続させることが目的だ。そのために、聡子は清顕の嘘を暴くことなく従う。ここで聡子の協力を得た清顕は、この秘密の恋の主導権を握ったかのように見える。しかし、聡子の決意無しには蓼科を説得することは出来なかった。ここでもまた、生まれながらの「優雅」である聡子に対し、本当の意味では優位に立てない。一見、清顕の方が優位であるように見せながら、その実、聡子の方が優位に立っている。何故なら、聡子は意志を持って決意を示しているからだ。その彼女が、衝動的に行動する清顕より優位な立場に立つのは当然だ。この優位性から、より能動的に「至高の禁」を犯すのは、清顕の言い分を受けることで自分を下げた聡子の方だと言える。勿論、そう結論付ける上で、協力関係を結ぶ前の聡子の様子を無視することは出来ない。

聡子が一言も言葉を発することができないこんな状況へ、彼女を追ひつめたのは清顕だつたのだ。年上らしい訓戒めいた言葉を洩らすゆとりもなく、ただ無言で泣い「て

ゐるほかはない今の聡子ほど、彼にとつて望ましい姿の聡子はなかつた。（「春の雪」第二十七章）

今まで黙らせることの出来なかった聡子を黙らせた。それは、清顕の優位性の現れのようだ。ところが、直後に清顕は「聡子のいざなひのままに動く」（「春の雪」第二十七章）ことになる。清顕がこのことに嫌悪を抱いていないのは、聡子を自分が追いつめたと考えているからだ。これは、清顕の受け取り方が変化したことにより、聡子の行動に反感を持たなくなったためだ。つまり、聡子の方が優位な関係は、何ら変わっていない。聡子は自分を下げることで、恰も清顕が優位なように振る舞っている。それは、聡子が清顕との秘密の恋を続けるために見せた清顕への無言の嘘であった。

嘘の応酬の後に目的が合致した清顕と聡子に対し、蓼科は二人の共犯者となった。

蓼科が先頃、松枝家の山田に会つて、清様のおつきになつた嘘を知つてしまつた。清様が持つていらつしゃるやうに装うていらした手紙は、実は、夙(と)うに山田の目の前で、破り捨てておしまひになつてゐたものだと、蓼科が知つてしまつた。……でも、蓼科のことで御心配なさるには及ばない。蓼科はもう万事を諦めて目をつぶつてをります。（「春の雪」第三十四章）

後に清顕が持っていると偽っていた手紙が既に破棄されたものだと蓼科に露見する。しかし、既に清顕と聡子の共犯者となっていた蓼科はそれを咎めない。全てに目をつぶり協力者という立場を全うする心積もりを決めていた。この三人の姿から、嘘が三人を運命共同体へと変化させていることが明らかになった。では、何故蓼科は清顕と聡子の共犯者となることを選んだのか。

蓼科はいつのまにか、一つの説明しがたい快さの虜になつてゐた。自分の手引きで、若い美しい二人を逢わせてやることが、そして彼らの望みのない恋の燃え募るさまを眺めてゐることが、蓼科にはしらず、どんな危険と引きかへにしてもよい痛烈な快さになつてゐた。（第三十七章）

蓼科にとって、二人の手引きをすることが生き甲斐になっていた。そして、「一つの説明しがたい快さの虜」になっていた蓼科には、清顕の嘘は問題ではなくなっていた。嘘によって展開していた三人の関係は、嘘をついた側とつかれた側というものから、「望みのない

恋」をする二人と協力者という関係に変わった。つまり、三人の関係は嘘の応酬の後に、嘘を介さない関係へと移行したと言える。

しかし、ここまで嘘を介して展開してきた関係が、本当に嘘を介さない関係になったと言えるのだろうか。確かに、清顕と聡子そして蓼科の間に嘘の応酬はなくなった。ところが、その代わりに世間への大きな嘘を三人は共有する。この世間への大きな嘘とは何か。それは、清顕と聡子の秘密の恋のことだ。二人の恋は宮家に対する裏切りであり、その裏切りを隠す行為は、大きな嘘と言い換えることが出来る。三人の関係はやはり嘘によって支えられていると言えるだろう。

続いて、大きな嘘を三人が共有している理由を解明していきたい。秘密の恋を守るという目的は一致しているものの、その秘密の恋の持つ意味は、三者三様である。まず、蓼科にとっての二人の秘密の恋の意味を明らかにしていく。

蓼科にとって二人の恋を支えることは生き甲斐だ。しかし、それ以外にも理由が存在する。

> 決して聡子を生娘のまま、松枝の世話する婿に与へてはならない。さうしてひそかに、松枝の鼻を明かしてやることができるのだ。しかしこのことは、誰にも知らせず、私にも相談せず、お前の一存でおかした過ちのやうに、やり通してくれなくてはならない。（「春の雪」第四十一章）

綾倉伯爵の密かな復讐を蓼科は請け負っていた。勿論、宮家との縁談が決まった時点で綾倉伯爵との口約束を破棄すべきであることを蓼科が承知していない筈はない。この口約束を破棄し、宮家に嫁ぐに相応しい清らかな女として聡子を保つことが求められると言っても過言では無い。しかし、蓼科はその役割を放棄し、聡子の恋を応援するように立居ふるまう。

> これは聡子に対する本物の愛情に拠るものだつたと云へようが、同時に蓼科は、事ここに至って生木を裂くことが、聡子の自殺を惹き越しはしないかと怖れたのである。（「春の雪」第三十七章）

このように、蓼科は「聡子の自殺」を危惧し、二人の協力者でいることを決めた。その危惧は、聡子の実母よりも聡子を見続けてきた蓼科の愛情の現れだ。この愛情は、飯沼とみねの仲を手引きする時にも顔を覗かせている。一見、二人の仲を手引きすることは聡子

と何ら関係の無いことのように見える。しかし、飯沼を懐に入れることは、松枝家の内側に聡子と清顕の恋の協力者を得ることと同義だ。清顕と共に飯沼を抱き込むことは、聡子の恋をより円滑に進めるために有益だと長年の経験から理解していた。このように、最初から蓼科の行動は聡子のために行われていた。全てを諦めて二人の恋を応援しているのではなく、蓼科は進んで二人の秘密の恋を支えている。綾倉伯爵のお手付きとなり、伯爵に忠実であった蓼科であるが、「八年ののちには、又お忘れになるのでございませうが……」（「春の雪」第四十一章）という発言から、伯爵への忠誠より聡子への愛情が上回っていることは明らかだ。つまり、蓼科の聡子への愛情を最大限に表現した結果が、二人の共犯者となることに繋った。

続いて、聡子にとっての秘密の恋の意味について考える。当初から聡子は清顕に恋をしている。清顕と関係を持つことは聡子の念願であることは明らかだ。しかし、聡子は最後には清顕を退け出家してしまう。聡子にとって清顕との逢瀬とはどのような意味があったのか。先にも指摘したが、「至高の禁」を能動的に犯すのは聡子だ。

> 清様と私は怖ろしい罪を犯してをりますのに、罪のけがれが少しも感じられず、身が浄まるやうな思いがするだけ。（「春の雪」第三十四章）

清顕との逢瀬は罪であるとしながら、聡子は身が浄化されるかのように感じている。その罪の「すぐかたはらに絶望が控へてゐた」（「春の雪」第三十四章）ということは、いつ絶望的な終わりが来るとも知れない状況だということだ。それにも関わらず、聡子は「もし永遠があるとすれば、それは今だけなのでございますわ。」（「春の雪」第三十四章）と本多に告げている。これは、死の直前と同じ現象ではないだろうか。聡子が清顕と過ごす時間は、死の間際に見る走馬灯のように充実し、意識を失う直前に痛覚が鈍るように善悪の感覚を狂わせていた。聡子が清顕と住む二人だけの世界は、ゆっくりと絶望までの距離を縮めていって大往生を迎える。二人だけの世界の最後を受け容れた聡子は、未練を見せずに清顕のもとを去った。聡子にとって清顕との秘密の恋は、人生最後の恋であった。

では、「身が浄まる」とは、どういうことか。聡子の身の浄化は、清顕の言う本物の「優雅」へと高まっていくことと同義ではないだろうか。

「奔馬」において、勲は「純粋」行為を遂行するには、罪を怖れてはならないと語っている。詳しい論考は次章に設けるが、この理論に拠れば、「純粋」な罪が存在するということだ。穢れとは、他の部分と違う汚れのことを言う。罪一色に染まっているのであれば、それは穢れの無い「純粋」な状態と同じ状態だと言える。罪によって斑に染まっていたも

のが、いよいよもって全身を染め上げると、それはかえって「身が浄まる」心地になるのではないか。聡子は、全身を「至高の禁」という罪に染め上げることで、その身が浄化されていると感じた。そして、これは清顕が言うところの「優雅」だ。俗世の善悪など意に介さず、寧ろ浄化されていく様は本物の「優雅」だった。

では、清顕はどうか。清顕はその瞬間の感情を優先する刹那的な青年だ。聡子との秘密の恋に懸想するのも、聡子個人への恋情では無い。清顕にとって、聡子個人ではなく、聡子の立場が重要であった。

何が清顕に歓喜をもたらしたかと云へば、それは不可能といふ観念だつた。絶対の不可能。聡子と自分との間の糸は、琴の糸が鋭い刃物で断たれたやうに、この勅許といふきらめく刃で、断弦の迸(ほとばし)る叫びと共に切られてしまつた。彼が少年時代から久しい間、優柔不断のくりかへしのうちにひそかに夢み、ひそかに待ち望んでゐた事態はこれだつたのだ。(「春の雪」第二十四章)

清顕が求めたのは、不可能性だ。つまり、ただの聡子では無く、勅許の下りた聡子でなければならなかった。絶対に関係を持ってはいけない立場にある彼女と関係を持つことが、清顕には魅力的だった。この不可能性に懸想する様は、後に本多が抱くジン・ジャンへの恋心と酷似している。ただし、本多が隔絶していることに喜びを得るのとは違い、清顕はそのまま隔絶しているだけでは満足せずに、そこに踏み込んで行く。

『優雅といふものは禁を犯すものだ、それも至高の禁を』と彼は考へた。この観念がはじめて彼に、久しい間堰き止められてゐた真の肉感を教へた。思へば彼の、ただたゆたふばかりの肉感は、こんな強い観念の支柱をひそかに求めつづけてゐたのにちがひない。彼が本当に自分にふさわしい役割を見つけ出すには、何と手間がかかつたことだらう。

『今こそ僕は聡子に恋してゐる』

この感情の正しさと確実さを証明するには、ただそれが絶対不可能なものになつたといふだけで十分だつた。(「春の雪」第二十五章)

清顕の願いは、「至高の禁」を犯すことだ。ただ不可能なものとして眼前にあるだけでは満足せず、それを犯し、禁を破ることに魅かれた。聡子ほどの決意も無いまま、清顕はその欲望を満たすためだけに恋をする。一方聡子は、清顕よりも深く全身を罪に染め上げる

程に「至高の禁」を犯していく。刹那的な清顕は、「優雅」という観点において、聡子のそれを上回ることは出来ない。

秘密の恋に対する姿勢の違いを明らかにすることで、清顕と聡子の違いも浮き彫りになった。次節から、清顕と聡子の関係を展開させた嘘そのものが持つ意義について考察していく。

第三節　嘘から見える女性優位の構図

清顕と聡子の密会は、蓼科を含めた三人の秘密という名の宮家への裏切りを隠す嘘であった。しかし、蓼科が自殺未遂を起こしたことで、清顕と聡子の関係が両家に露見する。清顕と聡子の間で行われていた嘘の応酬は、両家の宮家への裏切りを隠す大きな嘘となった。この嘘は最後まで宮家に隠し通されるが、決して清顕と聡子の恋が成就することはない。何故、二人の恋は成就しないのか。以降、二人の関係を支えた嘘の意義について考察していく。

前節において、二人の恋が宮家への裏切りを隠す大きな嘘になった後、三人の間に嘘の応酬は必要無くなったとした。しかし、聡子と蓼科の間に、清顕や両家に対する隠し事が生じる。それが聡子の懐妊だ。

「このことは、何もかも一切清様にお知らせしてはいけません。もちろん私の身体のこと一切ですよ。

お前の言ふなりになるにせよ、安心しておいで、他のどなたも容れず、お前とだけ相談して、私が一番いいと思ふ道を選びませう」

聡子の言葉にはすでに妃の威厳があつた。（「春の雪」第三十七章）

ここで、聡子が強い意志によって発言していることが窺える。この強い意志こそ聡子の特徴であり、清顕との違いだ。清顕の介在しない秘密は、聡子に妃の威厳を持たせた。一方清顕は、いかなる場合においても、衝動のままだ。そこに意志も覚悟も存在しない。この意志や覚悟の不在こそ、清顕が優位に立つことができない原因と言えるのではないか。そして、その関係性は、物語の結末にも見て取れる。子どもを下ろした後、強い意志と覚悟によって出家した聡子は、清顕との面会を頑なに拒んだ。行動にも意志や覚悟を持っている聡子の前に、衝動に任せて行動する清顕は、最後まで優位に立つことはできない。この二人の違いにどのような意味があるのか。ここで、再度嘘がつかれた状況及び、その嘘が暴かれた状況について考察していく。

「春の雪」は、清顕がついた嘘から聡子との関係に変化が生じ、その後の物語が展開する。

二人の関係を変える嘘を先についたのは清顕だ。つまり、男から女に向けてついた嘘であった。次に、聡子が清顕に嘘をつく。これは、女から男に向けてついた嘘だ。この二つの嘘は、ついた側の違いはあるものの、嘘が暴かれる時は共に女の手によって暴かれている。具体的に言えば、前者の嘘は聡子が自ら清顕の父松枝侯爵に問いただしたことで暴かれ、後者の嘘は、聡子の行動を侯爵が女中のみねに伝えたことで、清顕に露見した。ついた相手に露見することで嘘は嘘として相手の前に現れる。そして、嘘をついた相手に嘘だと露見したからこそ、「春の雪」は物語が展開していく。佐藤秀明氏は、「読者が〈嘘〉を見抜くことで、〈嘘〉の裏に潜む物語が現れ出る。」[注10]と指摘しているが、本論では、嘘をつくという行動だけ見れば男女の差は無いが、嘘を暴き、ことを露見させるのは常に女だと考える。何故なら、嘘を見抜く時に主導権を握るのは女たちだからだ。男は、女の口を通してのみ嘘を知ることが出来る。それは、蓼科による自殺未遂についても同じ事だ。つまり、清顕と聡子の関係において、聡子が優位であるだけでなく、物語全体を通して、女が男よりも優位であり、物語を展開させていく立場だということだ。何故なら、嘘を嘘として露見させる行為である暴くという主導権を女が常に握っているからだ。

ここで、清顕と聡子の関係について考えていく。二人の関係の変化こそ物語で最も注目すべき点であり、『春の雪』は、二人の恋の物語だ。二人の関係は、聡子からの一方通行だった想いが、聡子に勅許が下りたことを切っ掛けとして双方向になり、禁じられた秘密の恋をするようになる。清顕が勅許によって聡子への恋心に目覚め、聡子と関係を持ったように見えるが、果たして本当に清顕は聡子への恋に目覚めたのだろうか。聡子への恋心と言うよりは、自身の存在意義を「至高の禁」を犯すことに見出したがために、清顕は勅許の下りた聡子との恋に白羽の矢を立てたのではないか。「ただたゆたふばかり」な「優雅の棘」、「無益な毒」であった清顕が、「至高の禁」を犯すことが自分の存在意義と定めたその具体的な行動こそ、宮様の妻になることが決まった聡子との恋だ。ただ、この恋は清顕の一方的な想いでは無い。それは、聡子が、勅許という抗えない状況の中で、清顕の嘘に同調し、能動的に清顕と関係を持つことを決めていることからわかる。また、「未練を見せないつもりでをります」（「春の雪」第三十四章）と強い意志で恋の幕を下ろす覚悟も決めている。ところが、清顕は「至高の禁」を犯すことだけを目的としているために、最後は聡子の決意の前に成すすべなく死をむかえる。

「春の雪」において、清顕が最初に聡子につく嘘は、元々、聡子によってつかされたものだ。何故なら、聡子によって清顕の自尊心が傷つけられた結果、清顕が嘘の手紙を聡子

に送ったからだ。そして、清顕との恋を終わらせるために出家した聡子に、清顕は会うことなく死をむかえる。つまり、清顕から物語が始まり、清顕の死をもって物語が終わるように見せて、その実、聡子によって動かされた清顕が、聡子の意志の前に無力なまま生涯を終えたという構図になっている。

先に、「春の雪」は嘘によって展開する物語であるとしたが、この嘘を産んだのは清顕に嘘をつかせた聡子だ。つまり、聡子によって生み出された嘘によって展開する物語だと言える。

以上のことから、「春の雪」の物語を展開する上で重要なモチーフである登場人物たちの嘘は、物語の牽引者である女性と、それに飲み込まれる男性という図を浮き彫りにした。つまり、「春の雪」でつかれる嘘は、女性優位の象徴なのだ。

第四節　本多の嘘の役割

嘘は女性優位の象徴であるとしたが、「春の雪」における嘘は、清顕や聡子だけのものでは無い。本多もまた、嘘によって物語に参加する人物だ。しかし、本多は積極的に嘘をつく人間ではない。何故なら、本多は当初、嘘をついてまで何かをなすような情熱を持ち合わせていなかったからだ。ところが、本多は嘘をついて清顕と聡子の手助けをすることになる。

> 日ごろの本多にも似合はぬことだが、彼はこの愚物を前に、いかにもおづおづといつはりの告白をすることに喜びを感じた。嘘をつくことから言葉が淀みがちになるのを、思いつめた気持ちと羞恥からさうなるのだと、信じ込んでゐる相手の顔つきが面白かつた。理智があれほど人を信服させるのが難かしいのに、いつはりの熱情でさへ、熱情がかうもやすやすと人を信じさせるのを、本多は一種苦々しい喜びで眺めた。それは又、清顕の目から見た本多の姿でもあつた筈だ。（「春の雪」第三十四章）

ここで、本多は「いつはりの情熱」をもって、嘘の告白をする。自身のために嘘をつくことのなかった本多が、清顕のために嘘の告白をした。その時、本多は自分の持つ「理智」では不可能なことが「いつはりの情熱」を持ってすれば可能なことを知った。そして、そのお手本は清顕であった。清顕は、自分の存在をもって本多を協力者へと仕立て上げた。そして、本多の協力により、別荘に聡子を呼び寄せることに成功する。清顕に協力した本多は、次のような嘘もついている。

「見直したよ。貴様にそんな一面があるとは思はなかつた。でも秘密主義は残つてゐるんだな。彼女の名前ぐらゐ言つてもいいぢやないか」

「房子だ」

と本多は思はず久しく会はない又従妹の名を言つてしまつた。（「春の雪」第三十四章）

ここで、本多が又従妹の房子の名前を出したことに注目したい。本田が房子の名前を出した際、その理由を「思はず」だとしているが、本当にそうだろうか。近しい女性が他に居なかったということもあるが、ここで名前を出している以上、何の意味も無いということはありえない。その上、この時本多は清顕によってもたらされた「いつはりの情熱」をその身に宿している。常ならぬ本多が房子の名を出したのもまた、清顕の影響によるところではないか。それを明らかにするために、本多と房子の関係を明らかにする必要がある。次に、本多の房子についての発言を引用する。

今まで繁邦は、房子のあんまり活気に充ちすぎた体つきや、たえずけたたましく笑うことや、一つ年上の繁邦をからかうやうな口ぶりや、よろづに落ちつきのない挙措が好きではなかつた。房子には夏のダリアの重く暑い美しさがあつたけれども、自分が決してかういふ種類の女を、妻にすることはあるまいと密かに思つてゐた。（「春の雪」第七章）

このように、房子を美しい女だと認めながらも、「妻にすることはあるまい」とも語っている。ところが、情熱を宿した本多は房子の名を口にする。ここで、一つ注目したいことがある。それは、本多の房子への感情が、以前の清顕の聡子への感情に酷似しているというものだ。清顕は当初、聡子を疎ましく思っており、結婚などもっての外であった。一方で、その美しさについては当初から認めるところであった。勿論、清顕が聡子を憎むという形で執着していたことを考えれば、房子に執着していない本多のそれを同じ感情として括ることは難しい。しかし、限りなく似た感情でありながら、全く別の形で心の中に巣くっているということは無視出来ない。この二人の類似性について、本文の言葉を借りて説明していきたい。

もしかすると清顕と本多は、同じ根から出た植物の、まつたく別のあらはれとしての花と葉であつたかもしれない。清顕がその資質を無防備にさらけ出し、傷つきやす

い裸で、まだ自分の行動の動機とはならぬ官能を、春さきの雨を浴びた仔犬のやうに、目にも鼻にも滴をなして宿しているのと反対に、本多は人生の当初はやくもその危険を察して、その明るすぎる雨を避けて、軒先に身をちぢめてゐるはうを選んだのかもしれない。（「春の雪」第二章）

この引用に拠れば、清顕と本多は、一見全く違うが、根本的な部分では同じだという。先に述べた、本多と房子の関係が清顕と聡子の関係と似ているとする根拠はここにある。しかし、互いに近しい女性と似たような関係を築いていたが、本多が房子と疎遠になったのに対し、清顕は聡子と関係を持つようになる。その違いは、「まつたく別のあらわれとしての花と葉」だからこそだ。本多の五井への嘘から、「春の雪」第二章で示された二人の類似性と対関係が証明されたと言えるだろう。

では、清顕と本多が根本的な部分が類似しているのに対し、聡子と房子はどうか。精査しなくとも、二人が全く似た部分を持っていないことは明らかだ。しかし、その具体的な違いを考えるために、更に本多の房子について述べている箇所を引用する。

房子はその陶器のなかの火でもつて、何か言ひやうのない過度の親しみを語つてゐた。それにしてもその頭部の重みは、苛酷な、非難するやうな重みであつた。

（中略）

あんなに誠実のない、あんなに近くにゐながらあんなに無関心な、あんなに今にも飛び翔つてゆきさうな、不安で、浮動的で、水準器の気泡のやうに、傾斜から平衡まで、放心から集中まで、とめどなくゆききする目を、繁邦は見たことがない。（「春の雪」第七章）

この場面で、房子が唐突に本多の膝に頭部を預けてくる。その頭部には、「過度の親しみ」や、「苛酷な、非難するような重み」が感じられた。房子のこの行動は、本多が何も行動を起こさないことに焦れた故に起こしたものであり、本多の気を引くための行動であったのだろう。直接的に本多へ働きかける房子は、世間一般の少女らしい甘え方だ。また、二人の関係の決定権は本多にあり、房子はただその決定を待つことしか出来ない。一方聡子は、嘘を駆使し、常に清顕よりも優位な立場にあった。その優位さを本多も目の当たりにし、房子と聡子が全く違うことを知る。

本多は聡子の、何事も意に介さない、果敢な態度におどろいた。白い洋装で来たの

で、その果敢が一そう加はつてみえたのである。（「春の雪」第三十四章）

房子は無関心な様子であるものの、膝に頭部を預けることで、相手に「過度な親しみを語つてゐた」上に、その重みには、「非難するやうな重み」があった。相手に求めることでその愛を示し、その結末を本多に委ねるという、積極的でありながら受身な態度を崩すことは無かった。それに対し聡子は、清顕に拠りかかることなく、優位な立場で終始自立していた。つまり、清顕と本多がいかに「同じ根から出た植物」であったとしても、相手の女性同士も「同じ根から出た植物」でなければ、同じ関係性を築くことは無い。全く違う種類の女性を相手にしてるという点においても、清顕と本多は「まつたく別のあらわれとしての花と葉」であった。

本多が聡子と二人で自動車に乗っている間、清顕の「信頼と侮蔑」を感じていた。この「信頼」は友人としての「信頼」だ。では、「侮蔑」とは何か。

清顕は、当初から聡子のことを美しいと認めている。彼女は「決して節度を崩すこと」（「春の雪」第三十四章）なく本多の目の前に居た。その上、聡子は勅許を受けていながらも清顕と関係を持っている。決して隙を見せない彼女の前では、本多は手も足も出ない。清顕はこれを的確に見抜いていた。例え本多と聡子が密室で誰の邪魔も入ることのない空間に居ることになったとしても、本多が決して清顕と聡子の関係を脅かすことが出来るはずは無いとわかっていた。それは、「侮蔑」以外の何物でも無い。清顕が自分のことを友人として「信頼」していると共に、男として「侮蔑」していることを、本多は感じ取っていた。

本多が五井についた嘘は、清顕と聡子の逢瀬を実現させるために必要な嘘ではあったが、先に挙げた嘘とは異なる役割も担っていた。本多の嘘によって浮き彫りになったのは、清顕と本多の関係だ。勿論、友人であることは匆々に説明されていたが、「春の雪」第二章において示された「同じ根から出た植物の、まつたく別のあらわれとしての花と葉」としての関係性を具体的に説明する事例が無かった。それが「春の雪」第三十四章の本多の嘘を発端に明らかにされた。本多の嘘は、救いのための嘘であると共に、清顕と本多の関係を浮き彫りにする役割を担っていた。この限りなく似ていながら違うという対比は、『豊饒の海』の中で継承されていく。

第五節　輪廻転生の観察者本多の誕生

前節で清顕と本多の関係性が嘘によって明らかになった。しかし、本多と清顕の関係は嘘だけで結ばれたものでは無い。友人であり、観察者と観察対象という関係だ。そして、

後者の関係は後の転生者と本多の関係にも継承されていく。本多と清顕の関係は、『豊饒の海』全体に影響を与えるものだ。そこで、二人の関係を紐解く前に本多の人物像について整理していく。

その年齢にしてはめづらしい本多の、もの静かな、温和な、理智的な性格にだけ心を惹かれた。（「春の雪」第二章）。

本多について、清顕はこう評している。このことから、本多は、同年代の青年たちと比べ、落ち着きのある「理智的な」人物であることが窺える。また、本多自身もこの性格を自分のものとして認識、納得しており、「暁の寺」で否定するまで本多の本質として位置づけられている。そして、その「理智」的な性格を好意的に取った清顕は、本多を唯一の友人として選んだ。「春の雪」の本多は、将来を見据えて自分の道を決めている。このことから、刹那的に物事を決める清顕とは違う気質を持っていると言える。この時決めた役割を守り、本多は「奔馬」の冒頭では裁判官として有用な人間となっていた。そんな本多は、清顕にとって良い友人であろうと心掛けている。

清顕に対しては、いつも多少鈍感に粗雑にと心がけ、さういふ巧まれた粗雑さなら、共によく受け容れられることを知ってゐた。（「春の雪」第二章）

一見、清顕のことを見下し、世話を焼いているかのように見える。しかし、本多にそうした驕りは無い。そのことに清顕も気づいているからこそ、本多を友人としている。では、本多が行う清顕に対する配慮はどうして生まれたものなのか。次に引用する一文を手掛かりとして解明していく。

友情を取引にした情ない対峙において、はじめて清顕は懇願者になり、本多は審美的な見物人になる。（「春の雪」第四章）

このように、「見物人」という清顕を傍から見る冷静な立場が本多の立ち位置だ。これは、友としての関係を抜きに二人が対峙した時に現れ、見物人という清顕と断絶した位置で彼を観察する立場につく。それが本多の観察者としての素質の最初の出現であり、『豊饒の海』で観察者の役割につく要因となった。本多の「理智」の強固さは、月修寺へ聡子に会いに行った先で熱を出し臥せっている清顕の傍らに居るときにも現れている。

本多は往きの車中でも試験勉強に精を出し、ここへ来て夜を徹しての看病のあひだも、論理学のノオトをかたはらにひろげてゐた。

ランプの黄いろい霧のやうな光輪の中に、二人の若者の心に抱かれた二つの対蹠的な世界の影が、鋭くその先端をあらはしてゐた。一人は恋に病み、一人は堅固な現実のために学んでゐた。清顕は夢うつつに、混沌とした恋の海を海藻に足をからめ取られながら泳いでをり、本多は地上に確乎と建てられた整然たる理智の建造物を夢みてゐた。（「春の雪」第五十三章）

意識の無い清顕を前に、本多は「理智」的な姿勢で勉学に励んでいる。清顕を突き動かす「至高の禁」への衝動など意に介さず「理智の建造物」を夢見ている本多は、紛うことなく「理智」の人だ。この強固な「理智」が揺らぐ時があった。

観察者であった本多が「春の雪」において行動を起こす時が三回ある。一回目は前節で論じた清顕と聡子の逢瀬の手引き。二回目は月修寺を目の前に聡子に会えずに苦しむ清顕を救いに来たとき。そして最後が、病に倒れている清顕と、聡子をもう一度合わせようと門跡に言いつのる場面だ。いずれにしても、清顕に求められたからこそ起こした行動であり、能動的に起こしたものでは無いが、この三回の間、本多は初めて「理智」を忘れる。中でも、門跡に清顕と聡子の面会を嘆願する時、清顕のための本多は「弁護士」となった。

本多は法廷に臨む若い弁護士はかうもあろうかといふ気持ちになつた。裁判官の気持ちなどには斟酌なく、ただ主張し、ただ弁護し、ただ身の明かしを立ててやらねばならぬ。

（中略）

本多の言葉も熱し体も熱して、うすら寒い寺の一間にゐながら、彼は自分の耳朶が火を発して、頭が燃え立つやうに感じてゐた。（「春の雪」第五十四章）

ただ一身に清顕のために言葉を尽くす本多は、「理智」の欠片もない。どこか引いて見ている「見物人」ではなく、清顕の味方である弁護人としてそこに居た。ここに来て、本多は情熱的な救い手となった。清顕によって与えられた情熱は、その出所である清顕のためだけに作用した。「春の雪」の本多の情熱は、常に清顕のために振るわれる。そして、清顕と聡子の面会の許しを得られなかった本多は、門跡の話に普段とは違い「究理的な精神は動き出さず、」（「春の雪」第五十四章）ただ聞き止めた書名だけを覚えて帰るに留めた。床

に臥せっている清顕を前にしても勉学に励んでいた本多が、清顕の願いを叶えられないことに普段通りでいられなかった。

情熱的な救い手としての顔を見せた本多は、もう一つ新たな顔を覗かせる。嫉妬だ。

何かこの世の極みで、見てはならないものを見た歓喜の表情ではなかつたかと疑つた。それを見てしまつた友に対する嫉妬が、微妙な羞恥と自責の中ににじんできた。（「春の雪」第五十五章）

本多は、清顕の表情に嫉妬を覚えた。「理智」的であった本多には無かった感情だ。一度「理智」の箍が外れた本多には、今まで無縁だったものが現れた。それらの要因は全て清顕であり、その発露の先もまた清顕であった。しかし、変化が生じた本多を置いて清顕はこの世を去る。

「今、夢を見てゐた。又、会ふぜ。きつと会ふ。滝の下で」（「春の雪」第五十五章）

「春の雪」の本多の言動を支配していた清顕の言葉が、『豊饒の海』全編を通して生きる本多を輪廻転生に縛りつけることになる。

何故、清顕との再会を輪廻転生という形で繋がなくてはならないのか。それは、輪廻転生が、血の繋がりを必要としない繋がりであることに起因する。『豊饒の海』の転生者は、血の繋がりが希薄な人物として設定されており、血の繋がりの中で似た性質を持った人物が現れる先祖返りなど、血の繋がりによる再会は不可能だ。

「春の雪」の清顕は、「優雅の棘」という形で家族との隔絶感じていた。更に、聡子の中に宿った命は、堕胎させられ、清顕の血は繋がらない。「奔馬」の勲も、父の「悪」が自分に影響を及ぼすことは無いと切り捨てている。勿論、勲にも血の繋がった子どもは居ない。「暁の寺」のジン・ジャンは、家族と離れ一人宮殿に使用人と共に暮らして居ることから、家族との繋がりは希薄である。末尾で唐突に双子の姉が登場するが、その真意の程も定かでは無い上、子どもの存在は明示されていない。そして、「天人五衰」の透は、両親について知らず、一人暮らしの後、養父の本多と暮らしている。また、ジン・ジャンという例外はあるが、他の三人は一人っ子だ。清顕や転生者たちの血の繋がりの希薄さについて、有本伸子氏は次のように指摘している。

『豊饒の海』では、登場する人物たちに子どもが生まれず、育たず、さらに一人っ子

が多いことも注目される。(注二)

転生者に限らず、本多も子どもが居ないことから、転生に関わる人間は血の繋がりが希薄に設定されている。例外的に透に関しては絹江との間に子どもが出来たことが暗示されているが、透の場合は転生の終わりを迎えているためだと思われる。

このように、転生に関わる人間は、血の繋がりが希薄だ。そして、転生は血の繋がりを必要としない繋がりだ。では、彼らは何を媒介に繋がるのか。一つは夢。これは典拠として挙げられている『浜松中納言物語』に見られる方法で、夢によって転生を知るというものだ。そして、この夢の予言を後の巻に運ぶのは清顕の夢日記であり、それを譲り受けた本多だ。

つまり、清顕によって輪廻転生に縛りつけられた本多が、輪廻転生の観察者としての役割を負ったということだ。輪廻転生の観察者としての本多の誕生の瞬間であった。

注

(注1) 小林和子「現代文学における輪廻転生についての一断想―三島由紀夫、深沢七郎、中上健次をめぐって―」『茨女国文』第七巻　茨城女子短期大学　一九九五年三月　三〇頁

(注2) 田坂昂『三島由紀夫入門』オリジン出版センター　一九八五年十二月　一四一頁

(注3) 柴田勝二「優雅の行方―三島由紀夫『春の雪』論―」『日本文学』第四十七巻九号　日本文学協会　一九九八年九月　四三頁

(注4) 蘭香代子「「夢」の心理学的考察　『豊饒の海』(「春の雪」、「奔馬」、「暁の寺」、「天人五衰」)の三島由紀夫の四部作に表現された夢を引用して」『日本文化研究』第七巻　駒沢女子大学日本文化研究所　二〇〇七年三月　一〇三頁

(注5) 寺田透『戦後の文学』河出書房　一九七三年九月　一七四頁

(注6) 對馬勝淑『三島由紀夫『豊饒の海』論』海風社　一九八八年一月　十一頁

(注7) 先掲　對馬勝淑『三島由紀夫『豊饒の海』論』海風社　一九八八年一月　十二頁

(注8) 西本匡克『三島由紀夫ダンディズムの文芸世界』双文社出版　一九九九年六月　一〇七頁

(注9) 佐藤秀明「〈嘘〉の物語―『豊饒の海』読解―」『渾沌』第五号　近畿大学大学院文芸学研究科　二〇〇八年三月　七六頁

(注10) 先掲　佐藤秀明「〈嘘〉の物語―『豊饒の海』読解―」『渾沌』第五号　近畿大学大学院文芸研究科　二〇〇八年三月　七八頁

（注11.）有元伸子「「豊饒の海」における「転生」―妄想の子供たち―」『日本文学』第四十四巻　六号　日本文学協会　一九九五年六月　三七頁

第二章　「奔馬」論
―純粋を貫くための死―

第一節　純粋の体現者　勲

『豊饒の海』第二巻「奔馬」は、本多の前に清顕の生まれ変わりである飯沼勲が現れることで動き出す。「神風連史話」に傾倒する彼は、「昭和の神風連」（「奔馬」第十一章）を志している。しかし、彼の望むものとその行動は、決して神風連のそれと一致するわけでは無い。それは、彼の信念によって、神風連を彼なりに理解、享受しているからに他ならない。こうした独自の思想の元に行われる革命は、一般的な革命とは一線を画すものである。勲の独自性について解明するには、彼を象徴するモチーフについて整理、明らかにする必要がある。勲を象徴するモチーフは様々あるが、まずテクスト内で頻出する純粋について整理する。

『奔馬』の主題が「純粋」ということにあることについては、おそらく誰も異論をさしはさまないだろう。(注1)

ここで引用した對馬勝淑氏に限らず、純粋という言葉を「奔馬」の主題と捉える論は多い。「奔馬」を論じるにあたり、純粋という言葉は欠かすことが出来ないものだ。では、勲の考える純粋とはどのようなものなのか。

純粋とは、花のやうな観念、薄荷をよく利かした含嗽薬（うがいぐすり）の味のやうな観念、やさしい母の胸にすがりつくやうな観念を、ただちに、血の観念、不正を薙ぎ倒す刀の観念、袈裟がけに斬り下げると同時に飛び散る血しぶきの観念、あるひは切腹の観念に結びつけるものだつた。「花と散る」といふときに、血みどろの屍体はたちまち匂ひやかな桜の花に化した。純粋とは、正反対の観念のほしいままな転換だつた。だから、純粋は詩なのである。（「奔馬」第十章）

この定義は比喩によって説明されており、実際の行為といったような明確な指示は語られていない。トマ・ガルサン氏は、ここに三島作品における純粋の特徴を指摘している。

語り手が勲の考えを代弁しながら、「純粋」は活発なものだと仄めかしている通り、本来の「純粋」が、透明で捉えどころのない抽象的で不変であるのに対して、三島作品

の登場人物に備わっているそれは、生き生きした妙に艶かしい「純粋」なのである。[注2]

三島作品の純粋は、そこに生き生きとした活発さが宿っているという。更に、勲の語る純粋は、対極のものを同じものとして扱う矛盾した定義で成り立っている。この矛盾について、田坂昂氏は次のように捉えている。

「血」と「花」――「血みどろの屍体」と「匂いやかな桜の花」――という相反する観念の結合、あるいは相互転換ということのなかに「純粋」という観念をみているわけである。[注3]

勲の純粋は、一見対極なものを、同様のもの、または対等なものとして捉えている。それは、純粋な正義と共に純粋な悪が存在することを示している。

こうした純粋の定義を持つ勲の「純粋性」（「奔馬」第三十七章）の象徴として笹百合が登場する。この笹百合は、勲が奉納したものだ。勲はこれを槙子から譲り受ける。この花びらに唇で触れた勲は、笹百合に自身の「純粋性」の根拠を見る。

『俺の純粋の根拠、純粋の保証はここにある。まぎれもなくここにある。俺が自刃するときには、昇る朝日のなかに、朝露から身を起して百合が花をひらき、俺の血の匂ひを百合の薫で浄めてくれるにちがひない。それでいいんだ。何を思ひ煩らふことがあらうか』（「奔馬」第二十一章）

純粋の象徴である笹百合が、勲の血の匂いを浄化するという構図は、勲の語る純粋の定義そのままである。「身を起こして百合が花ひら」くという生の営みが、勲の「自刃」という死の行為と対として存在する。これが勲の言う純粋だ。矛盾する思想にこそ、勲の独自性、彼を彼足らしめる何かが存在するはずだ。

純粋と対をなして「奔馬」を象徴するのが、忠義と死だ。勲は、忠義を示した後に「自刃」することを望む。忠義と死を勲は一括りにして捉えている。忠義を示した時後に死を選ぶことが勲の言う純粋な行為だ。つまり、勲を表すモチーフは、全て死に終着する。

何故勲が死を求めるのかを明らかにすることで、「奔馬」の主題が明らかになるはずだ。それと共に、本多や槙子といった人物たちについても考察することで、それぞれの役割や、前巻「春の雪」、次巻「暁の寺」との繋がりについても明らかにしていきたい。

第二節　死という孤独を求める勲

「奔馬」は、死から始まり、死によって終わる物語だ。それは、清顕の死の後に生まれ変わりである飯沼勲が生まれ、その勲が死ぬことで物語が幕を閉じることからも明らかだ。また、勲は常に自身の死について考えており、物語の随所に死の気配が潜んでいる。「春の雪」の清顕にそうした死への傾倒は見られない。しかし、勲は常に死を匂わせている。そして、死は勲の願いであった。勲の願う死とは、自刃だ。自身の手で死ぬことが勲の願いだった。

以降、「奔馬」における死の表現および神風連との関係について整理していく。

勲の「自刃」への憧れは、神風連への憧れから来ている。その憧れから、彼らの最期に倣って「自刃」したいと願っている。しかし、勲と神風連には決定的な違いがある。この違いが、勲が「昭和の神風連」になることを拒んでいる。時代など、外的要因が違うことは勿論であるが、それ以外にも勲を拒むものがある。内面的、精神的要因によって生まれた違いだ。

その違いを明らかにするために、勲について整理していく。勲の特徴の一つに「忠義」の示し方の特異性がある。勲にとっての「忠義」とは、命令無き行動を言う。相手がそれを望むも望まぬも関係無いというのだ。この一方的な勲の「忠義」に対して、神風連はどうだろうか。

> 神（かん）ながらの道は祭政一致であり、この現し世の顕御神（あきつみかみ）である天皇に事（つか）へまつるのと、幽（かく）り世（よ）の遠御神に事へまつるのは同じことであり、まつりごとはいづれも神命を承けて行はれるべきであるが、神命を承けるには敬虔の限りを尽して、宇気比に拠るのほかはない。（「奔馬」第九章）

神風連は革命を起こそうとする時、神の意志を聞く「宇気比」（「奔馬」第九章）という神事を行い、「神が御嘉納になった」（「奔馬」第九章）ことで実行を決めている。ここで行われる「宇気比」は、「誓」や「祈」と書き、「わからないことを神意によって知るために、誓いを立てること。」[注4]という意の「うけい」と同様のものだ。これは『日本書紀』、『日本霊異記』などに見られた。その「宇気比」であるが、先に引用した林桜園の言葉からその重要性が窺える。神風連は、神の命に従い、臨まれる時に行動を起こす。そのため、神風連は「純粋な帰依者」（「奔馬」第九章）なのだ。自己判断では無く、彼らは神の命を指針とする。対して勲は、誰の命に従うわけでも無く、一方的に自身の「忠義」を示そうとしている。そこに、神風連のような指針は無い。つまり、同じ「忠義」を示す行動であっ

ても、理念が全く一致しない。寧ろ、命が無いままに「瀆神の罪を犯してまでも」（「奔馬」第十七章）行動すべきだと考えている。このように、他者の命に従うことを良しとしない勲であったが、「宇気比」については肯定的に捉えている。

神意を窺はうとするあの宇気比には、やはり、今にも崩れさうな危い踏み台の要素があつたと思ふのである。その危うさこそ罪でなく何だらう。その不可避であつたことほど、罪に似たものはないのである。（「奔馬」第十七章）

勲の考える「忠義」は、「罪となることを覚悟せねばなりません」（「奔馬」第十七章）というものだ。これには、「忠義」を見せるためには、「罪」を犯す必要があるとも取れる。神意を窺ってその命によって動いた神風連は、一見命令に従う罪無き「忠義」に見える。ところが、勲は、その神意を窺う「宇気比」こそが「罪」であると考えた。木下圭文氏の言葉を借りるなら、「人為の介在を容易にする、宇気比の方法そのもの」[注5]に、勲は「今にも崩れさうな危い踏み台の要素」を感じ、それを「罪」と認識したということだ。三度「宇気比」を行った太田黒は、二度の「不可」という結果を不服としていた。そこへ、三度目の「宇気比」で知らされた「可」。ここに人為的なものがあったと疑うのは当然だろう。この不確かな「宇気比」に、絶対の信頼を置く神風連の姿が、勲には「罪」に見えたということだ。そして、勲は「罪」は死によって清められると考えており、神風連の「自刃」は、清めのためのものだったと考えている。

このように、神風連の同志たちの「自刃」に、勲は偏った見解を示している。神風連にとっての「自刃」とは、敗北したからこそ行うものだ。死を厭わず戦い、その上で敗北した際には潔く「自刃」する。つまり、結果として「自刃」を選んだということだ。ところが、勲にとっての「自刃」は違う。勲は、神風連の「自刃」を結果論的に見ていると言える。それは、神風連が最後に潔く「自刃」したことにのみ執着し、それまでの経緯は加味していないことからもわかる。何があろうとも「自刃」すると決めているということは、「自刃」さえ出来れば良いとも言える。つまり、勲が持つ神風連への憧れは、潔い「自刃」にのみ向けられているということだ。そして、勲は神風連の「自刃」に、罪を清める意味があると考え、自身が「自刃」するには、まず罪を犯さなくてはならないと考えた。この勲の考え方について、對馬勝淑氏は、藏原の暗殺と結び付けて次のように指摘している。

藏原暗殺と自刃の関係で言えば、暗殺の責任を取るために自刃するのではなく、逆に自刃するために藏原を暗殺するのだということでもある。[注6]

勲の考えや行動からは、罪を清めるための「自刃」が、「自刃」をするために罪を犯すという倒錯的な構図が出来上がってしまっている。

何故勲はそこまでして死、それも「自刃」に固執したのか。その要因の一端が神風連にあるのは明白だが、神風連に憧れていたにも関わらず、決して彼らの行動をなぞっているわけでは無い。それは、神意を問う「宇気比」を行っていないことから既にはじまっている。その上、神風連のように仲間と共に闘うこと無く、最期は一人「自刃」する。

つまり、「神風連の純粋に学べ」（「奔馬」第十章）という信念のもと仲間を集めておきながら、神風連との類似点は無いと言っても過言では無い。また、成功を信じて行動していた神風連に反して、勲は成功に固執してはいない。寧ろ敗北主義とも言える。勲は、神風連の敗北を「あれは失敗ではありません」（「奔馬」第十一章）と語っている。それは、敗北したからこそ、神風連の同志たちによる潔い「自刃」は行われたからではないか。神風連の革命は「自刃」するために行われたものだと考えている勲にとって、敗北したことは失敗では無いのだ。

次に、「神風連の純粋に学べ」という言葉について考えていく。

まず、神風連の示す純粋とは何かという問題を考える。明確なのは「純粋な帰依者」という言葉の通り、信仰者としての純粋さだ。しかし、ここでの「学べ」とは、敬神家であれと言っている訳では無い。しかし、神風連の純粋さは次のように説明されている。

> あの神風連の師父林桜園が、人はみな神の子と説いたやうな意味で、勲は自分を無垢であり純粋であると思つたことはなかつた。（「奔馬」第十七章）

このように、林桜園は「人はみな神の子」と説いており、その流れから、神の意思を聞く「宇気比」によって行動を決めている。このことから、神風連は神に対して「純粋」であると言える。しかし、この「宇気比」に従わないものが居た。それが加屋霽堅だ。彼は、他の同志たちと別れ、一人行動を起こしていた。次に加屋の行動を引用する。

> 県令から空しく奏議を却下された加屋は、ここに文辞を補ひ、建白の体裁を整へて、単身上京して元老院にこれを呈上し、その場で割腹する覚悟を固めてゐた。従つて、進んで一党の挙兵に加はる心境には程遠い。（「奔馬」第九章）

単独行動をし、尚且つ「割腹する覚悟」がある加屋にこそ、勲は純粋さを感じたのでは

ないか。つまり、先に引用した「勲は自分を無垢であり純粋であると思つたことはなかつた。」という言葉は、大多数の神風連の同志たちとは違うという意味ではないか。大多数の神風連が持つ純粋さを学べと言うのでは無く、加屋のように一人でも「割腹する覚悟」を持つという純粋さを学べと言いたかったのだ。

勲にとっての死とは、「自刃」することに他ならない。これは、神風連への憧れから来るものだ。その憧れの強さは、「神風連の純粋に学べ」を信条にしていることからもわかる。

勲が、自刃して死ぬという願いを最初に口にしたのは、堀中尉の「お前のもつとも望むことは何か」という問に対する答えを言った時だ。ここで初めて、勲が他者に向かって自分の望みを告げた。

今度は勲が一寸口ごもつた。彼の目はそれまで直視してゐた中尉の目からやや外されて、雨じみのある壁から、締め切つた磨硝子の窓のはうへ向けられた。視野はそこで阻まれ、雨は窓のこまかい桟のむかうに、どこまでも垂れ込めてゐるのがわかる。窓をあけても、雨の尽きる境を見届けることは決してできない。それでも勲は、ここにはない、ずつと遠くのことを語ろうとしたのである。

口ごもつたまま、思ひ切つて言ひだした。

「太陽の、……日の出の断崖の上で、昇る日輪を拝しながら、……かがやく海を見下ろしながら、けだかい松の樹の根方で、……自刃することです」（「奔馬」第十一章）

この時の勲にとって、自身が「自刃すること」は「ずつと遠くのこと」であり、理想を抽象的な表現で口にしている。そこには躊躇があり、勲のなかでもまだ漠然とした想像でしかないことが窺える。しかし、この願いは、揺らぐこと無く勲の行動の終着点として存在し続ける。

ここで、勲の死ぬことへの執着について考察していく。

勲は、「いつも死を考へている」程、死に執着している。その執着ぶりは、「自刃」する場所へのこだわりとなって現れた。

或る朝、彼の考へる清爽な朝日のなかの死、崖上の松風と海の反射が、湿つた牢獄の、尿臭の漂ふざらざらのコンクリートの壁と、相交はつてほしいものだ。（「奔馬」第十二章）

この理想の根幹にあるものは「神風連の六人の志士が腹を切つた大見岳山頂の幻」（「奔

馬」第二十四章）である。理想の場所について、勲は「どこかに自分を待つてゐる清浄な切腹の座があるやうに夢みてゐる」（「奔馬」第二十四章）と語っている。「忠義」を示すための変電所襲撃の計画を練っている最中でありながら、勲は「自刃」する場所の空想に余念がなかった。そして、妄想を重ねるにつれ、勲の「自刃」風景は明確になっていく。それに比例するように、勲は「自刃」という行為に絶対の自信を持つようになる。桐院宮治典王殿下の「もし陛下がお前らの精神あるいは行動を御嘉納にならなかつた場合は、どうするつもりか」（「奔馬」第十七章）という問に答える時には、堀中尉の時のような躊躇いは無くなっている。「自刃」という行為が、想像や願望から目標へと姿を変えた。

「はい、神風連のやうに、すぐ腹を切ります」

「さうか」――聯隊長の宮の御表情には、かういふ返事は聞き馴れておられるといふ色があつた。「それならばだ、もし御嘉納になつたらどうする」

勲の返事は、間、髪を容れなかつた。

「はい、その場合も直ちに腹を切ります」（「奔馬」第十七章）

堀中尉に問われた時には見られた戸惑いが消え、治典王殿下に問われた時には言い淀むこと無く朗々と宣言しているのは何故か。時間の経過も勿論だが、伝える相手が違うことも大きい。堀中尉が目上の人間であったとしても、勲が「忠義」を示すべき相手では無い。一方、治典王殿下は、勲が「忠義」を示すべき相手である。勿論、この時点でそこまでの覚悟をもって宣言しているかは想像の域を出ない。しかし、いつか「忠義」を示す相手に自身の覚悟が生半可なものでは無いと示すためには、躊躇い口籠るなどあってはならないことだ。ここで示した覚悟には、「忠義」という言葉が多いに関わってくる。次に、勲が考える「忠義」について引用する。

「はい。忠義とは、私には、自分の手が火傷するほど熱い飯を握つて、ただ陛下に差上げたい一心で握り飯を作つて、御前に捧げることだと思ひます。その結果、もし陛下が御空腹でなく、すげなくお返しになつたり、あるひは、『こんな不味いものを喰へるか』と仰言つて、こちらの顔へ握り飯をぶつけられるやうなことがあつた場合も、顔に飯粒をつけたまま退下して、ありがたくただちに腹を切らねばなりません。又もし、陛下が御空腹であつて、よろこんでその握り飯を召し上がつても、直ちに退つて、ありがたく腹を切らねばなりません。何故なら、草莽（さうまう）の手を以て直に握つた飯を、大（おほ）御食（みけ）として奉つた罪は万死に値ひするからです。では、握り飯を作つて献上せずに、

そのまま自分の手もとに置いたらどうなりませうか。飯はやがて腐るに決まつてゐます。これも忠義ではありませうが、私はこれを勇なき忠義と呼びます。勇気ある忠義とは、死をかへりみず、その一心に作つた握り飯を献上することであります」（「奔馬」第十七章）

勲にとって「忠義」とは、「いつでも罪となることを覚悟せねば」ならない行動を言うのだ。また、勲の「忠義」を吉田達志氏は次のように説明している。

勇気ある忠義とは、民衆が己の判断に基づいて誠意と見なすものを、天皇の命令なしに天皇に対して、一方的に行うことであり、その点で天皇の命令に従って死ぬのを忠義と見なす、軍人の忠義とは異なる。(注7)

勲の独りよがりな忠義は、命令という形では行われない。ここで、勲の「忠義」と酷似した例を取り上げる。それは、「春の雪」において聡子が出家する際に門跡が見せた決心に見られた。

現世すべてを敵に廻し、お上の神聖を黙つてお護りするために、お上の命にさへ逆らふ決心をなされたのである。（「春の雪」第四十六章）

門跡の決心は、お上のためにお上に逆らったとしても、その後、自ら死を選ぶことは無い。罪を怖れぬ「忠義」の後に死を求めることは、勲だけの特徴だ。勲の一方的な「忠義」は、どのような形で「忠義」を示したとしても、最後は「自刃」することになる。これは、自刃することが目的であるとも取れる。つまり、「忠義」のための「自刃」ではなく、「自刃」するための「忠義」だということだ。

もう一つ、勲の「忠義」について明確にすべきことがある。それは、「忠義」を示す対象についてだ。勲が傾倒する神風連は、復古主義、攘夷主義の下、近代化を進める明治政府に対して革命を起こすべく立ち上がった。つまり、国の未来を変えるためだ。そして、これらは全て「この現し世の顕御神である天皇」への「忠義」だ。一方、勲はどうか。先に引用した勲の考える「忠義」の説明の際、「陛下に」と言っていることから、陛下への「忠義」について語っているのだろう。しかし、いくら相手の意思とは関係の無い独りよがりな形で示す「忠義」とは言え、勲の「自刃」へと邁進する姿を陛下への「忠義」のための行為とするのは些か無理がある。また、国のためと言うには、掲げるべき明確な思想も無

い。勿論、勲自身は、天皇ひいては国のためにと藏原暗殺を行ったと思っているのだろう。しかし、勲の言う「忠義」を尽くす相手を天皇と言い切るには、些か説明が不十分であるように感じる。では、勲の「忠義」は何に対して示しているものなのか。ここで、勲の持つ天皇観について引用する。

中尉はいはば孤独な代理人にすぎなかつた。その号令の大音声も、そう思ふときには虚しくきこえた。盤上の駒を動かす巨大な不可視の指、その指の力の根源こそ頭上の太陽、存分に死を含んだ赫奕(かくやく)たる太陽にあつた。あれこそは天皇だつた。(「奔馬」第十四章)

勲の言う天皇とは、肩書きでは無く、触れることの出来ない力の源のことだ。勲の言う「忠義」を尽くす相手が判然としないのは、そもそも相手が不可視な存在だからだろう。それは、先の松枝清顕に死をもたらした「至高の禁」としての恋と酷似している。清顕は、聡子との恋をもって、見えない「至高の禁」を犯すことに心奪われていた。勲もまた、不可視でありながら絶対的なものに対して、「忠義」を尽くそうとする。

不可視なものに尽くす「忠義」は、どのような結果をもたらすのか。その結果について、勲の行動に沿って考察していく。

勲の「忠義」は、「自刃」することによって完遂される。「自刃」した後、つまり死後は無く、死をもって完結しなくてはならない。しかし、『豊饒の海』が輪廻転生の物語である以上、死後に新たな生を受ける。勲もまた、清顕の生まれ変わりであるため、清顕の死後に立っている。ところが、その死後の世界に生きている勲は、死後、つまりは転生を否定する思想を持っている。そして、勲が清顕の死後に転生し生まれたと考える本多による救済虚しく、勲は死によって自身の「忠義」を完遂させる。

輪廻転生の輪の中で生きる勲は、転生という形で清顕の死をきっかけに生を受けた。勲は、生きているものが避けることの出来ない死を克服している存在だ。何故なら、全ての終わりであり、無に帰す死を迎えても、その先に転生による生が待っているからだ。死による終焉から解放されている勲と死との間には、深淵が存在する。死による解放は不可能な望みなのだ。

ここで、前作の「春の雪」の清顕と比較していく。清顕の死因は病であり、自らの意志で選んだものでは無い。つまり、望まぬ死だ。一方勲の死は、自ら望んだ死だ。この違いは何故生まれたのか。それは、死に導く絶頂の瞬間の違いにある。清顕は、聡子との禁忌の恋が苛烈に燃え上がる時という死など匂わせない瞬間が絶頂だった。一方の勲はどうか。

人生で最も重要なのは己の「忠義」を示すことだ。そして、先にも述べたように、勲の「忠義」とは、「自刃」することで完遂される。つまり、死ぬ瞬間こそ勲の絶頂なのだ。故に、勲は死を求め、自ら命を絶つ。同じように人生の絶頂を迎えることで死に行きついた二人だが、その絶頂の時が違うが故に、彼らの死が与える印象に違いが生まれた。清顕の死は無念の死、勲の死は歓喜の死だった。

改めて、勲の「忠義」は何に対して示しているものなのかについて問うていく。先に、勲の「忠義」を示す先は不可視なものとした。このあやふやな対象を定義していきた。勲が「忠義」を示した後に求めるものは「自刃」による死だ。そして、その死が捧げられる対象は太陽だった。

> 勲は深く呼吸をして、左手で腹を撫でると、瞑目して、右手の小刀の刃先をそこへ押しあて、左手の指さきで位置を定め、右腕に力をこめて突っ込んだ。
> 正に刀を腹へ突き立てた瞬間、日輪は瞼の裏に赫奕と昇った。（「奔馬」第四十章）

勲の最後の瞬間は、太陽へと捧げられている。勲にとって太陽とは天皇の力の根源だ。そして、その力は不可視だ。太陽という見えるものではなく、そこに宿る力という見えないものに対して示されるからこそ、勲の「忠義」は相手の意志の介在しない独りよがりなものになった。先の何に対して示しているかという問いの答えは、天皇なのだろう。しかし、勲の言う天皇とは、その肩書きや身分ではなくましてや個人でも無い。人の及ばぬ先から強引に人を動かすもののことを言う。それは、清顕に死をもたらした「至高の禁」としての恋と同じ類のものだ。どちらも不可視なものであり、本人の意思で出現するものでは無い。清顕の言う「至高の禁」への欲望も、勲の言う不可視な力の総称である天皇への「忠義」も、別の言葉を用いて定義するのであれば、運命と言えるのではないだろうか。

勲は、「自刃」という形での死を渇望しているが、何故死を求めたのか。先に死という無へと突き進んでいるにも関わらず、勲は死に拒まれていることを指摘した。しかし、そもそも勲が何故死という方法を選んだのかは明言されていない。ここからは、勲が何故死を求めるのかについて考察する。

まず、勲の人物像についてまとめていく。先行研究において、勲は常に純粋であることを前提として論じられてきた。勿論、純粋であるが故に、忠義を示すための革命を起こそうという焦燥に駆られたという点で、勲は純粋なのだろう。しかし、本当にそれよりも重要なモチーフを勲は有していないのか。そこで、勲を構成するモチーフについて、一つ仮説を立てる。それが、勲の孤独だ。

勲は、度々自身が「自刃」する夢想に耽る。しかし、そこには決まって同志が存在しない。また、勲が「自刃」することを望んでいることを、最初の同志である井筒と相良も、勲が堀中尉に語るまで知らされていなかった。「神風連の純粋に学べ」という信念のもと仲間を集めておきながら、勲の行動と神風連のそれとは接点が少ない。それは、「自刃」場面でも同様だ。神風連の同志たちの「自刃」場面は、どこかに他者の存在が示されている。それは、愛する家族や同志、逆に敵である追手の存在であった。ところが、勲の理想には他者の存在が一切無い。勲が夢想するのは、静寂に包まれた己一人だけが存在する状態だ。勿論、実際に勲が「自刃」したときには、勲を追って走る他者が描写されていることから、全く存在しない訳では無い。しかし、勲は、追手が居たために「自刃」を選んだ訳ではない。残す家族を思っていた訳でも無く、意志を託す同志を思っていた訳でも無い。ただ「自刃」することにだけ向き合っている。そこに他者は存在しない。勲は孤独を求めているのだ。ここに、勲を「自刃」に駆り立てる要因がある。

第三節　純粋を貫くための「自刃」

勲は、両親や父親の塾に通う塾生、同志や堀中尉、本多や槙子など多くの人間に囲まれている上に、清顕の生まれ変わりという繋がりまで持っている。孤独という言葉と結び付けるには、あまりにも人との結びつきが強い人物だ。ところが、彼は常に孤独へと向っている。この孤独には、他者の介入を嫌悪する勲の心情が大きく関わってくる。何故他者の介入を嫌うのか。神風連のように仲間と協力し、強い絆で繋がることを求めても良いはずだ。ところが、勲には志を同じくする本当の意味での同志は居ない。それは、勲と周りの人間とでは目的が違うからだ。

父飯沼茂之や堀中尉は、革命を起こす最良の時を待つと言っていつまでも行動を起こさない。直ぐにでも行動を起こしたい勲にとって、彼らは同志足りえない。また、同じように直ぐに行動を起こしたい仲間たちとは、目標が違う。勲の仲間は、革命の成功を願っている。「自刃」することは成功の内容に含まれていない。そして、本多と槙子は、革命など起こすことは無く、ただ勲を救うことに尽力している。このように、勲を取り巻く人間たちの考えや目的は、勲とは相いれないものだ。勲は、革命が成功する最良の時を待つことはしない。革命は失敗し、「自刃」をしなくてはならない。救われたくは無い。勲は、多くの人間に囲まれながら、周りと相容れない目的を胸に宿し、その目的を他者に阻止されることを極端に嫌悪している。

ここで、父である飯沼茂之について整理していく。飯沼は、本多を置いて唯一「春の雪」から登場する人物だ。清顕附きの書生であった飯沼は、清顕のすべてが気に入らなかった。

その反動からか、みねとの間に生まれた息子の勲に「思ひ通りに教育」（「奔馬」第三十一章）を施していく。しかし、自身でそう教育しておきながら、勲が革命を起こそうとした際に、それを阻止した。飯沼もまた、勲の意に反する行動をしたのだ。

「本多さんにこんなにお世話になりながら、御厚意を無にするやうな打明け話をするのは辛いが、本来、依頼人と弁護士の方との間には、何の秘密もあつてはならぬものでせう。だから申上げてしまふのでありますが、それは私ですよ。私が警察へ倅を密告したのです。そしてあはやといふところで、倅の命を救つたのです」

「何のために」

「何のために、つて、さうしなければ、倅は生きてゐませんでした」（「奔馬」第三十一章）

飯沼の行動は、死ぬことを求めている勲の意思を無視した生かすためのものだ。ただし、飯沼が勲を生かすべく起こした行動は、息子可愛さに起こしたものではない。その動機は、嫉妬だった。自分が成しえない「血の栄光と壮烈な死」（「奔馬」第三十一章）を息子が達成するかもしれなくなった時、嫉妬からそれを阻止したのだ。これにより、勲は純粋なる革命を実行しないままに拘束された。

飯沼が勲の「純粋性」に背くのは、これだけでは無い。飯沼は、資金繰りに苦しんでいた時分に、小細工を仕掛けて金を得ていた。こうした経験が、息子への嫉妬となったのではないか。純粋に革命へと邁進する勲の姿と、様々なしがらみに雁字搦めになってついぞ革命などというものを決行することの出来ない自分とを比べて、嫉妬した。そんな飯沼の粗末な悪によって、勲と藏原武介とに接点がある可能性が浮上した。藏原が、塾の出資者であるかもしれないというものだ。

勲は制しやうもなく、藏原の名とその金を思ひ泛べてゐた。わが家にゐて、たえずその名に脅かされてゐる不快は例へん方もなかつた。靖献（せいけん）塾の空気の中にも水の中にも、口に入るものすべてのなかに、毒素のやうにその名が澱んでゐた。（「奔馬」第二十六章）

見えない形で身体の中に入り込む悪が勲を不快にした。しかし、父のもたらす悪は、勲の純粋を脅かすほどのものでは無かった。父よりも勲を追いつめたのは、鬼頭槙子だ。

続いて、勲を救おうとする槙子について考えていく。最初に槙子が登場するのは、三枝

祭の神事が行われる率川神社で勲に話しかける場面だ。三十二、三歳の出戻りである槙子は、勲とは十歳以上年齢が離れている。

槙子の一視同仁の態度は崩れることがなかつた。明るく、やさしく、冷たくて、髪も襟元も乱れ一つ見せない人であつた（「奔馬」第十三章）

万民に対して平等な態度に、好ましい性格と見目の麗しさを槙子は持ち合わせていた。そして、勲に向ける瞳は「母性的な慈愛に潤んで」（「奔馬」第十三章）いた。このような母性の眼差しを持つ女が、勲を救おうと立ち上がる。ここで、三島作品に登場する母性的な救い手という役割を担った人物と比較する。その人物とは、『禁色』の鏑木夫人だ。

他人の家のなかへ嵐のように乗り込み、礼節も体面も思ひ遣りも羞恥もかなぐり捨て、自他に対して心ゆくばかり残酷になり、ひたすら悠一のために超人的な力業を敢へてした（『禁色』第二十九章）

引用は、悠一の家へ上がりこみ、彼が男色であると家族に露見した際の救済場面だ。鏑木夫人の行動は、母親が子供を一番に考えるあまりに見せる強引さを含んでいる。この救いの手は、悠一の実母から「悠一のことは、どうかよろしくお願いいたします」（『禁色』第二十九章）という言葉を引き出した。この時に代表される鏑木夫人の「母性」を、中元さおり氏は「康子の自己犠牲的な〈聖母性〉とは異なる、鏑木夫人の「母性エゴイズム」[注8]」であると評した。また、田中美代子氏は「邪悪な母性は、一転して庇護者に変貌する。[注9]」というように指摘している。この鏑木夫人による救いを、悠一は好意的に受け止めた。夫人は、自他ともに認める救世主となったのだ。そして、この関係を保つために、夫人は欲望を抑え、女として悠一に触れることは無い。

では、母性の眼差しを勲に向ける槙子による勲救出の場面はどうか。結論から言えば、槙子は勲を救うと同時に傷つけた。では、夫人と槙子では何が違うのか。

それは、愛情の違いだ。悠一は鏑木夫人を女として愛することは無く、鏑木夫人は女として悠一触れることを自身に禁じた。そこに恋情は存在しない。一方、勲は死ぬ前に槙子に「別れを告げたゐ」（「奔馬」第二十九章）と考えると共に、そこで槙子と抱擁する。勲と槙子は言葉にすることは無かったが、互いに好意を抱いていることは明らかだ。つまり、二人の間にあるのは、男女の恋情だった。

鏑木夫人の救いの手は、悠一の望みと合致し、見事に救いとなった。しかし、槙子の救

いの手は、勲の望みとは反するものであった。

考へられる動機は愛、それも衆目の前で敢て危険を冒した愛だけだつた。何といふ愛！　自分の愛のためなら、槙子は勲のもつとも大切にしてゐるものを泥まみれにして恥ぢないのである。しかも、はなはだ辛いことは、勲がその愛に応へなくてはならない、といふことだつた。槙子を偽証罪の犯人にしてはならない。一方、その夜の真実を知つてをり、槙子の偽証を告発できる者も、世界中で勲ただ一人なのである。そして明らかに槙子はそれを知つてゐた！　知つてゐればこそ偽証したのだ。勲のもつとも厭ふやり方で、槙子を救ふことによつて勲自身を救ふことになる罠をしつらへたのだ。のみならず、槙子は必ず勲がさうするだらうといふことも知つてゐた！……勲は全身にかけられた縄を、何とかふりほどかうとして身もだえした。（「奔馬」第三十七章）

勲を救うべく槙子は法廷において偽証した。その動機は母性ではなく、男女の愛だ。この愛がこれほどの拘束力を持ったのは、勲も槙子を愛していたからだ。勲の愛を試すかのように、槙子は偽証という罪を犯す。「春の雪」における嘘は女性優位の象徴だとしたが、「奔馬」においても、嘘によって女性が男性よりも優位な立場となった。勲に許されたのは、槙子が示した愛をどう処理するかだけだ。そして、嫌悪感を抱きながらも、勲は槙子のしつらえた罠にはまらなければならなくなった。つまり、勲がもっとも大切にしている「純粋性」を差し出さなくてはいけなくなったのだ。勲は、槙子の嘘が本当であるかのようにしながら、裏切りの汚名を返上すべく証言した。その姿を本多は「大人の知恵を学んだ」（「奔馬」第三十七章）と評している。それは、「純粋性」を投げ打った故の姿であった。

槙子も飯沼茂之も、その行為で勲に自身の理想に背くことを強いてきた。このように、精神的、信念的には孤独な勲にあっても、実質的には孤独になれない。寧ろ、他者からの干渉によって、勲の嫌悪する結果へと動かされてしまうほど、密接に関係が構築されている。つまり、勲の理想を叶えるには、他者の不在、孤独が絶対条件となる。だからこそ、勲が語る理想や「忠義」には、他者が存在しないのだ。ところが、生きている限り勲は多くの他者と関係を持たなくてはならない。それらは、勲の望まぬ結果へと勲を導いてしまう可能性を秘めている。では、勲が完全な孤独を得るために選んだ手段とは何か。

勲は、「自刃」という形での死を渇望しているが、何故死を求めたのかについて考えていく。これは、言い換えれば、何故生きていては駄目なのかということだ。前提として、生きている限り勲は多くの他者と関係を持たなくてはならない。すると、他者の行動や意思

によって、勲の理想が妨げられる可能性が出てくる。純粋であろうとする勲を妨害するのだ。では、その妨害を回避する方法は何か。その答えとして、勲は精神的にも物理的にも孤独になる死を選んだ。勲が、「「純粋なまま死ぬ」といふことはむしろ容易(たやす)く思はれた」（「奔馬」第十章）と語っていることからも、純粋を貫くための手段として死を捉えていることが窺える。死ぬことで全てから解放され、純粋なままであろうとしたのだ。

裁判の際に自らの「純粋性」を犠牲にした勲は、再度「純粋性」を得るために行動を起こす。純粋な罪という名の殺意の無い殺人、藏原の暗殺を決行した。そして、殺意の無い殺人という純粋な悪を行った後に、純粋なままであるために「自刃」した。

第四節　「論理の世界」の崩壊

本多は「理智」的な人間だ。しかし、清顕によって「いつはりの情熱」を得ると、その情熱で清顕を助けようと奔走した。そのまま情熱的な人間になるかと思われたが、本多は「奔馬」に「理智」の人として登場する。

> 彼はすでにはつきりと論理の世界に属してゐた。夢よりも現実よりもたしかなのはそれだけだつた。（「奔馬」第二章）

このように、「奔馬」の本多は「論理の世界」を自分の世界として住んでいる。その世界は、本多が観察を続けてきた現実よりも確かだと言う。一瞬で消えていく夢だけでなく、現実よりも確かなものという位置づけの根拠は何か。

> ずつと若いときには、現実は一つしかなく、未来はさまざまな変容を孕んで見えるが、年をとるにつれて、現実は多様になり、しかも過去は無数の変容に歪んでみえる。そして過去の変容はひとつひとつ多様な現実を結びついてゐるやうに思はれるので、夢との境目は一そうおぼろげになつてしまう。それほどうつろひやすい現実の記憶とは、もはや夢と次元の異ならぬものになつたからだ。（「奔馬」第二章）

現実は、未来だけではなく、過去までもが歪んで見えてしまう。そうして変容していくことで、夢との判別がつかなくなってしまったというのだ。不確かな記憶と言う名の現実は、夢と変わらない。そういった変容するものとは異なり、論理は形を留め、そこにあるものだ。しかし、「夢や現実よりも確かな」はずの世界が、「暁の寺」では崩壊してしまう。「奔馬」の時に本多が住んでいた「論理の世界」とは、何を拠り所としている世界なのか。

「論理の世界」という名の通り、その世界は論理によって構成されている。では、本多の言う論理とはなにか。それは、時間の流れに左右されない、変わらない法則のことだ。この法則に属しているのが、「理智」的な本多だ。そのため、「論理の世界」とは、「理智」の世界とも言え、それを拠り所にしていると言える。

ここからは、本多の「理智」とは何かについて考察していく。

「奔馬」において本多が有している「理智」は、「春の雪」の最後、清顕が亡くなった以後から、「奔馬」冒頭までの空白の時間に培われている。勿論、本多は当初から「理智」の人ではあるが、「春の雪」の最後、本多は「理智」よりも情熱を優先させている。つまりは、要塞のようなしっかりとした「論理の世界」に属したのは、それ以降ということになる。この空白の時間の中で、本多は東京帝国大学法学科へ進み、司法試験合格後は司法官試補を経て判事となった。「奔馬」の冒頭で三十八歳となった本多は、控訴院の左陪席になり大阪に住んでいる。空白の時間に、理性的であることを常に求められる判事という立場で着実に出世していることが窺える。十八年をかけて培われてきた「理智」は、本多そのものとなっていた。

強固な「理智」を有し、確固たる地位と共に「論理の世界」に住む本多は、現実とのかかわり方が変化している。

> つらつら思へば、遠くで銀の堆積が鏘然と崩れるやうに、自分の裡の遠くでかつて危険が崩れて、それ以来、どんな魅惑にも耳を貸さない鉄壁の自由が備わつてきたやうに思はれた。その、遠くで鏘然と崩れ去つた危険とは清顕だつた。その魅惑とは清顕だつた。（「奔馬」第二章）

本多は、「論理の世界」の恩恵によって、「どんな魅惑にも耳を貸さない鉄壁の自由」を有するようになった。何故そのような技術を身に着けることになったのか。それは、清顕の死に起因する。「奔馬」の本多の世界は、清顕が死んだ以後に出来た世界だ。清顕は、本多にとって魅惑であった。本多を「理智」から引きずり出すその力が清顕の死によって消失し、本多を誘惑するものは無くなった。つまり、本多を「理智」的でいられないようにした清顕の存在が消えることで、本多の「理智」は再び息を吹き返したということだ。つまり、「論理の世界」を守る「鉄壁の壁」は、清顕の様な運命に翻弄される人物が居ることで揺らぐということだ。そのために、本多の目の前に清顕の生まれ変わりである勲が現れると、本多の「理智」は簡単に揺らいだ。

本多はかつて清顕とすごした日々を想ひ、なつかしさと悲しみに入りまじつて、又、不測の希望を感じた。こんな心のをののきを手に入れたからには、今まで自分の理性に縛められてゐた確信を、のこらず擲つても悔いない心地がした。（「奔馬」第六章）

滝を浴びる勲の脇腹に三つの黒子があることを見つけた本多は、清顕の最後の言葉である「又、会ふぜ。きつと会ふ。滝の下で」を思い出す。そして、勲を「正しく清顕その人だつた」（第六章）と確信し、「今まで自分の理性に縛められていた確信を、のこらず擲つても悔いない」という考えに至った。長い年月をかけて培われた「理智」が、転生者勲を前にしたことで後退していく。本多にとって勲の存在は強力だった。圧倒的な存在感を放つ勲を、本多は判事として法廷で人々を理性的に観察する時とは違い、転生者と盲目的に信じ観察する。この転身は、転生者の観察者という役割を、本多が何の抵抗もなく自身の生業と決めた故のものと言える。

こうして、転生者の登場により本多の「鉄壁の自由」は崩壊した。崩壊することで輪廻転生の観察者として勲を観察するようになる本多であるが、崩壊後の本多は、その前の本多とどのように違うのか。

本多はふと、よみがへつたのは清顕だけではなかつたのではないかといふ想ひにとらはれた。もしかすると、よみがへつたのは本多自身であつたのかもしれないのだ。（「奔馬」第六章）

清顕は転生の力で蘇り、勲として本多の前に現れた。清顕の再来は、本多の「鉄壁の自由」を崩壊させる。この崩壊により、本多は、清顕と過していた頃の本多として「よみがえつた」のではないか。崩壊前の本多と後の本多の違いとは、魅惑の有無だ。本多は、魅惑が存在しない時を経て、再び魅惑が存在する時を迎えた。そして、その魅惑の有無とは、即ち清顕が存在するか否かだ。裏を返せば、本多のよみがえりによる変化は、勲が清顕の生まれ変わりであることの証明だ。ここで、清顕と過していた時の本多について、本多自身の言葉で確認していく。「春の雪」の十八歳から二十歳までの本多について、本多が手紙で勲に伝える箇所を引用する。

当時の私は、自分が社会のために有効な、有為な人間になれると信じてゐましたし、その年齢にしては感情も平衡を保ち、理智も平板ななりに一応澄んでゐました。

（中略）

しかし、御父上ともお話しした親友の松枝清顕といふ男が、さういふ私の、きちんと整つた認識を乱してしまつたのです。

（中略）

人間の変貌の奇蹟を、一旦かうして目のあたりにした以上、私自身も多少変らざるをえませんでした。（「奔馬」第十章）

この手紙から、「春の雪」当時に「理智」の人であった本多が、清顕と過すことで変化したことを自覚していることが窺える。前章でも指摘したが、「春の雪」において、本多は清顕のために嘘をついている。この「理智」的な本多らしからぬ嘘は、清顕と聡子の逢瀬を手助けするために出現したものだ。清顕の存在が、本多を作り変えたと言える。つまり、清顕の生まれ変わりである勲は、本多を再び「理智」の人らしくもない行動に駆り立てる存在になる可能性が高い。もし勲にその力があれば、その時本多は、「情熱」を宿しているはずだ。しかし、勲に出会ってからも、本多は「理智」の人ままであった。

本多の理性の礎は崩れかけてゐたが、日々の思考の習慣は渝（かは）らなかつた。（「奔馬」第十九章）

本多の理性は、「崩れかけていた」が、完全に崩壊した訳ではない。裁判官としての本多は「理智」を保ったまま勲と相対していた。その要因は何か。それは、年齢だ。勲の存在は、三十八歳の本多にとって、それほど脅威ではなかった。何故なら、清顕と共に過ごした未熟な本多ではなく、成熟した本多と年若い勲では、経験があまりにも違うからだ。しかし、勲を転生者と認めた時の本多は、完全に理性を欠いていた。この齟齬の原因は何か。

理性の礎にはたしかに亀裂が入れられたが、又たちまち土がその亀裂を埋め、旺んな夏草がそこに生ひ立つて、あの一夜の記憶を隠し了せてしまつた。今、ここに見てゐる能のやうに、あれは自分の理性を訪れた幻であり、理性のたまさかの休暇だつたのだ。（「奔馬」第十九章）

つまり、一旦は勲を前にして理性を失ったが、勲と会わない間にその時の現実味が薄れてしまったということだ。本多にとって、過去や未来といった現実は、夢と同様に不確かなものだ。過去に一度理性を失ったからといって、現在に至るまでそのままの状態を保つことはない。その結果、ほころびは見事に修復され、依然として本多は「理智」の人とし

て存在している。勲との物理的な距離もさることながら、年齢の差という隔たりが存在することで、本多は「理智」を捨てきれない。そのために、一旦は転生者の存在を認めるという凡そ「理智」とはかけ離れた考えを持ったものの、未だ「理智」の権化として本多は存在しているのだ。

ところが、本多に変化が生じる。

現実が確乎たる外見を失つて、その現実の出来事を縦横に裁いてゆく職務が、俄かに手ごたへをなくしたのである。物思ひに耽ることが多くなり、同僚の話しかける声を耳に逸して、返事をしないことがよくあつた。（「奔馬」第二十五章）

このように、勲との出会いは、清顕以来の本多を作り替えてしまう出会いであった。そして、「理智の軌道を逸して、何かの感情の草深い小径に踏迷つて」（「奔馬」第三十一章）しまった本多は、理性を基盤とする世界から見放されていく。その最も大きな影響が、本多の弁護士への転身だ。「論理の世界」に住み「鉄壁の自由」を有する本多であれば、立場を顧みずに勲の弁護のために弁護士になるなどという行動を取る筈は無い。何故なら、「論理の世界」とは、非理性的な行動とは相容れないからだ。しかし、本多は、勲を転生者と認めたことを「すこぶる軽率」（「奔馬」第十九章）と理解しながら、「その理性の根拠に何か怪しげなものがあることは、今更点検せずとも良いとした。それはそれで放置っておけばよいのである。」（「奔馬」第十九章）と、自身の理性の軸がぶれていることに目をつぶった。これこそ「論理の世界」が壊れる瞬間であった。

本多は自分の生涯のうちで、自ら選んだこれほど大きな放棄を、二度とくりかへすことはあるまいと思ふにつけ、今身内に湧き立つてゐる奇妙な情熱を、よくよく心に刻んでおかうと考へた。万人が愚かだと思ふ決断を自分に下したあとの、この心身の爽快、この胸裡の温もりを何にたとへよう。それも分別ざかりの今日になつて！

勲に感謝されるべきではなく、むしろ勲に感謝すべきである。勲の転生と勲の行為に触発されなかつたら、本多はいつか氷山に棲むことに喜びを感じる人になつてゐたかもしれない。彼が安穏と考へていたものは氷だつたのだ。完成と考へていたものは涸死だつたのだ。自分が何かほかの考へ方をすることもできるといふことに未熟をしか見てゐなかつたとき、彼は本当の成熟の意味すら知らなかつたのだ。（「奔馬」第三十一章）

「論理の世界」の崩壊を積極的に肯定した本多は、そのことに快感を覚えている。そして、本多の内面に留められていた予兆は、他者から見て取れるようになり、最後には弁護士になるという形に現れた。これは、勲の存在によって「理智」よりも「情熱」優先させたということだ。清顕の存在によって宿された「いつはりの情熱」ではなく、ここで本多が得た「情熱」は、「身内に湧き立つてゐる奇妙な情熱」という、本多の中から湧き立つものだ。「いつはりの情熱」では無く本物の「情熱」を与えたのが勲であり、「理智」よりも「情熱」優先させたことが、「論理の世界」の崩壊の要因であった。

この崩壊によって、転生を必ず肯定する本多は、輪廻転生の観察者よりも積極的な輪廻転生の証明者となった。

注

（注１）對馬勝淑『三島由紀夫『豊饒の海』論』海風社　一九八八年一月　一八四頁

（注２）トマ・ガルサン「三島由紀夫の『仮面の告白』、『憂国』と『奔馬』における「純粋」と「不純」」『立教大学大学院　日本文学論叢』第十号　立教大学文学研究科日本文学専攻　二〇一〇年八月　二四四―二四五頁

（注３）田坂昂『三島由紀夫入門』オリジン出版センター　一九八五年十二月　一五七頁

（注４）日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典　第二版』第二巻　小学館　二〇〇一年二月　一六三頁

（注５）木下圭文「〈魂の物語〉としての『豊饒の海』―『奔馬』における〈魂〉の回復―」『兵庫教育大学近代文学雑志』十五号　兵庫教育大学　二〇〇四年一月　一四―一五頁

（注６）先掲　對馬勝淑『三島由紀夫『豊饒の海』論』海風社　一九八八年一月　一七九頁

（注７）吉田達志「三島由紀夫の作品世界―『金閣寺』と『豊饒の海』―」高文堂出版社　二〇〇三年五月　一一二頁

（注８）中元さおり「三島由紀夫『禁色』における〈もう一つの物語〉―女たちの交錯の様相―」「近代文学試論」第四十六号　広島大学近代文学研究会　二〇〇八年十二月　五八頁

（注９）田中美代子『三島由紀夫　神の影法師』新潮社　二〇〇六年十月　一一一頁

第三章　「暁の寺」論
―法の受肉者と模倣者―

第一節　「理智」の破棄

『豊饒の海』第三巻「暁の寺」は、前二巻から引き続き輪廻転生によって繋がる物語でありながら、その接続部分が特異だ。転生者が異国の姫であったり、その姫が生まれ変わる前の記憶を持っていたりする。更に、それまで作品間にのみ存在した空白の時間が作中に含まれるなど、構造上の変化が著しい。このように、「暁の寺」は、論じるべき問題点が多い。そこで、本章で「暁の寺」を論じるにあたり、主だった問題について整理していくこととする。

『暁の寺』で作者はこの〈作品〉を成り立たせている唯識論哲学の図式をひとまず整理して、後半の展開の前提を準備しようとしたのだろう。そして唯識論の概念を〈作品〉の中に練り込んでいくための「方法的手続き」がもたらした結果として、作家は、自己の芸術的構成へのこだわりも、そして常にもっていたアイロニツクな筆致までも〈意図的に〉放棄してしまったのである。このことはいわゆる「小説」にとってプラスではありえない。[注1]

まずは唯識の問題だ。柳瀬善治氏が指摘するように、後半の展開への準備として据えられた唯識語りであるが、その大半は否定的に論じられてきた。『豊饒の海』の大前提である輪廻転生の根幹に関わる重要な要素、唯識。そして、阿頼耶識。それを引き込んだのは本多だ。唯識や阿頼耶識そのものについても論じるべき事柄ではあるが、本章では、作中における位置づけに重点を置いて解明していく。

続いて、ジン・ジャンが転生者か否かの問題だ。先行研究でも、多くの研究者がこの問題を取り上げている。その最大の理由は、転生の証拠が曖昧な点にある。ジン・ジャンは、転生の証拠である黒子の有無が曖昧であり、目に見える形での証拠が不足しているのだ。この客観性の欠如が、彼女が転生者か否かを不透明にしている。また、ジン・ジャンが転生者として二十歳で亡くなったかも不明瞭だ。しかし、彼女が本物であるかを問題視しているのは、あくまで読み手だけだ。何故なら、本多以外は輪廻転生のことを知らず、唯一転生を観察する本多は、ジン・ジャンが勲の生まれ変わりであることに確信を持っているからだ。つまり、客観的根拠を持って本物だと証明されようがされまいが、本多にとっては本物の転生者としてジン・ジャンは存在しているのだ。

観察者として輪廻転生を証明してきた本多自身にも変化が現れる。「覗見」の問題だ。これまで、本多は何ら手続きを踏まずに観察してきた。ところが、「暁の寺」において、「覗見」という身を隠す手続きを踏んでからの観察を行っている。今まで必要としなかった手続きを必要としたのは何故か。その原因を本多自身は「客観性の病気」というものの「悪癖」としている。その「悪癖」の意味するところについても併せて明らかにすべきだろう。

このように、「暁の寺」の問題の多くは、本多を発端としている。本章では、本多を中心に据えて、「暁の寺」について論じていきたい。

前章でも本多の「理智」については考察したが、「暁の寺」でもまた本多の「理智」について論じていきたい。「春の雪」で理性的な本多らしからぬ働きによって清顕を救おうと立ち回ったが、その役割を終えて清顕と離別すると、「理智」「理性」を基盤とする「論理の世界」に住むようになった。ところが、「奔馬」で勲と出会うと「理智」を上回る「情熱」を原動力に、再度救い手として動いた。しかし、そのどちらも失敗に終わった。そして、「奔馬」において勲が「自刃」した後、四十七歳の本多は、二度と「情熱」を宿すことは無いと考えるようになっている。

> 四十七歳の本多の心は、ほんの些細な感動をも警戒して、そこにすぐさま欺瞞や誇張を嗅ぎつける習性にしらずしらず染まつてゐた。あれが最後の情熱だつた、と本多は思い返した。すなわち清顕の生まれ変りと知つた勲を救うために、職を抛つたときのあの情熱。……そして彼は「他人の救済」という観念の、あますところのない失敗を体験したのである。
>
> 他人の救済ということを信じなくなつてから、彼は却つて弁護士として有能になつた。情熱を持たなくなつてから、他人の救済に次々と成功を納めた。民事であれ、刑事であれ、富裕な依頼人でなければ引受けなくなつた。（「暁の寺」第一章）

「春の雪」「奔馬」で原動力として機能していた「情熱」を本多は失った。この消失により、「他人の救済ということを信じなく」なった。何故なら、本多の「情熱」は、「他人の救済」にのみ働いていたからだ。一方で、「情熱」を失った後は「他人の救済」に成功するようになる。それは、無償の、何ら見返りを求めない本多の内から出るものを根拠とする救出劇が無力であることの証だ。つまり、本多という観察者が行為者を模倣したような「情熱」を宿すことの否定であった。この失敗を受け、本多は自分の本質の捉え方を改めている。それは、それまでの本多の根幹を否定するものだ。

それは熱い乾いた土地にしみ入る驟雨を待つやうな喜びの心だつた。

こんな自分の感情に出会ふことが、本多にとつては自分の本質に出会ふことだと感じられた。若いころは不安や悲哀やあるひは理智的な明晰を、自分の本質だと考へることがしばしばだつたが、そのどれにも本当のものはなかつた。勲の割腹をきいたとき、刺すやうな悲しみよりも、何か徒労の鈍い重味がすぐさま心にのしかかつたが、日を経るにつれて、再会の喜びを待つ気持に変つた。本多はそのとき人間的な感情を喪つてゐる自分に気づいた。自分の本質は、この世のものならぬただならぬ喜びに属してゐるのかもしれないのだ。人みなの免れえぬ愛別離苦をひとり免れてゐるからには。（「暁の寺」第三章）

本多は、自身の本質を「この世のものならぬただならぬ喜びに属しているのかもしれない」と考えるようになった。それは、「理智」的であることは、自分の本質ではないという否定だ。この否定の要因に、輪廻転生がある。本多の目の前で繰り広げられた清顕から勲への転生の軌跡は、本多の認識を変化させるには充分であった。本多にとって、死別は別れでは無くなった。何故なら、死の後には生まれ変わりとの再会が待っているからだ。死とは、終わりを意味するのではなく、次に生まれ変わる準備に入ることで起こる。しかし、このことに誰もが気がついているわけではない。だからこそ、「人みなの免れえぬ愛別離苦」なのだ。その中で、本多はそのことを知り、死に対する悲しみを失った。「人間的な感情」では、死は悲しむものであるが、本多にとっては再会の喜びを喚起するものとなっていた。この本多の変化は全て輪廻転生を観察したことによる結果だ。このような変化が起こった本多は、死の悲しみからの解放だけでなく、あらゆるものからの解放、「自由」を手に入れることとなった。

五十に近づいた本多の年齢の一得は、もはやあらゆる偏見から自由になつたことだと云へよう。自ら権威となつたことがあるから権威からも。自ら理智の権化になつたことがあるから理智からも。（「暁の寺」第二章）

「暁の寺」に登場する本多は、「情熱」や死の悲しみからのみならず、「理智」からも解放された存在となった。先に本多の変化は輪廻転生を目撃したからだとしたが、ここでもう一つ要因があることが明かされた。年齢だ。「奔馬」で勲が自決したのは、本多が三十九歳の頃であるから、そこから八年の時が流れている。この間に「情熱」を失い、それにともなって「他人の救済」に成功するようになる。その対価として富と権威が本多には与え

られた。ここで本多が成功している「他人の救済」とは、弁護士としての成功だ。救いたいという「情熱」の伴わない弁護人となった本多は、感情の無い「理智」的な弁護人であった。その結果、本多は「理智の権化」となった。権威ある人間は権威に屈することはなく、「理智の権化」は「理智」に左右されない。そうすることで、本多はそれらから解放され、「自由」を手にした。この「自由」は、本多が「情熱」的なままでは手に入れられないものだった。このように、「情熱」を完全に捨てた一方で、「理智」からは「理智の権化」になることで解放されたとしている。つまり、未だ本多は「理智」の人なのだ。ところが、ここまで「理智」の人であった本多が「理智」を捨てることになる。今までは、「情熱」が表に出ることで「理智」が後退することはあっても、破棄することのなかった。それにも関わらず、何故捨てることになったのか。

本多はどうやつて自分の理智を、この烈しい夕陽、この悪臭、この微かな瘴気のやうな川風のなかへ融け込ませることができるかと疑つた。どこを歩いても祈りの唱和の声、鉦（かね）の音（ね）、物乞ひの声、病人の呻吟などが緻密に織り込まれたこの暑い毛織物のやうな夕方の空気のなかへ、身を没してゆくことができるかどうか疑はしい。本多はともすると、自分の理智が、彼一人が懐ろに秘めた匕首の刃のやうに、この完全な織物を引裂くのではないかと怖れた。

要はそれを捨てることだつた。少年時代から自分の役割と見做した理智の刃は、すでにいくたびかの転生の襲来によつて、刃こぼれのしたまま辛うじて保たれていたが、今はこの汗と病菌と埃の人ごみの中へ、人知れず捨ててゆくほかはなかつた。（「暁の寺」第八章）

勲の転生者であるジン・ジャンと会った後、本多はインドのベナレスで「理智」を捨てた。本多は、ベナレス以外にもアジア諸国を旅している。特にタイとの関係は深く、「春の雪」に登場した留学生はタイの王子たちであったし、ジン・ジャンと出会うのもタイである。ところが、本多が「理智」を捨てるのはベナレスでのことだ。何故ベナレスだったのか。それを明らかにするために、テキスト内のアジア諸国の描写について考える。

『暁の寺』の冒頭で展開しているのは、あたかも観光する本多のまなざしと同一化したような語り手の視点である。ここには視覚的情報をディテールの描写を通して言語に変換して表情＝代行し、いわば言語による把握と再構築によってテキスト上に現存させるという言語実践が展開している。（注2）

久保田裕子氏が指摘するように、「暁の寺」では、客観的な描写を持って、アジア諸国を現存させている。読み手に原体験かのように感じさせる描写と合わせて、本多の自分語りも丁寧に挿入されている。場面描写と本多の内面変化を追っていくことで、ベナレスで「理智」を捨てた理由を探りたい。

一旦理智をとほすことなしには、決して外界に接しない性質の本多にとつて、ここではすべてが肌をとほして感じられ、自分の肌が、熱帯植物のけばけばしい緑や、合歓（ねむ）の真紅の花や、寺を彩る金の華飾や、突然の青い稲妻などによつて、時あつて染められることによつて、はじめて何ものかに接するといふ体験ほど、めづらしいものはなかつた。あたたかな驟雨。ぬるい水浴。外界は色彩のゆたかな流体であり、ひねもすこの流体の風呂に浸かつてゐるやうなものだ。日本にゐる本多にどうしてそんなことが考へられよう。（「暁の寺」第二章）

本多は、日本に居る時には体験することの無かった「理智」を必要としない認識行為を体験した。それを可能にしたのがタイという場所だ。日本とは違う空気や環境を、本多は「理智」ではなく「肌をとほして」認識していた。つまり、タイという場所は、「理智」を必要としないのだ。本多は自分の持つ「理智」の無価値を体験した。この体験により、本多の中で「理智」を捨てることに対する抵抗感が弱まったと考えられる。何故なら、この後に、「理智」が自分の本質であるとする考えを否定するからだ。

幼いジン・ジャンと会う前の本多は、「理智」の無価値を知り、自分の本質ではないと否定した。そんな中で対面したジン・ジャンは、清顕と勲の記憶を持っていた。本多は菱川の通訳を介してそれを聞かされる。そこに本多の「理智」は通用せず、菱川の訳す言葉とジン・ジャンの姿から肌を通して感じるのみだ。勿論それだけでは満足せず、彼女が記憶を持っているのかを確認する時には、「理智」的に質問をしている。また、後日水浴びをするジン・ジャンの脇腹に黒子を確認しようと目を凝らしていたことから、タイに居る本多は、まだ「理智」を通して接する性質を欠いてはいなかった。

続いて向かったカルカッタでの本多はどうか。カルカッタで本多が見たのは仔山羊が犠牲執行人の若者によって首をはねられる姿だった。若者の手から「神聖さはひどく日常的に、汗のやうにしたたり落ちてゐた。」（「暁の寺」第七章）と感じた。この犠牲の式から、本多ははじまりを感じとり、何度となく思い返した。

犠牲の式がそこであつけなく終つたのではなく、そこからむしろ何かがはじまり、不可視の、より神聖でより忌はしくより高い何ものかへ、今、橋が懸けられたとゐふ気がしたのである。（「暁の寺」第八章）

それは、輪廻転生という「理智」的な本多を「情熱」的に変えるものと同じ原理であった。そして、勲の純粋の定義とも通ずるものがある。「神聖でより忌はしい」という対極なものへ向かっていくのだ。ここでは、輪廻転生も純粋も、日常の中にある。それも、「理智」では無く、肌でそれを感じることが出来るということに、本多は心奪われた。

カルカッタで死から何かがはじまる様を目の当たりにした本多は、「神聖が極まると共に汚穢も極まつた町」（「暁の寺」第八章）であるベナレスへと入る。ここまでの本多の変化を踏まえて、何故ベナレスで本多は「理智」を捨てたのかという問いに答えていきたい。

本多はアジア諸国を巡ることで、「理智」というものの無価値を実感している。何故なら、ここでは「理智」を通して認識する必要は無く、肌を通して感じることが出来るからだ。更に、神聖さも忌まわしさも日常に溶け込み、認識するまでもなく、そこにあった。寧ろ、ここでは本多の「理智」は邪魔でさえあった。そのことについて身をもって感じた本多だからこそ、「理智」を捨てようという考えにたどり着いた。何故ベナレスで本多が「理智」を捨てたのかという問いの答えは、アジア諸国を巡る中で肌を通して感じる経験を重ねたことで、完全な織物のようなベナレスでは、「理智」が認識の邪魔をしているという考えに至ったからだ。

そして、「理智」を捨てた結果、本多は今まで知ることのなかったことを知る。それは、「理智」を通して認識する観察者では知ることの出来ないことであった。

勲がたえず自刃の幻のかなたに思ひ描いてゐた太陽こそ、正にこの太陽だつたのだ、と。（「暁の寺」第八章）

本多は、見ることのできなかった勲の思い描いた景色を認識するに至った。このように、今まで認識することが出来なかった転生者の一部を認識する一方、「理智」があった際に出来た冷静な判断が出来なくなっていく。それは、勲を転生者であると認めることを「すこぶる軽率」（「奔馬」第十九章）と言ったときのような、根拠を求めない判断をしていくというものだ。「理智」という支柱を失った本多は、転生者であるジン・ジャンに傾倒していく。もう一つ、アジア諸国を巡ったことで、本多は新たな性質を得る。これも、「理智」では無く、肌を通してみた景色による影響だ。ベナレスで本多は「不治の病」に犯された。

自分の目が、究極のものを見てしまつた以上、それから二度と癒やされないだらうと感じられた。あたかもベナレス全体が神聖な癩にかかつてゐて、本多の視覚それ自体も、この不治の病に犯されたかのやうに。（「暁の寺」第八章）

この「不治の病」は、「聖牛がこちらへ向いた瞬間」（「暁の寺」第八章）に、見る側の本多が見られる側を体験したことで生じた。「本多の視覚」にかかった病は、本多にある悪癖を生んだ。「覗見」だ。

第二節　「覗見」に現れた「情熱」

「暁の寺」で突如提示された本多の「覗見」は、目が患った「不治の病」の象徴だ。ここからは、本多の「覗見」の問題について考察していく。

本を取り去つたつき当たりの壁には、小さな穴が穿たれてゐる。埃だらけのその暗い空間は、丁度顔をさし入れるだけの広さがある。（「暁の寺」第二十七章）

この覗き穴は、数冊の本を取り去ることで現れるようになっている。それは、本多が入念な準備によって、見咎められることなく「覗見」する場を自ら作り出したことの証拠だ。この入念な準備によって行われる「覗見」によって、本多は「年齢をこえて少年に似た動悸を胸に感じ」（「暁の寺」第二十七章）ている。それと同時に、「十九歳の清顕と五十八歳の本多をつなぐ唯一の闇の通ひ路だつた」（「暁の寺」第二十七章）とも語っている。つまり、この行為は、本多にとって心を若返らせる程の快楽だった。この「覗見」という行為について河村正敏氏は、「認識という行為のカリカチュア」[注3]と述べ、有本伸子氏は、「本多の視線の権力性がもっとも凝縮して表れる」[注4]行為と述べている。「覗見」という行為によって、認識者としての本多が強調されたと言えるだろう。

先に、「不治の病」にかかり、生じた悪癖が「覗見」であるとしたが、これを本多は、「客観性の病気」（「暁の寺」第八章）と名づけている。では、「客観性の病気」について、本多の言葉を手掛かりに整理していく。

決して参加しない認識者の陥る最終的な、快い戦慄に充ちた地獄。（「暁の寺」第二十五章）

「客観性の病気」とは、認識という行為に魅せられた認識者が、最終的に陥る病だと言う。その快楽に抗えず、本多も患ってしまう。

恋人たちの戦慄と戦慄を等しくし、その鼓動と鼓動を等しくし、同じ不安を頒ち合い、これほどの同一化の果てに、しかも見るだけで決して見られぬ存在にとどまること。（「暁の寺」第三十二章）

また、「客観性の病気」を患った本多は、自身を徹底的に除外した客観性を重視した認識方法を求めるようになった。しかし、この「客観性の病気」の出現は、あまりに唐突に感じられる。先田進氏は、次のように述べている。

おそらく作者にとっては、読者に多少不自然に思われようが、本多を《覗見》者と規定しておくことは、その後の小説展開を構想する上で必須の手続きだったのであろう。(注5)

唐突に付与されたように思える本多の「覗見」者としての一面には、不自然さ故に、付与しなくてはならない理由が必要だ。今までの本多であれば、その理由は「情熱」であった。しかし、以前までの救い手としての「情熱」では、覗穴を見つからないように作ってまで覗こうと考えるのは不自然だ。その熱心さの根本には何があるのか。次に、本多の公園での「覗見」の場面を引用する。

その静かな作業の執行者は、あちこちの木陰や草むら蟋蟀のやうに隠れてゐた。本多も、無名のその一人だった。（「暁の寺」第三十二章）

比較的安全な書斎だけでなく、公園という危険が伴う場所でも本多は「覗見」をしている。その時、本多は弁護士ではなく、無名の覗き手であった。この覗き手としての本多が世間に晒されれば、本多は忽ち「もつとも恥ずべき犯人」（「暁の寺」第二十七章）となる。この「もつとも恥ずべき犯人」の前例を古手の弁護士から聞いた本多は、公園での「覗見」という「習慣」と「すつぱり縁を切」（「暁の寺」第三十一章）った。何故なら、本多は「見るだけで決して見られぬ存在にとどま」（「暁の寺」第三十二章）らなくてはならなかったからだ。しかし、「すつぱり縁を切つた」と言ったものの、書斎での「覗見」を本多がやめることは無かった。それは、「見るだけで決して見られぬ存在にとどまること」（「暁の寺」

第三十二章）が可能な場所だったからだ。

本多の「覗見」が「客観性の病気」であり、覗き手は「決して参加しない認識者」（「暁の寺」第二十五章）でなくてはならないことがわかった。では、何故そこまで徹底して覗き手の不在に固執するのか。

自分の存在を消して、ジン・ジャンを隈なく眺めるには、どうすればよいかといふ難問にとらはれた。ジン・ジャンが本多の存在に気づかずに、いきいきと動き、放恣に横たはり、内心のどんな秘密をも開顕し、ごく自然に活きてゆくありのままの姿を、あたかも生物学者のやうに細大洩らさず観察できたら、どんなによからう。そこへ本多といふ要素が一つ加はつたら、その瞬間にすべては瓦解するのだ。（「暁の寺」第三十二章）

このように、覗く相手、中でもジン・ジャンに対しては、本多は徹底的に自身の存在を消したいと考えている。何故なら、本多が見たいものは、本多が存在しない時にしか現れないと考えているからだ。そして、本多が見たいのは、ジン・ジャンの秘密と、勲の生まれ変わりとしての証である脇腹の三つの黒子であった。

本多が見たいと願っていた黒子は、何も「覗見」をしなくては見る機会が無いものでは無い。事実、本多は幼いジン・ジャンの水浴びの様子や、自身の別荘のプールにおいて水着姿を見ている。脇腹の黒子を確認するだけならば十分だ。それは、勲の黒子を「覗見」などしなくとも確認できたことからも明らかだ。しかし、堂々と黒子の存在を確認する機会を得た時には、ジン・ジャンの脇腹に黒子が見つからなかった。それにもかかわらず、「覗見」をした時には黒子が見えた。つまり、「見るだけで決して見られぬ存在にとどまること」で、本多は見えなかった黒子をその目に映すのだ。

ジン・ジャンにはつきり清顕や勲の転生の証跡があらはれたはうがよい。さうすれば、情熱はさまされるだらう。（「暁の寺」第三十二章）

この発言は、本多の考え方を自分で否定しているものだ。転生者であるからこそ惹かれたにも関わらず、転生者だと証明されれば「情熱」が冷めるとはどういうことか。それは、今までの転生者を救うという「情熱」とは全く別物であるということだ。この情熱は、本多の中に矛盾を生んでいる。この矛盾について明らかにすることは、「暁の寺」における本多の変化の意義が見えるはずだ。

第三節　認識と行為の矛盾

「覗見」の問題を整理することで、本多に今までに無い「情熱」が宿った。その内容を探っていく。そこで重要になってくるのが、本多が求めているものは、転生者では無くジン・ジャンという少女であるということだ。そこで、一つの可能性を探る。

本多が恋をするとは、つらつらわが身をかへりみても、異例なばかりでなく、滑稽なことだつた。恋とはどういふ人間がするべきものかといふことを、松枝清顕のかたはらにゐて、本多はよく知つたのだつた。（「暁の寺」第三十九章）

このように、清顕の恋を傍らで見ながら、本多自身は恋をするような人間ではなかった。清顕の姿を、自身に置き換えて考えることが出来なかった。

「私はジン・ジャンに恋してゐるんだと思ひますよ」（「暁の寺」第四十一章）

ところが、ここで本多は、「恋」をしていると認める。今までの本多にはなかったことだ。ここで、一つの仮説を立てたい。本多の「情熱」とは、「恋」ではないか。観察者として存在する本多と、観察される側である行為者の清顕とでは、立場が違う。だからこそ、本多は観察者である自分が「恋」することは「滑稽なこと」と考えた。しかし、行為者であった勲を理解することができたと共に、「変身の欲望が目覚めてゐた」（「暁の寺」第二十五章）という言葉から、彼が清顕ように「恋」を体験する可能性は大いにある。それも、ジン・ジャンという異国の年の離れた姫への「恋」という、清顕がした「至高の禁」（「春の雪」第二十五章）を犯す「恋」と似たいびつなものであればなおさらだ。

自分が望むものは決して手に入らぬものに限局すること、もし手に入つたら瓦礫と化するに決まつてゐるから、望む対象にできうるかぎり不可能性を賦与し、少しでも自分との間の距離を遠くに保つやうに努力すること、……いはば熱烈なアパシーとでも謂ふべきものを心に持すること。（「暁の寺」第三十九章）

本多のジン・ジャンへの感情は大変いびつなものだ。そのいびつさの正体は、「不可能性」という言葉にある。本多の言う「不可能性」は、「自分との間の距離を遠くに保つ」ことで実現される。その具体例が、ジン・ジャンが失踪した朝の本多の様子に表れている。

心は不安にかられながら、本多は半ばこれをたのしんでゐた。ジン・ジャンが部屋にゐないと知つてからも、彼はすぐ狼狽して克己を呼んだのではなかつた。失踪したジン・ジャンの残り香を、部屋のそこかしこに味はふことに熱中してゐたのである。

（第三十九章）

ジン・ジャンの不在を知ったことで、本多は、本人を探すよりも残り香に飛びついた。ここからも、「不可能性」を求める姿が見てとれる。この「不可能性」への貪欲さは、清顕が「至高の禁」を犯そうとする貪欲さと通ずるものがある。

ここで本多と清顕について「春の雪」から引用する。

もしかすると清顕と本多は、同じ根から出た植物の、まつたく別のあらはれとしての花と葉であつたかもしれない。清顕がその資質を無防備にさらけ出し、傷つきやすい裸で、まだ自分の行動の動機とはならぬ官能を、春さきの雨を浴びた仔犬のやうに、目にも鼻にも滴をなして宿してゐるのと反対に、本多は人生の当初はやくもその危険を察して、その明るすぎる雨を避けて、軒先に身をちぢめているほうを選んだのかもしれない。（「春の雪」第二章）

行為者と観察者という立場の違いはあるものの、二人は「同じ根から出た植物」という酷似した性質を持っていた。「春の雪」の時点では、「まつたく別のあらはれ」のままで終わったが、「暁の寺」において本多がジン・ジャンに「恋」したことで、「まつたく別のあらはれ」から、同じ「花」へと変化したのではないか。つまり、本多は、勲を理解しただけで無く、清顕とも心境を共有するに至ったということだ。しかし、それに対する態度があまりにも違うことがわかる。自分のものにするべく情熱を燃やした清顕に対し、本多は、残り香を味わい、実体の無い見えないものに焦がれている。この違いは無視できない。

ここまで、本多が「暁の寺」で宿した「情熱」は「恋」ではないかとしてきたが、それには一つ問題がある。

だから知るかぎり見るかぎりのジン・ジャンは、ほぼ本多の認識能力に符合すると考へてよい。その限りにおけるジン・ジャンを存在せしめているのは、他でもない本多の認識の力なのだ。

そこでジン・ジャンの、人に知られぬ裸の姿を見たいといふ本多の欲望は、認識と

恋との矛盾に両足をかけた不可能な欲望になつた。なぜなら、見ることはすでに認識の領域であり、たとへジン・ジャンに気付かれてゐなくても、あの書棚の奥の光りの穴からジン・ジャンを覗くときには、すでにその瞬間から、ジン・ジャンは本多の認識の作つた世界の住人になるであらう。彼の目が見た途端に汚染されるジン・ジャンの世界には、決して本多の見たいものは現前しない。恋は叶へられないのである。もし見れば又、恋は永久に到達不可能だつた。（「暁の寺」第四十二章）

本多がジン・ジャンに求めるものは、「不可能性」だ。それは「認識と恋との矛盾」を生み、本多の「恋」の成就を拒む。本多の「恋」とは、「ジン・ジャンの、人に知られぬ裸の姿を見たい」という欲望を内在している。それは「客観性の病気」の一番の欲求だった。ところが、この欲求は、本多の不在、究極的には「本多の死」（「暁の寺」第四十二章）においてでしか満たされない。恋する当事者の不在は、即ち「恋」の終わりだ。しかし、本多の「恋」は、「ジン・ジャンの、人に知られぬ裸の姿を見たい」という欲求が満たされなくては成就しない。「認識と恋との矛盾」という大きな問題を本多は抱えている。

こうした矛盾を孕んだ本多の「恋」は、ジン・ジャンと慶子のレズビアンラブを目撃したことで終わりを突き付けられた。

ジン・ジャンにはつきり清顕や勲の転生の証跡があらはれたはうがよい。さうすれば、情熱はさまされるだらう。（「暁の寺」第三十二章）

本多がこのように語っていたことを考慮すると、「恋」を本多の「情熱」とするのは難しい。何故なら、本多の「恋」の終焉は、転生の証拠である黒子の出現ではなく、レズビアンラブによるものだからだ。

では、本多の宿した「情熱」とは何か。それは、観察すること。言い換えれば、見ることだ。「本多はもともと行為をするやうには産まれて来なかつた」（「暁の寺」第十二章）とあるように、本多は元来観察者だ。ところが、「暁の寺」において、勲の心情を理解したり、清顕と同じ「恋」をしたりなど、恰も行為者のようになった。しかし、本多は「客観性の病気」を抱えている。見る事をやめられない。見たいものを見ることでのみ充たされる欲望が本多にはある。見たいものは、観察対象となりうる人物、転生者だ。勿論、「暁の寺」第三十六章にて、一度ジン・ジャンの黒子を見た本多が見ることをやめていないことは無視できない。しかし、最初にジン・ジャンに黒子を見た後から、本多は「恋」を自覚する。つまり、一旦は「情熱」よりも「恋」を優先するのだ。転生者である証拠を見たことで、

一度本多の見ることへの欲求は満たされたのだろう。ところが、その一瞬だけでは本多の欲求が完全に満たされることは無かった。それは、ジン・ジャンの「秘密」を見ていないからだ。その上、見たいと願うジン・ジャンを見ることが出来ないことへの欲求不満から、本多は公園へと向かう。他人の秘密を覗き見ることで、欲求を満たそうとした。しかし、公園という場所は本多の求める「見るだけで決して見られぬ存在にとどま」ることは難しい。そこで見ることは、行為者と紙一重だ。そうした危険から逃れ、「見るだけで決して見られぬ存在」として見ることが可能な自身の別荘の覗き穴から、ジン・ジャンと慶子のレズビアンラブという「秘密」に加え、転生者の証拠である黒子を見たことで、本多の見ることへの欲求は満たされた。

「暁の寺」の本多は、行為者側へと傾きながら、観察者としての欲望を満たすべく立ち回り、最後にその欲求を充たす。すると、本多は火事で燃える自身の別荘を前に、ジン・ジャンでは無くベナレスで見た「究極のもの」（「暁の寺」第八章）を思った。これは、本多が転生者以外に心を奪われていることを示している。ジン・ジャンの死を確認していないにも関わらず、本多にとっての輪廻転生の物語が終わったかのようにもとれる。それは、「春の雪」「奔馬」「暁の寺」と続いてきた次の転生への準備である二十歳の死を、ジン・ジャンには想定していないことからもわかる。

> 思ひがけなく十五年後に、米国人妻になつて東京に戻つて来たと、その瞬間本多は信じた。（「暁の寺」第四十五章）

本多の輪廻転生の理論で言えば、この時ジン・ジャンは亡くなっていなければならない。ところが、本多はジン・ジャンが三十歳を過ぎてもなお生きていることを信じた。転生者である証拠を掴んだにも関わらず、なぜ彼女が生きていることを信じたのか。それは、唯識、阿頼耶識について理解を深めた本多にとって、彼女の生死が重要ではなくなったからだ。

> 輪廻転生は人の生涯の永きにわたつて準備されて、死によつて動きだすものではなくて、世界を一瞬一瞬新たにし、かつ一瞬一瞬廃棄してゆくのであつた。（「暁の寺」第十九章）

このように考えるようになった本多にとって、ジン・ジャンの死は重要な転生の証拠とは成りえない。このように、「暁の寺」において、転生についての考え方に変化が生じてい

ることは明らかだ。これこそ、本多の変化の意義だ。今までとは違う転生への解釈は、次巻へ転生の物語を繋げるために必要不可欠だった。本多の「認識と行為の矛盾」は、輪廻転生を積極的に肯定する転生の証明者として必要な変化だったのだ。

第四節　法の受肉者　ジン・ジャン

ここまで、本多を中心に「暁の寺」について論じてきた。その変化の大きさから、本多の転換期であったことは明らかである。そして、その要因については、タイをはじめとするアジア諸国の影響もさることながら、ジン・ジャンの影響によるところが大きい。続いて、ジン・ジャンについて考察していく。武内佳代氏は、ジン・ジャンについて次のように評している。

> 月光姫のそれが、処女性、受動性、不可知性、神秘性といった、およそサロメ的な〈オリエントの王女〉表象に解釈を回収できそうな性質のものである[注6]

ここで、それと指すのは少女性である。そこに「サロメ」を見るというのだ。このように、清顕や勲とは全く違う性質を有するジン・ジャンは、ここまで男性間で結ばれていた生まれ変わりの繋がりを断った。それも異国の姫であることの特異性を無視することは出来ない。そこで、本節では、ジン・ジャンについて二つの観点から考えていきたい。一つ目は、転生者としてのジン・ジャンである。幼少期に自ら勲の生まれ変わりだと主張したジン・ジャンの転生者としての側面を考察する。二つ目は、レズビアンという観点である。清顕も他の転生者も、同性愛者では無い。『豊饒の海』で現れるレズビアンは、ジン・ジャンと慶子だけである。これについては、慶子との関係を手掛かりに、何故ジン・ジャンはレズビアンでなくてはならなかったのかを考えていくこととする。

まず、転生者としてのジン・ジャンを考えていく。幼少期のジン・ジャンは、勲の名前は出さなかったが、自分は日本人の生まれ変わりであると主張している。この主張の必死さを受けて転生の真偽を測る本多がした二つ質問に、澱みなく回答している。しかし、彼女の言葉の真意を本多は読み取ることが出来なかった。

> 本多は心中おどろいたが、果して姫のお心の中に、すでに過ぎた二つの前世の物語が、あたかも小さな密画の絵巻のやうに、そのままの形で詳さに録されてゐるのかどうかは定かでなかつた。先程ああして不義理を詫びた勲の言葉にしても、その言葉の背景をこまやかに御存知なのかどうかはわからなかつた。現にこんな正確な数字も、全く

無感動に、ただ思ひつくままの配列と謂つた具合に、姫の口から洩れたからである。
（「暁の寺」第三章）

唯一ジン・ジャン本人が転生について言及する場面でありながら、その内面は本多にも読者にも明かされない。そもそも、彼女の発言は全て菱川の通訳を通して聞かされるものであるため、その言葉に彼女の内面を見ることは極めて難しい。また、本多が日本に帰国する前、ジン・ジャンとの別れの際に菱川が「訳しまちがへて」（「暁の寺」第十一章）と言って本多の言葉を変えて彼女に伝えてしまうこともあり、通訳の信頼度は低い。以上のことから、通訳の介在する状況での内面理解は不可能なものだと言わざるをえない。だからこそ、本多は他者の介在なしに彼女と相対したいと考えるのだ。言葉を介さない一方的な観察をもって、本多は彼女を知ろうと画策し、バンパインでそれを実現する。

ここで本多は、身動ぎもせずに巨大な雲を凝視しているジン・ジャンの姿を見る。この姿は、清顕が別荘で「日がな一日、海の雲の微妙な変化を見つめてゐた」（「春の雪」第三十一章）姿と通ずるものがある。しかし、清顕の自分語りで語られたそれとは違い、その意味を語るのは本多という他者だ。

姫は時間と空間とを同時に見てゐた。すなはち、彼方の驟雨の下の空間は、本来ここから見へる由もない未来か過去かに属してゐた。身を現在の晴れた空間に置きながら、雨の世界を明瞭に見てゐることは、異なる時間の共在でもあり、異なる空間の共在でもあつて、雨雲が時間のずれを、はるかな距離が空間のずれを垣間見せてゐた。いはば姫はこの世界の裂け目を凝視してゐたのである。（「暁の寺」第四章）

彼女の視線の先にある雲と空とを、本多は瞬時にこのように認識した。言葉を介さない観察とは、観察者の見えたもの感じたことのみで構成される一方的なものだ。ここで示されているのは、彼女そのものではなく、本多の中のジン・ジャン像の構築過程である。

では、本多の認識も介在しないジン・ジャンとはどのような人物なのだろうか。再度バンパインでの彼女を見ていく。まず、子どもらしくはしゃぐ姿を見せたジン・ジャンは、一転して身動ぎせずに雲を眺めていた。続いて、本多の手を取って苑内を歩きまわり、その間、絶えず微笑を浮かべている。途中尿意を催した後、川で水浴びをした。本多の語りを除けば、少女の気ままに遊ぶ姿だ。奈良崎英穂氏の言う「転生とは、至って主観的な思い込みの中にしかあり得ないのである。[注7]」という言葉の通り、本多の認識力が無ければ、ジン・ジャンは転生者たりえない。勿論、彼女が日本人の生まれ変わりであると主張し、

本多の記憶と合致する返答をしてみせたことは無視出来ない。しかし、それも本多と彼女（通訳を通した不確かな言葉）との間でのみ了解されたことであり、転生を肯定する者同士がいくら主張してもそれは根拠の無い思い込みの範疇を越えることは無い。更に、本多とジン・ジャンの共通認識であった転生が、彼女の口から否定されてしまう。

小さいころの私は、鏡のやうな子供で、人の心のなかにあるものを全部映すことができて、それを口に出して言つてゐたのではないか、思ふのです。あなたが何か考へる、するとそれがみんな私の心に映る、そんな具合だつた、思ふのです。どうでせうか（「暁の寺」第三十章）

十八歳の彼女は、「幼さい時のこと、私は何もおぼえてゐません。」（「暁の寺」第三十章）と否定した上で、幼少の自分を「鏡のやうな子供」と評し、今の自分と切り離して語っている。この空白の時間と精神的断絶は何を意味するのか。まず、何故本多が最初に出会う時にジン・ジャンが七歳の少女である必要があったのかという問題がある。転生者が死を迎える年齢は二十歳と設定されている。後に約十年の時を経て再会するという空白の時間を作り、転生の記憶が無いジン・ジャンを登場させるのであれば、最初から十八歳の転生の記憶が無い彼女と出会ってもよかったはずである。しかし、転生の記憶を持つ七歳の少女は本多の前に現れた。

もし仮に、七歳の彼女が転生の記憶を持っていなかったとしたらどうだっただろうか。記憶を持たないとなれば、国外へ出せない理由がなくなるので、彼女は一人本国の小宮殿に残されることはない。そうなると、本多がこの旅の間に会うことは不可能だ。では逆に、記憶を持っていても、会うことが叶わなかったらどうだろうか。本多が彼女を転生者と認めるのは、清顕の夢日記があるからだ。そうなれば、本多とジン・ジャンの出会いは、転生者としての証拠を得ることが目的では無いということになる。輪廻転生と何ら関係の無いところで、七歳のジン・ジャンに出会う必然がそこには必要だ。

本論第三章第一節にて、本多のアジア諸国巡りは「理智」を捨てる旅であったと結論づけた。そこに七歳のジン・ジャンとの出会いも含まれている。そして、アジア諸国を巡る中で肌を通して感じる経験を重ねたことで、本多は「理智」が認識の邪魔をしているという考えに至った。その際たる経験が、言葉を介さないジン・ジャンとの時間であった。この時間の中で本多は彼女の「肉の愛らしさ」（「暁の寺」第五章）に出会う。最初に会った時の感情の見えないジン・ジャンでは無い、恥ずかしいという感情が伴った彼女の姿を見ることが出来たのは、肌を通して認識したからだ。この感動があったからこそ、本多は「理

智」を捨てることを躊躇しなかった。それは「究極のもの」（「暁の寺」第八章）を見る前準備として必要な手続きだったのだ。転生の記憶がある七歳のジン・ジャンに会うことは、「究極のもの」を見て「不治の病」を患う本多を作るための手続きであり、ここで作られた本多が、唯識や阿頼耶識という法を「暁の寺」に引き込む。この邂逅は、そのために必要な手続きだった。

幼い、転生の記憶があるジン・ジャンと出会う理由が明らかになった。続いて、十八歳のジン・ジャンに転生の記憶が無いことについて考えていきたい。

転生の記憶を失ったジン・ジャンと再会するのは、輪廻転生の研究を行った結果、唯識、阿頼耶識の思想で世界を見るようになった本多だ。詳しくは次章の「天人五衰」と合わせて考察するが、この時の本多は、「恋を妨げるのは転生であり、情熱を遮るのは輪廻だ」（「暁の寺」第三十章）と考えている。

> 左の脇腹の黒子が依然として見当らなければ、本多はきっと最終的に彼女に恋するだらう。（「暁の寺」第三十章）

妨げるものが無ければ、本多はジン・ジャンに「恋」することになるというのだ。では、何故本多は彼女に「恋」するのだろうか。

ここまでジン・ジャンについて整理してきたが、彼女は、清顕や勲と比べて内面の描写が少ない。それは、彼女の自分語りが極端に少ないことからも明らかだ。内面の欠如は、即ち精神の欠如である。「天人五衰」において、ジン・ジャンを引っ張った「運命」を、慶子は「肉」と評した。内面が欠如したジン・ジャンは、客観的な視点でのみ形作られた人形と変わらない。つまり、ジン・ジャンは美しい肉体だけの人形だということである。精神性の欠如した美しい女を、三島は『禁色』にて「己れの美に自足し、精神性によつて何ら補はれる必要を認めないメッサリイヌ」という「本当の女、正真正銘の女」と評した。この理論で言えば、ジン・ジャンは「正真正銘の女」だ。そして、本多はそんな彼女に「恋」するのだ。転生の証拠を持たないジン・ジャンは、精神を宿さないことで本多の「恋」の対象となった。ところが、彼女はそれを拒む。彼女は男を愛さない女であった。

続いて、ジン・ジャンのレズビアンの性質について考えていく。この事実が明らかになるのは、「暁の寺」全四十五章の内の第四十四章でのことだ。その相手は久松慶子であった。ジン・ジャンと慶子は、度々本多の与り知らぬところで会っている。最初に二人が顔を合わせるのは、「暁の寺」第二十九章の連絡無しに本多との約束を反故にするジン・ジャンが、その翌日に別荘へ来た時だ。これを切掛けに、二人は知人となる。ジン・ジャンの慶子へ

の信頼は厚く、慶子の甥である克己から逃れた彼女の行先は、慶子の元だった。この時の状況について、慶子は一つ嘘をつく。

ジヤツクさんが非番で泊まつてゐる朝の三時ごろ、いきなり戸が叩かれて、お姫様が飛込んで来たのですつて。（「暁の寺」第三十七章）

今朝まだ暗いうちに家へ逃げてきて、ジヤツクのベツドで寝てゐるわ。ジヤツクがいなくてよかつたわ。（「暁の寺」第三十九章）

（傍線は引用者による。）

この嘘を知った本多は「ひそかな小さひ優越感」（「暁の寺」第四十章）を感じるのみで、「無意味な嘘」（「暁の寺」第四十章）と気に留めていない。ここで、『豊饒の海』創作ノートへ目を転じてみる。

若い美しい聡子によく似た女（月光姫の世話係　実はレズビエンヌ）[注8]

慶子について、三島は「聡子によく似た女」と設定している。その慶子がつく嘘は、聡子のそれと同じく、女性の優位性が浮き彫りになる嘘である。ここにも、嘘による女性優位の構図が現れている。

嘘をついた慶子は、「私から頼めば、決してお断りするやうなことはないと思ふの。」（「暁の寺」第三十九章）と本多に言う。この発言は、慶子とジン・ジャンが密接な関係にあることの証拠だ。勿論、これは二人のレズビアンラブのことである。ジン・ジャンに「恋」をする本多にとって、この事実は絶対的な不可能性を生んだ。輪廻転生とレズビアンラブ。どちらも、本多には超える術の無い完璧な断絶を本多とジン・ジャンの間に出現させた。このように、ジン・ジャンは、本多とは断絶した人物として描かれている。

では、何故ジン・ジャンはこのような人物として描かれたのだろうか。それを解明する為に、ジン・ジャンの作中の役割について考えていく。まず、その手掛かりとして、小林康夫氏の「春の雪」への指摘を引用する。

なによりも法の禁忌（法による禁止そして禁じられたものとしての法）を侵犯することによって、法そのものに触れること、そして法の聖なるものを受肉することにほかならないからである。[注9]

小林康夫氏は、「春の雪」において清顕が「至高の禁」を犯す様をこのように述べている。これと同じ類の「法の禁忌」を、ジン・ジャンは犯していた。ここでの法とは唯識、阿頼耶識である。その法による輪廻転生の解釈を次に引用する。

輪廻転生は人の生涯の永きにわたつて準備されて、死によつて動きだすものではなくて、世界を一瞬一瞬新たにし、かつ一瞬一瞬廃棄してゆくのであつた。(「暁の寺」第十九章)

唯識、阿頼耶識による輪廻転生の解釈は、「一瞬一瞬新たにし、かつ一瞬一瞬廃棄」するものである。しかし、ジン・ジャンは転生前の記憶を持った状態で登場した。一瞬ごとに断絶しているべきものを、地続きのものとしてしまった。この禁を犯したジン・ジャンは、法そのものに触れたことにより、「法の聖なるものを受肉」したのではないだろうか。何故なら、彼女がその後「一瞬一瞬新たにし、かつ一瞬一瞬廃棄」を体現しているからだ。幼少期に有していた転生の記憶の消失、約束の一方的な破棄など、彼女の行動は連続性が乏しい。それは、唯識、阿頼耶識が示す世界の在り方そのものである。つまり、ジン・ジャンは、法の受肉者となるために、前世の記憶を持つ人物として描かれたのだ。本多をベナレスへと導き、世界そのものである唯識、阿頼耶識、そこに起こる輪廻転生を体現する法の受肉者として本多の前に彼女は現れた。それは、本多に世界解釈の方法を示すという役割が付与されていたからではないか。つまり、先の転生者のように夢と自身の死によって次の転生を示すのではなく、それ以外の転生の証拠を示す役割を担っていたのではないか。この役割の変更は、ジン・ジャンの死の瞬間にも現れている。彼女の次の転生へと繋がる死には、今までの清顕や勲にある絶頂が無い。慶子が「天人五衰」で言うようにジン・ジャンが「肉」に掴まれていたのであれば、肉体的に絶頂を迎えた時に死ななければならない。つまり、本多の別荘で肉欲に溺れた時に死を迎えなくてはならないということだ。火事という形でその機会があったものの、ジン・ジャンは逃れている。勿論、年齢が二十歳ではなかったこと。必ずしもその瞬間が「絶頂」であったと言い切れないことなどを考えれば、一概に火事の瞬間が適当だとは言えない。しかし、蛇に噛まれたその瞬間が「絶頂」であったとも言い切れない。また、本多の転生者の死に対する考えが変化していることにも注目したい。火事から十五年後、本多は、日本に来た三十歳を過ぎたタイのプリンセスをジン・ジャン本人だと確信していた。転生者である彼女に対して、三十歳を過ぎてなお生きていると考えていると考えたのは何故か。それは、唯識、阿頼耶識への理解を深めた

からだ。先に引用したように、唯識、阿頼耶識によって解釈された転生は「死によつて動きだすもの」では無い。唯識、阿頼耶識によって世界を解釈する本多にとっては、転生者の死は重要ではなくなったのだ。この本多の認識の変化もまた、ジン・ジャンが法の受肉者という役割を担ったからこそ生じたものである。

また、レズビアンラブによる本多の「恋」の完全なる敗北は、本多が法の受肉者になるために「法の禁忌」を犯すことを不可能にした。何故なら、本多は法の受肉者であるジン・ジャンを侵犯することが出来ないからだ。本多は、転生者である異国の姫に「恋」をするという「法の禁忌」を犯すことで、法そのものとなったジン・ジャンに触れようとしていた。ところが、彼女はレズビアンであり、男である本多が犯すことは叶わない。その結果、本多は法の受肉者になることは無かった。

唯識、阿頼耶識を世界解釈の真理と信じ傾倒していった本多は、唯識、阿頼耶識を体現しようとする。その結果、「認識と行為の矛盾」が生じた。本多の有する矛盾は、願望がその都度変わることに起因する。それは、「一瞬一瞬新たにし、かつ一瞬一瞬廃棄」する世界の在り方の模倣とも取れる。つまり、本多は、「暁の寺」において法の模倣者となったのだ。ただ観察していた本多が、法の模倣者となることで、「天人五衰」において見られるような、転生者に対して教育するといった観察者らしからぬ行動を取るようになる。「暁の寺」において重要度を増した唯識、阿頼耶識という法は、ジン・ジャンによって体現され、それを本多が模倣することで、「天人五衰」へと繋がっていく。

唯識、阿頼耶識への理解を深めた本多の眼前に「究極のもの」を見せたジン・ジャンは、「法の聖なるものを受肉」した姿だったのだ。

注

（注１）柳瀬善治『『暁の寺』論：芸術＝救済の否定」『三重大学日本語学文学』第十号
三重大学日本語学文学研究室　一九九九年六月　一三九頁

（注２）久保田裕子「王妃の肖像―三島由紀夫『暁の寺』におけるタイ国表象―」
『福岡教育大学国語科研究論集』第五十二巻　福岡教育大学国文学会
二〇一一年二月　二一～二二頁

（注３）河村正敏「『豊饒の海』を軸として」『国文学　解釈と干渉』昭和五十四年十月号
至文堂　一九七九年十月　一一三頁

（注４）有本伸子「『豊饒の海』―物語る力とジェンダー」『国文学　解釈と教材研究』
四十五巻十一号　学燈社　二〇〇〇年九月　八八頁

（注５）先田進「三島由紀夫の《覗見》の論理―『豊饒の海』第三巻「暁の寺」論―」

『人文科學研究』第八十一輯　新潟大学　一九九二年七月　二頁

（注６）武内佳代「三島由紀夫『暁の寺』にみるサロメ表象―月光姫再考の機縁として―」
『国文』第一〇四巻　お茶の水女子大学国語国文学学会　二〇〇五年一二月
三五頁

（注７）奈良崎英穂「隠蔽された転生者―『暁の寺』における転生の表象―」
『昭和文学研究』第四十六巻　昭和文学会　二〇〇三年三月　二六頁

（注８）三島由紀夫　佐藤秀明整理『『豊饒の海』創作ノート」『決定版　三島由紀夫全集』
第十四巻　新潮社　二〇〇二年一月　八二八頁

（注９）小林康夫「無の透視法―『豊饒の海』論ノオト」『ユリイカ』第十八巻五号
青土社　一九八六年五月　一五五頁

なお、各時代での年齢や事象の比較には、有本伸子氏の「『豊饒の海』時系列データ表」『国文学―解釈と教材研究―』第四十五巻十一号　学燈社　二〇〇〇年九月　九四―九六頁を参考にした。

第四章　「天人五衰」論
――本多と透の自意識――

第一節　観察者本多の終焉

まず、「天人五衰」の問題点について挙げていく。『豊饒の海』最終巻である「天人五衰」は、転生者が贋物か否か、門跡と本多の対話場面など多くの問題を有した作品だ。

三島由紀夫の生涯を閉じる作品となった『天人五衰』（「新潮」一九七〇・七～七一・一）は、これまでもっぱらその「遺作」としての位置によって論の対象となってきた感が強い。とりわけ『豊饒の海』四部作を通して視点人物として存在しつづける本多が、第一巻の主人公松枝清顕の恋人であった綾倉聡子と再会しながら、清顕との関係を否定する彼女の言葉に茫然とさせられる最後の場面に重点が置かれて論じられがちであった。(注1)

柴田勝二氏の指摘の通り、「天人五衰」を論じる多くは、門跡の最後の言葉と、それによって茫然とする本多の姿に重点を置く形であった。また、転生者として登場した安永透の真偽という、ここまで物語を繋いできた輪廻転生を揺るがす問題も出現する。輪廻転生の問題は、本多の「情熱」にも影響を及ぼすことになる。

全巻の軸をなす「輪廻転生」自体を情熱の対象とした本多の、その情熱の衰微を描いている。(注2)

ここまで本多の原動力となっていた「情熱」が衰微し、物語の終焉を迎えるのだ。

本章では、「天人五衰」の結末部は勿論であるが、そこに至るまでの過程を含め、「天人五衰」を考察していきたい。

まずは、「天人五衰」の本多について考察する。本多は七十六歳。妻の梨枝は死去、家政婦を雇って生活している。「暁の寺」において、見るという行為を積極的に行っていた本多が、「天人五衰」では見る事に対して考えを変化させている。その変化は、本多が見た夢から読みとることが出来る。

又しても自分はかうして見てゐる。公園の太いヒマラヤ杉の幹のかげから見てゐるやうに。屈辱の公園。夜のクラクション。自分はいつも見てゐる。もつとも神聖なもの

も、もつとも汚穢なものも、同じやうに。見ることがすべてを同じにしてしまふ。同じことだ。……はじめからをはりまで同じことだ。……いひしれぬ暗い心持ちに沈んで、本多は、あたかも海を泳いで来た人が、身にまとひつく海藻を引きちぎつて陸に上るやうに、夢を剝ぎ落して、目をさました。（「天人五衰」第四章）

「暁の寺」において、見る事に「情熱」を燃やしていた本多が、「見ることがすべてを同じにしてしまふ」と考えるようになっている。見ることに特別な意味を見出せなくなったということは、見ることが生業である観察者として致命的な欠陥だ。この欠陥を抱えた「天人五衰」の本多の前に、また転生者が現れる。

本多と少年の目が会つた。そのとき本多は少年の裡に、自分と全く同じ機構の歯車が、同じ冷ややかな微動を以て、正確無比に同じ速度で廻つてゐるのを直感した。どんな小さな部品にいたるまで本多と相似形で、雲一つない虚空へ向つて放たれたやうな、その機構の完全な目的の欠如まで同じであつた。顔も年齢もこれほどちがうのに、硬度も透明度も寸分たがはず、この少年の内的な精密さは、本多が人々に壊されるのを怖れてもつとも深部に蔵ひ込んでゐるものの精密さと瓜二つだつた。（「天人五衰」第十章）

安永透は、今までの転生者の中で異質な青年だ。その異質性は、本多と透が内面的に「瓜二つ」な点にある。本多と「瓜二つ」ということは、転生者でありながら、内面は観察者と「瓜二つ」ということだ。これは、観察者として致命的な欠陥が生じている本多の前に、本多とは違う観察者が現れたとも言える。更に、本多は今までの転生者については、出会い頭に相手を転生者と認識していたにも関わらず、透については贋物であることを最後まで疑い続けている。「理智」「理性」をも超越して転生者を受け入れていた本多が、透のことだけは疑い続けた。勿論、ジン・ジャンの命日が曖昧なこともあり、透の左の脇腹にある三つの黒子以外の証拠が不十分であるからとも考えられる。しかし、黒子は無くとも幼少期のジン・ジャンを勲の転生者と見た本多であれば、多少の証拠不十分など問題にしないだろう。では、何故そこまでして透を転生者の贋物と疑うのか。また、疑いながらも転生者として透を受け入れるのか。本多の矛盾した行動の原因と理由を解明していく。

先にも述べたが、本多は、自身と透が内面的に「瓜二つ」であると考えている。そして、そんな透を「純粋な悪」（「天人五衰」第十章）と語り、その理由を「少年の内面は能うかぎり本多に似ていたからである。」とした。では、その似ている点とは何か。何が「悪」な

のか。

その生涯を通して、自意識こそは本多の悪だつた。この自意識は決して愛することを知らず、自ら手を下さずに大ぜいの人を殺し、すばらしい悼辞を書くことで他人の死をたのしみ、世界を滅亡へみちびきながら、自分だけは生き延びようとしてきた。

（中略）

しかし自分の邪悪な傾向は、こんな老年に及んでまで、たえず世界を虚無に移し変へること、人間を無へみちびくこと、全的破壊と終末へだけ向つてゐた。今や、それも果たせず、自分一個の終末へ近づかうとしてゐるところで、もう一人、自分とそつくりな悪の芽を育ててゐる少年に会つたのだ。（「天人五衰」第十章）

本多と透の「自意識」こそ二人の類似性の核であり、「純粋な悪」そのものであった。一旦はベナレスで見た光景によって、つかの間この「悪」から逃れたものの、本多は老年になってもなお「悪」に染まったままだ。そんな本多の前に「瓜二つ」の透が現れた。この類似性から、本多は次のようにも述べている。

それは今日見た少年が、今までの三人とは明らかにちがふといふことである。あの少年の自意識の機械仕掛が、硝子を透かして見るやうにはつきりと見えた。それは清顕にも、勲にも、ジン・ジャンにも、本多が嘗て見なかつたものだ。あの少年の内面は本多の内面と瓜二つのやうに思はれる。さうだとすれば、ありえないことだが、あの少年は、知つてゐてなほかつ美しい、といふ異様な存在なのであらうか。が、さういふことはありえない。ありえないとすれば、年齢も黒子も紛ふ方のない証跡を示しながら、ひよつとすると、あの少年は、はじめて本多の前に現はれた精巧な贋物なのではあるまいか。（「天人五衰」第十二章）

本多は、透が清顕や勲、ジン・ジャンとは違うことに気づいている。転生者としての証拠と本多との類似性を併せ持った透を、本多は「精巧な贋物」なのではないかと疑念を抱く。本多に「精巧な贋物」という疑念を抱かせるほどに観察者としての資質を持っている透ではあるが、透には転生者としての資質も備わっていた。それが美しさだ。

悪は時として、静かな植物的な姿をしてゐるものだ。結晶した悪は、白い錠剤のやうに美しい。この少年は美しかつた。そのとき本多は、ともすると我人共に認めよう

としてゐなかつた自分の自意識の美しさに、目ざめ、魅せられてゐたのかもしれない。

……（「天人五衰」第十章）

本多は、透の美しさを見て、自身の「自意識」まで美しいと感じた。本多に与える影響力の強さは、先の清顕や転生者たちと同等だ。そして、本多は自身の内面の変化によって転生を証明している。ところが、転生者の資質を持っている透に対して、本多の「精巧な贋物」という疑念は晴れなかった。しかし、本多は透を転生者として受け入れる。林房雄氏は、透を転生者として受け入れた後に本多を待ち受ける事柄を「このことによって受ける懲罰と復讐は本多自身が用意したのである。」[注3]と指摘している。この指摘のように、本多自身が行動し、その行動が本多を追いつめるという図は、他者からの影響ではなく、自分主導で本多が行動していることの現れと言える。恰も行為者のような本多は、透に、先の転生者とは違う道を歩ませようと教育を施していく。観察者として、決して転生者の生き方に干渉しなかった本多が、透には干渉した。そして、本多は透を通して先の転生者たちへの欠点を見出す。

――大人しい透に向かつて、かうして執拗に説き進めながら、いつしか本多は、目の前に清顕と勲と月光姫を置いて、返らぬ繰り言を並べてゐるやうな心地にもなつた。彼らもさうすればよかつたのだ。自分の宿命をまつしぐらに完成しようなどとはせず、世間の人と足並を合せ、飛翔の能力を人目から隠すだけの知恵に恵まれてゐればよかつたのだ。飛ぶ人間を世間はゆるすことができない。翼は危険な器官だつた。飛翔する前に自滅へ誘ふ。あの莫迦どもともうまく折合つておきさへすれば、翼なんかには見て見ぬふりをして貰へるのだ。

（中略）

清顕も勲も月光姫も、一切この労をとらなかつた。それは人間どもの社会に対する侮蔑でもあり傲慢でもあつて、早晩罰せられなければならない。かれらは、苦悩に於いてさへ特権的に振舞ひすぎたのだつた。（「天人五衰」第十七章）

本多は、観察してきた先の転生者たちをこのように語った。その結果、養子として透を迎え、教育を施すという行為に繋がった。観察者が観察することで知り得た彼らの欠点を元に、本多は透だけは例外にしようと考えた。この行為こそ、本多の「悪」である「自意識」によるものではないか。ただ観察してきた本多が、観察対象である筈の転生者を作り変えるという考えが、「自意識」の持つ悪性であろう。本多の、自己について知っていると

いう自負と、透は本多が熟知している自己と「瓜二つ」であるという確信から、透を教育するという考えが導き出されているのもそのためだ。

本多の透への教育は、次の様な教育方針のもとおこなわれていく。

……詩もなく、至福もなしに！　これがもつとも大切だ。生きることの秘訣はそこにしかないことを俺は知つてゐる。

時間を止めても輪廻が待つてゐる。それをも俺はすでに知つてゐる。

透には、俺と同様に、決してあんな空怖ろしい詩も至福もゆるしてはいけない。これがあの少年に対する俺の教育方針だ（「天人五衰」第十六章）

これは、転生者透を凡庸な青年に作り変えるものだ。先の転生者たちは「絶頂」の瞬間に命を落としてきた。それは選ばれた人間のみに許された特権だ。透に対しては、それを阻止しようというのだ。そして、教育を進めるにつれ、透に変化が現れてくる。

どんな返事も、一度口のなかでしやぶつてみて試してみる習慣がついてゐた。（「天人五衰」第十八章）

思ったことをそのまま口に出すのではなく、口に出すか否かを考えてから答えるという癖は、本多の教育の賜物だ。信号所で本多と初めて会った時の透は、表情も声も感情と連動して率直なものであり、そこに相手からどう見られるかといった計算はなかった。ところが、本多の教育を受けた透は、他者との関係を鑑みて、返事を口に出す習慣を身につけている。また、家庭教師の古沢の政治的思想について密告する透の姿も、本多の教育によるものだ。

透の心の動きは、本多の夢みてきた人間の姿に照らせば醜かつたが、本多が透に望んできた人間の姿に照らせばまことに当を得てゐた。要するに彼が透に望んできたのは醜さだといふことを、すんでのところで告白しさうな地点に本多はゐた。（「天人五衰」第十九章）

転生者は、美しくなくてはならない。透もそれを備えていたが、本多の教育によって人間の醜さを身につけた。これこそ、本多の望んだ結果だ。先の転生者たちが持つ美しさを、透から取り除くことが、この教育の目的であり、透から「翼」を奪うことになる。透が転

生者として「絶頂」を迎えないように教育を施す本多のもとに、浜中家から透と娘を縁付けたいという話が舞い込んでくる。先の転生者たちの傍らには必ず懇意にする美しい女の姿があった。清顕には聡子。勲には槙子。ジン・シャンには慶子。関わり方に違いはあるが、転生者の傍らには美しい女が居た。ところが、透の傍に居たのは絹江であった。彼女は「どこからどう眺め変えても醜ひとしか云ひやうのない顔」（「天人五衰」第三章）であり、先の転生者たちの傍ら居た女たちとは異なる存在だ。先の転生者同様に透の傍らに美しい女を置くには、許婚の申し出は絶好の機会だ。しかし、それは本多が透に施している教育に反する行為と言える。何故なら、転生者として透が「絶頂」を迎えないようにするには、先の転生者の傍らに居たような美しい女の存在は不要だからだ。しかし、本多はこの申し出を受けようとする。

そのとき本多を鋭く射たのは、二十歳の透の死に襲はれて、身を撚って嘆くうら若い許婚の姿の幻だった。彼はその娘が、美しい、薄命さうな、蒼ざめた娘であればよいと思つた。（「天人五衰」第二十一章）

不要なはずの美しい女が、透の死を嘆く様を本多は夢想した。この矛盾した考えを、本多自身も「透に施している教育とはずいぶん矛盾していた。」（「天人五衰」第二十一章）と認めている。しかし、本多が矛盾した状況を求めるのは初めてのことでは無い。それは、「暁の寺」において、観察者でありながら行為する矛盾。ジン・ジャンに恋をしながらも、自身と断絶していることを望むという矛盾、といった形で現れている。そして、本多の中にある矛盾を「天人五衰」では、次のように語っている。

本多が怖れてゐることは本多が望んでゐることであり、本多が望んでゐることは本多が怖れてゐることだつたのである。（「天人五衰」第二十一章）

本多が転生者と関わる時は、常に矛盾を孕んでいる。本多の望みは、求めていく過程で矛盾を生み、「理智」「理性」の人であった本多らしからぬ行動へと突き動かす。そして、「暁の寺」や「天人五衰」では、望みそのものが矛盾している。

「春の雪」で見せた「いつはりの情熱」や「奔馬」で宿した「奇妙な情熱」は、与えることで満たされ、本多の元来持つ理智的な考え方と、情熱を伴う行動という形で矛盾は生じても、目的に矛盾は生じていない。一方、「暁の寺」での、「覗き見」のように自身が求めることで満たされる欲求は、望みそのものが矛盾を孕んでいる。「天人五衰」でも、「暁の

寺」同様に、望みそのものが矛盾を孕んでいる。では、「暁の寺」で矛盾の根幹に見ることへの「情熱」があったのに対し、「天人五衰」における「暁の寺」の「情熱」にあたるものは何か。ここで一つの仮定が浮かぶ。

理智の判断だけでは律し切れない執着にとらはれた。（「天人五衰」第二十一章）

「天人五衰」で本多に現れたのは「執着」ではないか。今まで清顕やその転生者たちと出会うことで、種類の違う「情熱」を宿してきた本多であるが、「春の雪」「奔馬」で、与えることに燃やしていた「情熱」が、「暁の寺」では一変、求めることに「情熱」を燃やす。「春の雪」の「いつはりの情熱」が「奔馬」で「奇妙な情熱」として偽りのものから本物へと変化したように、「暁の寺」で見ることに燃やした「情熱」が、更に過剰なものになり、「執着」へと変化したのではないか。では、本多は何に対して「執着」するのか。まず浮かぶのが、透への「執着」だ。

ここで、「天人五衰」の本多と透の関係と酷似する三島の作品を取り上げる。本多が透に教育を施すように、『禁色』の檜俊輔は、自身の考え方などを美しい青年、南悠一に植え付けた。俊輔は、自身を裏切った女たちに復讐するために、決して女を愛さない美しい青年悠一を人形のように利用し、復讐を進めていく。

檜俊輔は、美貌と回春を志して、身代わりの人形つくりに心血を注ぐ。作家とは、もともと存在しないものの美学に命を賭ける呪われた人である。(注4)

田中美代子氏が指摘する俊輔の人形作りの精神は、本多の教育と通ずるものがある。本多は、今まで居なかった類の転生者を作ろうとしている。それは、「存在しないもの」を現前させる行為だ。そして、『禁色』では、復讐の過程で、俊輔は操り人形のように接していた悠一に対して別の感情を持つ。

『嫉妬ではなからうか』と彼は自問自答した。『この胸苦しさと、澳のやうにくすぶる感情は』

（中略）

それは嫉妬だつた。羞恥と憤怒のためにこの死人の頬は紅潮した。（『禁色』第九章）

俊輔は、ただ利用していただけの悠一が他の男に見られることに「嫉妬」した。そして、

次第に悠一が俊輔に従わなくなっていき、俊輔は、悠一を自身に縛り付けるために最期は死を選ぶ。このように、本多と同様に自身の欲によって悠一を思い通りに教育してきた俊輔が、最期には悠一と自身を結び付けるために死を選ぶまでになった。これは明らかに「執着」だ。つまり、最初は優位な立場に居る教育者側が、いつしか教育していた相手に「執着」を覚え、立場が逆転してしまうということだ。これは、「天人五衰」の本多と透にも言えることではないか。最初は、透を教育する本多の方が優位だったはずが、「執着」を覚えたことで行動に矛盾が生じる。すると、そこからは透の立場が強まっていく。

透が成年に達して東大に入学してから、すべてが変はつたのである。透は俄かに養父を邪慳に取扱うやうになつた。逆らうとすぐ手をあげた。本多は透に煖炉の火掻き棒で額を割られ、ころんで打つたといつはつて病院通いをしてからといふもの、透の意を迎へることにもはや汲々としてゐた。（「天人五衰」第二十六章）

完全に透が優位になった状態においても、本多は透から離れることはなかった。どれほど虐げられようとも本多は全てを耐えた。それは、透が転生者であると信じるが故であった。

透が満二十一歳になるまでの半年の間に死んでくれれば、すべてを恕してやることができる。それを知らずに今尊大ぶつてゐる若者の酷薄には、それを知つてゐるといふことだけで、本多も辛うじて耐へることができる。（「天人五衰」第二十六章）

これは、『禁色』の俊輔とは大きく異なるところだ。悠一に「執着」していた俊輔は、その思いの丈を、自身の死によって表した。ところが、本多は「執着」している透の死を望む。本多の望みは矛盾を孕んでいる。透が転生者として死ぬことの無いように教育を施しておきながら、転生者として死ぬことを夢想し自身を慰めている。これは、透に対しての「執着」ではなく、転生者という存在に「執着」しているからではないか。透を転生者の例外にするべく教育を施した透が、先の転生者には無かった人間の醜さを見せた上で、先の転生者たち同様に死ぬ。その矛盾を完成させるには、それらを超越する何かが必要だ。それが「運命」だ。

松枝清顕は、思ひもかけなかつた恋の感情につかまれ、飯沼勲は使命に、ジン・ジャンは肉につかまれてゐました。あなたは一体何につかまれてゐたの？自分は人とは

ちがうといふ、何の根拠もない認識だけにでせう？

外から人をつかんで、むりやり人を引きずり廻すものが運命だとすれば、清顕さんも勲さんも、ジン・ジャンも運命を持つてゐたわ。（「天人五衰」第二十七章）

人の及ばぬ先から強引に人を動かすものが「運命」であり、それに選ばれるのが清顕や転生者たちだ。こうした他の誰もが認識していないことを自分は知っているということに、本多は喜びを感じている。そこに本多の望みに見られるような矛盾が生じる原因がある。

ここで、本多の望みに矛盾が生じている「暁の寺」の例について考えていく。「暁の寺」で本多は、ジン・ジャンが転生者であって欲しいと願いながら恋をし、恋をしながらも自身とジン・ジャンは断絶した存在であって欲しいという複雑かつ矛盾した望みを抱えていた。しかし、そんな矛盾した望みを断ち切るようにジン・ジャンに死が訪れる。本多の矛盾を孕んだ望みを超越しジン・ジャンは消えた。その結果を迎える前に転生者の証拠である黒子をジン・ジャンの脇腹に見ることができたことで、ジン・ジャンを見るという「情熱」は冷まされた。

清顕や勲の救出に失敗し、誰かを救うことに燃やす「情熱」は冷め、自身不在の中でジン・ジャンを「覗見」することに成功したことで、ジン・ジャンを見る「情熱」は冷まされた。本多の「情熱」は悉く冷まされ、失われていった。それとは反対に、本多が観察してきた清顕や転生者たちは、最後まで「運命」に突き動かされるままに人生を走り抜けていく。彼らは「運命」に「むりやり人を引きずり廻」されることで、「絶頂」の時にその生涯を閉じた。そのことを唯一知り得ることが出来ることに本多は「執着」しているのだ。

「運命」という目には見えないものと対峙することに、本多は「情熱」を注ぎ続けた。その「情熱」が、転生者を迎える度に濃度が増していき、「執着」へと姿を変えたのではないか。「天人五衰」で、透が「精巧な贋物」ではないかと疑念を抱きつつも転生者と認め養子に迎えたのは、僅かでも転生者の可能性があれば、手元に置きたいと考えるほどに「執着」していたからだ。

本多が強い「執着」から手にした転生者は、死を迎えることは無かった。透は、「運命」には選ばれなかったのだ。

あなたを外からつかんだものは何？　それは私たちだつたのよ（「天人五衰」第二十七章）

慶子が指摘する通り、透を選んだのは「運命」に「執着」した本多とそれを唯一知る慶

子だ。「運命」と対峙することに「執着」したあまりに、本多は「運命」より先に透を選び取っていた。更に、本多の矛盾する望みのために教育したことで、透は「精巧な贋物」になってしまった。

「精巧な贋物」をつくりあげてしまった本多は、「天人五衰」の最後に月修寺に聡子（門跡）に会うべく奈良へ向かう。

『自分は今日はもう決して、人の肉の裏に骸骨を見るやうなことはすまい。それはただ観念の想である。あるがままを見、あるがままを心に刻まう。これが自分のこの世で最後のたのしみでもあり、つとめでもある。今日で心ゆくばかり見ることもおしまひだから、ただ見よう。目に映るものはすべて虚心に見よう』（「天人五衰」第二十九章）

月修寺に向かう前に、本多はこのように考えている。「春の雪」から始まった、「運命」という見えないものを見ることを辞め、ありのままを素直に受け止めることを決めた。そんな本多に聡子（門跡）は、次の様に答える。

何やら本多さんが、あるやうに思うてあらしやつて、実ははじめから、どこにもをられなんだ、といふことはありませんか？　お話をかうして伺つてゐますとな、どうもそのやうに思はれてなりません（「天人五衰」第三十章）

ここで注目したいのは、観察者本多繁邦を否定しているという点だ。門跡の言葉は、『豊饒の海』全編を通して本多が見聞きしてきたもの、歩んできた道全てを否定している。「運命」に魅せられて「情熱」を燃やし、いつしかそれに「執着」するようになった本多を否定した。この否定によって、清顕が「運命」に選ばれていたのか、そもそも、転生者たちは本当に転生者だったのか。それら全てが曖昧になる。つまり、「外から人をつかんで、むりやり人を引きずり廻す」という「運命」を人が認識するという行為についての否定の言葉でもあった。

第二節　透の特異性

透個人を論じる前に、先の転生者たちとの繋がりを見ていく。そこで、『『豊饒の海』について」から三島の言葉を引用する。

私は、「豊饒の海」を四巻に構成し、第一巻「春の雪」は王朝風の戀愛小説で、いはば「たわやめぶり」あるひは「和魂（にぎみたま）」の小説、第二巻「奔馬」は激越な行動小説で、「ますらをぶり」あるひは「荒魂（あらみたま）」の小説、第三巻「曉の寺」はエキゾティックな色彩的な心理小説で、いはば「奇魂（くしみたま）」、第四巻（題未定）は、それの書かれるべき時點の事象をふんだんに取込んだ追跡小説で、「幸魂（さきみたま）」へみちびかれゆくもの、といふ風に配列[注5]

このように、三島はそれぞれの巻にテーマを設けて執筆している。野口武彦氏は、各巻のテーマを清顕及び転生者たちが体現しているとした上で、『鏡子の家』との相違点と『豊饒の海』の輪廻転生という技法の特異性を指摘している。

> 四人にして一人なる登場人物は、作者自身のさまざまな存在可能態をそれぞれに体現する。――この関係が『鏡子の家』（昭和三十四年）と類似していることは充分注目に価する。ただでは作者の分身たち四人が共時的に共存しているのに対して、『豊饒の海』では通時的に継起するのである。[注6]

野口武彦氏が指摘するように、『豊饒の海』は、四人が別の時間に存在しながら、四人で転生者という存在を作り上げている。これを可能にしたのが、輪廻転生だ。『鏡子の家』と比べて『豊饒の海』が特異に映るのは、この輪廻転生という方法の特異性に要因がある。

続いて、透について考察していく。『豊饒の海』における観察者とは、本多だ。その観察対象は、松枝清顕から始まる転生者たちだ。一方、本多が観察してきた転生者たちは、周りには目もくれず行為者としてその人生を終えていった。ところが、新たな転生者候補透は、先の転生者たちとは異なる存在であった。

> 「天人五衰」の最初の章で、読者は安永透という新しい個性の出現を告げられる。海を見張る信号所に勤める孤独な青年。――「曉の寺」までの三巻で、物語はすべて、「春の雪」にしつらえられた人間関係の因果・展開として、精妙な綾目を織りなしてきた。しかし、透は、その複雑に入り組んだ人間模様のどこにも、その出自をもたない。[注7]

この三好行雄氏の指摘のとおり、透は異質な存在だ。それは、透が行為者だった転生者たちの生まれ変わりでありながら、見る側の人物であることからも言える。信号員として海を見つめる透は、今までの転生者とは違い、変化し続ける海を見る側として存在してい

た。本多が、透に自身と似た部分があると感じたのも、この見るという行為からだ。「春の雪」「奔馬」「暁の寺」では、本多のみが観察者であった。しかし、「天人五衰」では、透という新たな観察者が登場し、本多もまた観察対象となった。透の特異性はこれに留まらない。清顕が来世の夢を見たり、勲が夢でジン・ジャンに生まれ変わるであろうことを予見していたり、ジン・ジャンが前世の記憶を持っていたりといった転生者同士の繋がりが透は希薄である。勿論、最終巻ということから、先に繋がる部分を排除したとも考えられる。しかし、物語の終わりが即ち物語世界の終わりでは無い。「天人五衰」の後も作品世界は続いていく。ところが、輪廻転生の流れは透が生き残ることで終止符が打たれた。その理由を透の特異性に求めるのは自然な流れだろう。

このように、先の転生者たちとは違う特徴を持っている透ではあるが、共通点もある。まず、水のモチーフ。「春の雪」の清顕には、庭の池や滝、別荘の海が。「奔馬」の勲には、滝での水浴びが。「暁の寺」のジン・ジャンには、川での水浴びやプールが。「天人五衰」の透には、海を眺めたり、手を執拗に洗ったり、朝のシャワーを欠かさなかったりという形で表現された。そして、最大の共通点は、転生の証拠である左の脇腹にある三つの黒子だ。これを根拠に、本多は透を養子に迎える。ただし、今までのようにただ観察するだけではなく、本多は透を教育する。

行為者であった転生者が観察者としても存在することは、これまで観察者として存在した本多に影響を与えているのは明らかだ。前三巻に見られなかった転生者側からの観察が「天人五衰」では起った。この変化は、物語の終結に大きく関わるのではないか。そこで、ここから観察者透について整理してく。

本多の養子になる前、安永透は通信士として帝国信号に勤めていた。その時点で、透は観察者としての資質を覗かせている。それは、「眺めることの幸福は知つてゐた」（「天人五衰」第三章）と言っていることからもわかる。では、安永透は見るという行為をどのように認識していたのか。

> 見ることは存在を乗り越え、鳥のやうに、見ることが翼になつて、誰も見たことのない領域へまで透を連れてゆく筈だ。そこでは、美でさへも、引きずり朽され使ひ古された裳裾のやうに、ぼろぼろになつてしまふ筈だ。永久に船の出現しない海、決して存在に犯されぬ海といふものがある筈だ。見て見て見抜く明晰さの極限に、何も現はれないことの確実な領域、そこは又確実に濃藍で、物象も認識もともどもに、酢酸に涵された酸化鉛のやうに溶解して、もはや見ることが認識の足枷を脱して、それ自体で透明になる領域がきつとある筈だ。（「天人五衰」第三章）

このように、「見る」ことを突き詰めていくと、全ての足枷から解放されると考えていた。そして、「見る以上の自己放棄はなかつた」（「天人五衰」第三章）とも語っている。これは、「暁の寺」で本多が「覗見」に自身の不在を求めた姿と重なる部分がある。また、「美でさへも、引きずり朽され使ひ古された裳裾のやうに、ぼろぼろになつてしまふ筈だ。」という考えは、本多の「もつとも神聖なものも、もつとも汚穢なものも、同じやうに。見ることがすべてを同じにしてしまふ。」（「天人五衰」第四章）という考えと酷似している。更に、本多透となった後、透は見ることの先にあるものについて語っている。

想像力と論理が僕の武器になり、それが自然や本能や経験よりもずつと精度が高く、蓋然性についての知識と調整に秀で、とにかく、水も洩らさぬほどに完璧だつた。僕は人間の専門家になつた、たとへば昆虫学者が南米の甲虫の専門家になるやうに。……人間が或る種の花の匂ひにうつとりし、或る情緒に包まれる経過を、僕は匂ひのない花で実験してみて会得した。

見るとはさういふことだつた。あの信号所から、直入船を海上に見出したとき、僕は、船が或る距離において、かくもこちらを注視し、望郷の念ひにかられ、十二・五ノットの速度に苛立ちながら、陸にかけあらゆる夢想を極点にまでふくらますのを見た。しかしそこには実は僕の目の試用（エセエ）しかなくて、目は水平線のはるか彼方、目のもはや届かぬ領域にあらはれる不可視のものへ向けられてゐた。不可視なものを「見る」とはどういふことか？　それこそ目の最終的な願望、見ることによるあらゆる否定の果ての目の自己否定なのだつた。（「天人五衰」第二十四章）。

「不可視のものを「見る」」こと、「見ることによるあらゆる否定の果ての目の自己否定」が、透の持つ「見る」ことの先にあるものだ。不可視なものを見るには、可視のものを見てきた目では役に立たない。観察者が研ぎ澄ませてきた武器である目を否定することこそ、「目の最終的な願望」だという。

では、先に挙げたような「目の自己否定」という考えに至るまでに、観察者透は何を観察していたのか。続いて、透の観察対象について挙げていく。

最もわかりやすい観察対象は、海だ。物語の冒頭から、透は海を眺め、観察していた。次に、絹江。他人と積極的に関わることの無かった透が、唯一親交があったのが絹江だ。その様子は事細かに語られ、彼女の狂女ぶりを表現している。続いて、本多。透は、本多に見透かされていることを不快に思いながら、本多の様子を観察している。海、絹江、本

多の三つの観察対象と透の関係を中心に考察することで、観察者透について解明していく。勿論、転生者として本多の前に現れている以上、転生者透についても考察する必要がある。そこで、転生者及び観察者としての透について、他者との関係から解明していく。

透の人物像を考える上で、先に挙げたように登場人物たちとの関係を考察する必要がある。そこで、登場人物たちについて透が言及している場面及び、登場人物たちが透について言及している場面を整理する。また、透の観察者としての側面の根底を支える「海」の捉え方についても同様に整理していくことで、転生者及び観察者としての透を考察する。

最初に、透と海の関係について考えていく。透にとって、海は日常の中にある観察対象だった。日常的に信号所で海を観察し続けたからこそ、透は「眺めることの幸福は知つていた」のだ。海との関係と銘打ったが、透が眺めていたのは海であり、船であり、港であった。そして、ただ眺めていただけでなく、他者について語る時、海を眺めているかのように状況を語っている。

「君つて一寸、断然すごいわね。断然見込みがあるみたい」

と事後の女が言つた。

このはなむけの言葉の花束で、彼女は何艘の船を、港からあの大洋へと送り出したことだらう。（「天人五衰」第二十四章）

このように、相手の心情を港から船が出航する光景になぞらえて語っている。その視点は、信号所から眺めているかのような描写であり、透が観察者の立場から語っていることがわかる。しかし、この港に見立てて考える手法は、透のみのものでは無い。

彼は自分の死のあとにも、入港し、出帆し、日にかがやく国々へ航海する船を思つた。世界は彼なしでもまちがひなく希望に溢れてゐた。彼が港であつたら、いかに絶望した港であつても、幾多の希望の停泊を許さざるを得なかつただらう。しかし港ですらなかつた本多は、今や自分が徹底的に不要であることを、世界へ向つても海へ向つても、宣言してよかつたのである。

もし彼が港だつたら？

「本多港」にたつた一艘だけ停泊している小さな船、荷役を一心に眺めてゐる透の姿をかたはらに見た。これは港と全く同じ船、港と共に朽ち、永久に出帆を拒否している船だつた。少なくとも本多がそれを知つてゐた。小さな船は埠頭にコンクリートで接着されていた。理想的な父子だと本多は思つた。（「天人五衰」第二十五章）

ここでの彼とは、本多のことだ。透同様、人の心情を港やそこに出入りする船になぞらえて語っている。ところが、本多は自身の死後についても語っている。人を港に見立てて語るという部分では透も本多も同様であるが、自身の死後について語る本多は、信号所から眺めるように語っている透とは立場が違う。この違いは何から来るのか。それは、透が今見えているものを観察しているのに対し、本多は見えないものを求めて観察しているためだ。透が観察する場合は、自身がその場にいる必要がある。一方本多の場合は、自身とは隔絶した死後にまで言及している。死後とは、即ち本多不在の世界だ。本多は自身の不在によって現前するものを観察したいと考えているために、自身の不在について語るのだ。

透の観察者としての側面が露わになるにつれ、透の本多への憎悪は増していく。その憎悪は、本多が透を「根底から理解しやうとし、又、理解する能力のある人間」（「天人五衰」第二十五章）であるが故に生じたものであった。「天人五衰」第二十五章の時点で、透は本多への殺意を自覚しているが、そのことすら見抜いている本多を前に、透は何事も起こすことが出来なかった。本多と透は、互いを観察しあって過ごしていく。このように、観察者が観察されるという構図が「天人五衰」では随所に見られる。

しかし、次第に透は行為者としての側面を強めていく。本多が逆らうと手をあげ、主導権を握ったのだ。そして、海を見るという行為を「もう海を見なくてよい」（「天人五衰」第二十六章）と切り捨てた。観察者としての自己の否定をもって、透は行為者として振る舞った。

一見、完全なる行為者へと変貌したように見えるが、先の転生者たちとは大きく異なる部分がある。それは、行為の根底にあるものだ。清顕は「思ひもかけなかつた恋の感情」であり、勲は「使命」、ジン・ジャンは「肉」と、全て違うものに思えるが、その本質は同質のものだ。それらは、「外から人をつかんで、むりやり人を引きずり廻すもの」という特徴を持った「運命」だった。ところが、透の行為の根底にあるのは、「根拠もない認識」であり、慶子に言わせれば「己惚れ」だった。その実、透をつかんでむりやり引きずり廻したものは、本多と慶子であった。転生者たちを死へと導いた「運命」が透には存在しない。二十歳で死ぬことを求められる転生者でありながら、死への道が存在しない。また、透は自身の死について次のように語っている。

人生すべてが義務である僕にも、美しく死ぬ義務だけはないわけだ。神から恵みを受けた覚えなどさらさらないから。（「天人五衰」第二十四章）

絶頂時の「死」が求められる転生者たち。しかし、透にはそれが存在しない。これも透の特異性の一つだ。

新たな特異性が明らかになったところで、続いて、浜中百子との関係について整理する。

本多透となってから出会った人物たちは、透に都合のいいように排除されたり、側に置かれたりしている。最初に排除されたのは家庭教師の古沢だ。この排除は、「人を傷つけずにはやまぬとゐふ衝動」（「天人五衰」第二十章）によるものだった。この衝動は更なる標的を欲した。浜中百子だ。

僕にとつて必要なのは彼女の愛であり、彼女自身を傷つけるための刃物をまづ彼女に与へてやらなくてはならない。（「天人五衰」第二十四章）

ただ一方的に傷つけるのではなく、百子自身に百子を傷つけるように仕向けた。これを透は「教育的情熱」（「天人五衰」第二十四章）と表現した。その情熱の内容は次の通りだ。

美女だと信じてゐる絹江も、愛されてゐると信じてゐる百子も、現実を否定してゐる点では同じだつたが、他人の助力が要る百子に引きかへて、絹江にはもう他人の言葉さへ要らなかつた。百子をあそこまで高めてやることができたら！（「天人五衰」第二十四章）

透は百子を絹江のようにしようとしたのだ。自身の思う通りに教育しようとする姿は、養父である本多に通ずるものがある。この点においても、本多と透は類似性を持った存在だと言える。それは、転生者たちとは異なる存在であるということの証明でもあった。

次に、透が百子を教育する上で目標とした絹江との関係について整理する。

透は、絹江のことを「全世界を相手に闘ふ女」（「天人五衰」第二十四章）と評している。その存在は、先の転生者たちの傍らにいた女たちとは違う。聡子も槙子も慶子も、美しく、現実的な女であった。ところが、絹江が語る現実とは、妄言だ。彼女の住む現実は、彼女の作り出す妄想の産物であり、そこに客観的視点は一切存在しない。寧ろ、絹江と類似しているのは、転生者たちではないか。つまり、聡子を一方的に敵視していた清顕であり、死を夢想していた勲であり、内面が不明瞭なジン・ジャンだということだ。これらの思考や行動は、他者からは理解されない奇異なものとしてうつる。絹江の狂気もそれと類似しているのではないか。勿論、絹江は本多の言う転生者では無いだろう。

それは万人が見て感じる醜さであつた。そこらに在り来りの、見やうによつては美しくも見える平凡な顔や、心の美しさが透けて見える醜女などとは比較を絶して、どこからどう眺め変へても醜いとしか云ひやうのない顔であつた。その醜さは一つの天稟で、どんな女もこんなに完全に醜くあることはできなかつた。（「天人五衰」第三章）

彼女は万人が醜いと感じるほど美しさのかけらもない。また、死が見えるわけでも、「運命」に選ばれている訳でもない。しかし、これまで転生者たちを取り巻いてきた人物とは明らかに違う。それは、先の転生者とは異なる透にも言えることだ。続いて、透と絹江の類似点について整理していく。

『豊饒の海』の流れの中で稀有な存在である透と絹江には、類似した点が存在する。

私って不幸だわ。死んでしまひたい。女にとって、美しく生まれすぎた不幸といふこと、男の人には決してわかつてもらへないと思ふんだわ。美しいといふことが本当に尊敬してもらへず、私を見る男が必ず卑しい気持ちを起すんだもの。（「天人五衰」第三章）

この話を聞く透は、絹江を「同じ異類の同胞愛のやうなものを感じていた。」（「天人五衰」第三章）と語っている。「同じ異類」という共通点はどの部分を指すのか。

僕は決して甘やかされてなどゐなかつた。僕を傷つけようとひしめいてゐる者の影を常住感じてゐたから、（「天人五衰」第二十四章）

この主張は、見えないものを常に感じていたというものだ。これをもし透が口に出して主張していたら、絹江と同じ狂気として取られていたのではないか。つまり、思考の上では、透と絹江は「同じ異類」であった。二人の違いは、それを口に出すか否かの差だ。先の転生者たちの傍にいた女たちは、決して「同胞」ではなかった。しかし、透の傍には、絹江という「同じ異類」の「同胞」が居た。また、「自分の過度の明晰を慰めるには、他人の狂気が必要だつた」（「天人五衰」第二十章）ために、絹江は透にとってなくてはならない存在であった。透にとっての絹江という存在を、有元伸子氏は次のように評している。

他者を傷つけたいとたえず緊張する透にとって、絹江は、唯一傷つけることなく安心して身を委ねることのできる聖母のような存在だった。(注8)

「聖母」よりは幾分相互依存的ではあるが、透が持っている人を傷つけたいという衝動を向けない相手であったことは確かだ。一方、「春の雪」の清顕は、聡子の内面を嫌悪していた。「奔馬」の勲もまた、槇子が法廷で嘘の供述をする姿を苦々しく感じている。「暁の寺」のジン・ジャンについては、彼女自身の慶子への明確な評価が無く、慶子と肉体関係を持った経緯も不明瞭だ。しかし、慶子がジン・ジャンは「ジン・ジャンは肉につかまれてゐました。」（「天人五衰」第二十七章）と語っていることから、二人の行為が肉欲よるものだということが窺える。つまり、傍に居る女の内面に好意を示した転生者は、透一人だ。ここでも、先に引用した三好行雄氏の「複雑に入り組んだ人間模様のどこにも、その出自をもたない。」という指摘が見られる。

透の側から見ると例外であった絹江だが、これは絹江の世界においても同じだ。妄想の世界に住む絹江は、その妄想を肯定する透のみを例外として扱っている。

透と絹江の類似性につて指摘してきたが、絹江についてもう一つ注目すべき点がある。透との結婚だ。透は、許嫁や関係を持った女たちが居ながら絹江と結婚した。絹江と過ごす盲目の透は、執拗に手を洗うほどの潔癖を捨て、同じ浴衣で何日も過ごし、絹江の行動を咎めない。視界を失うと共に廃棄された世界の中で、唯一絹江だけが居場所を与えられた。

透は絹江以外には何の感情も見せず、絹江も見せられた感情を人には喋らない。（「天人五衰」第二十八章）

元々透は「美しい目と美しい微笑」（「天人五衰」第二十八章）という仮面を被っていた。ところが、その仮面は失せ、ただ絹江だけが透の世界の住人となった。服毒以降の透の姿について、柴田勝二氏は次のように指摘している。

その姿が前半部分で言及されていた、仏典に説かれる五衰の表徴と重なる形で述べられていることは容易に気づかれる。(注9)

指摘の通り、「天人五衰」第八章で語られた「大の五衰」は、第二十八章の失明した透の姿を説明するかのようだ。しかし、「大の五衰」が現れると、「死を避けることができない」（「天人五衰」第八章）と語られていたにも関わらず、透には死が訪れる気配は無い。死の代わりに透は視力を失った。しかし、失ったのは視力だけではない。他に失ったものにつ

いて考えていくために、次の一文を手掛かりとする。

透の目が外界を映さなくなつた代りに、もはやその失はれた視力と自意識に何の関はりもない外景は、緻密に黒いレンズの表てを埋めるやうになつた。「天人五衰」第二十八章）

視力以外にも失ったものが判明する。自意識だ。透が見せなくなった「美しい目と美しい微笑」とは、視力を失ったことで光を宿さなくなった目と、自意識を失ったことで見せなくなった微笑と言い換えることが出来ないか。では、透の自意識とは何か。また、自意識を失うことで見せなくなった微笑とは何によって現れていたのか。まず自意識について考えるために、透と本多の関係について考察していく。何故なら、透の自意識は、本多のそれと「瓜二つ」だからだ。

先に本多の視点からの透との関係を整理したが、改めて、透の視点から二人の関係を見ていきたい。透が最初に本多について考えるのは、本多が信号所を去った後、本多のことを思い出す場面だ。

……先程の老人は一体何だらう。

この場にゐたときは、たしかにあの我儘なハイカラ婆さんにばかり苛々させられたが、ゐなくなつてみると、もう一人の物静かな老人の存在のはうが心に残る。

非常に知的で疲れた眼差、聴きとれぬほど静かな声、こちらが莫迦にされたと感ずるほとんどすれすれな極度の鄭重さ、……あの人は一体何に耐へてゐるのだらう。（第十一章）

このように、前作までの転生者とは違い、本多に興味を持って回想する透の姿は、行為者と言うより、観察者だ。しかし、透は本多の内面までは見えていない。一方の本多は、「何かを見透かすために入つて来て、無遠慮に何かを奪ひ去つて出て行つた」（「天人五衰」第十一章）とあるように、透の全てを見透かしていた。この差は、観察者として本多が過ごした年数によるところだろう。

先にも述べたが、透の「内面は能うかぎり本多に似てゐた」。つまり、透は本多と同じ観察する側の人間だ。その類似性の根底にあるのが「自意識」であり、それは「純粋な悪」そのものであった。

この「自意識」を考えるために、透の微笑について整理する。

事実、時折鏡を見て、自分の微笑の漂ひをよく調べると、鏡にさしかかる光の加減で、少女の微笑に似てゐる感じられることがあつた。どこか遠い国の、言葉の通じない少女は、こんな微笑を、他人との唯一の通ひ路にしてゐることがあるかもしれない。

（中略）

透は、ふとして、この微笑を父親からでも母親からでもない、幼時にどこかで会つた見知らぬ女から受け継いだのではないかと思ふことがある。（「天人五衰」第十四章）

「暁の寺」において、ジン・ジャンの微笑が印象的に描かれている。そのことから、ここで言う「どこか遠い国の、言葉の通じない少女」をジン・ジャンだと考えるのが自然な流れだろう。しかし、「幼時にどこかで会つた見知らぬ女から受け継いだ」と言うのは些か不可解だ。転生者たちは生まれ変わりという性質上、前の転生者と会うことは不可能だ。前世の記憶があると言っていた幼い時のジン・ジャンも、本多に会ったことがあるとは言ったが、勲に会ったことがあるとは言っていない。また、透が「僕は夢を見たことがなかつた」（「天人五衰」第二十八章）と言っていることから、「幼時にどこかで会つた見知らぬ女から受け継いだ」という事象が夢の話というわけでもない。しかし、ジン・ジャンが本多に見せた微笑を透は引き継いでいる。この転生者特有と思われる微笑もまた、透が転生者か否かを曖昧にしている。透はその微笑によって「本質的な拒絶を以て物事を受け容れる」（「天人五衰」第十四章）ことが出来た。ここで、三島作品で透と似た微笑を浮かべている人物を挙げる。『禁色』の悠一だ。

彼女はそこに魅するような若者の微笑の美しさを見た。意識が悠一の微笑を変えていた。（『禁色』第二章）

このように、悠一はその微笑で康子を魅了する。相手を魅了しながら、決して相手を愛さないという深淵がそこにはある。悠一の微笑を生んだ意識とは何か。谷口美紀氏は次のように指摘している。

俊輔という鏡の介在を得たことで、悠一は自分の顔を知り、その顔を恋うるナルシスになった。[注10]

悠一の微笑は、俊輔という鏡を根拠に自身が美しいことを認めたために手に入れた武器

だった。では、透の場合はどうか。「時折鏡を見て、自分の微笑の漂いをよく調べると」とあることから、悠一にとっての俊輔が、透にとっては自分自身だった。それも、「どんな目の鋭ひ他人も、透自身ほど透が見えない」（「天人五衰」第十四章）という自尊心が根拠であった。この微笑は透の自尊心が生んだ武器なのだ。裏を返せば、透が微笑を浮かべなくなったのは、自尊心を失ったからだと言える。そして、この自尊心は、本多の言う「自意識」と同義だ。何故なら、本多が「人々に壊されるのを怖れてもつとも深部に蔵ひ込んでゐるもの」が「自意識」だったように、透が守ろうとしていたものが自尊心だからだ。

彼が人生でもつとも怖れる事態は、自尊心が傷口をあけ血を流しはじめることであり、この自尊心の血友病が、二度と失血を止めることができないといふことだつた。（「天人五衰」第二十七章）

透が怖れていた事態が慶子によって起こる。この「天使殺し」（「天人五衰」第二十七章）の場面は、慶子の嘘によって用意された。ここでも、「春の雪」から続く女性優位の象徴としての嘘の存在が再度現れた。慶子の嘘に誘い込まれた透は、自尊心を守ろうと服毒する。その結果、視力を失った。つまり、透が失った二つは、全て自尊心を傷つけられたことによる影響であったということだ。

透と絹江。透と本多。それぞれとの関係について考察することで、透と先の転生者たちとの違いや、本多、絹江との類似性など、透という存在の複雑さが明らかになった。では、何故ここまで複雑な存在として透は設定されたのか。それは、『豊饒の海』の「世界解釈の小説」としての側面から読み取ることが出来ると考えられる。そのため、次章の『豊饒の海』全体を論じる際に合わせて明らかにしていく。

注

（注１）柴田勝二「憑依の脱落―『天人五衰』の終り―」『國語と國文学』第七十七巻三号　至文堂　二〇〇〇年三月　四十四頁

（注２）栗栖真人「情熱の終焉―『天人五衰』論―」『語文　高木市之助先生記念論文集』第四十二輯　一九七六年十一月　一六四頁

（注３）林房雄『悲しみの琴　三島由紀夫への鎮魂歌』文藝春秋　一九七二年三月　二二二頁

（注４）田中美代子「夜もすがらの旅路（月報）」『決定版　三島由紀夫全集』第三巻　新潮社　二〇〇一年二月　五頁

（注５）三島由紀夫『『豊饒の海』について」『三島由紀夫全集』第三十四巻　新潮社　一九七六年二月　二八頁

（注６）野口武彦「輪廻転生のパラドクス―『豊饒の海』における行為者と認識者をめぐって―」『国文学　解釈と教材の研究』第三十五巻四号　学灯社　一九九〇年四月　二二―二三頁

（注７）三好行雄「『豊饒の海』論―「天人五衰」を視座として―」『国文学　解釈と教材の研究』第三十一巻八号　学灯社　一九八六年七月　六頁

（注８）有元伸子『三島由紀夫物語る力とジェンダー　『豊饒の海』の世界』翰林書房　二〇一〇年三月　二八五頁

（注９）先掲　柴田勝二「憑依の脱落―『天人五衰』の終り―」『國語と國文学』第七十七巻三号　至文堂　二〇〇〇年三月　四十五頁

（注10.）谷口美紀「『禁色』――鏡の崩壊――」『國學院大學大学院　文学研究科論集』第二一号國學院大學大学院　一九九四年三月十二頁

第五章　『豊饒の海』論
―「世界解釈」の視点―

第一節　世界の破綻

『豊饒の海』は、松枝清顕の生まれ変わりが繋ぐ輪廻転生の物語だ。それは、本多繁邦の視点から見た物語だ。『豊饒の海』は本多の視点のみで進む物語では無い。もともとは、清顕の視点で物語は始まり、本多、勲といった具合に視点は変化している。輪廻転生だけを追いかけるのであれば、輪廻転生の証明者である本多の視点のみでも可能だ。何故、視点人物が複数存在するのか。その理由を三島が「『豊饒の海』について」（初出　毎日新聞　一九六九年二月二十六日）で語った「世界解釈の小説」という言葉に求めていく。

> 私はやたらに時間を追ってつづく年代記的な長編には食傷してゐた。どこかで時間がジャンプし、個別の時間が個別の物語を形づくり、しかも全体が大きな円環をなすものがほしかつた。私は小説家になつて以来考へつづけてゐた「世界解釈の小説」を書きたかつたのである。幸ひにして私は日本人であり、幸ひにして輪廻の思想は身近にあつた。(注1)

まず三島が世界解釈するために選んだ方法は、輪廻転生であった。引用の通り、輪廻転生という方法は、「どこかで時間がジャンプし、個別の時間が個別の物語を形づくり、しかも全体が大きな円環をなす」という構造を可能にした。清顕の「又、会ふぜ。きつと会ふ。滝の下で」（「春の雪」第五十五章）という言葉を聞いた本多が、勲と滝の下で出会うという場面があることにより、「春の雪」と「奔馬」は個別の物語として独立しながら、続編として繋がった。

「奔馬」「暁の寺」間では、勲がタイの少女に生まれ変わる夢を見る。「そんなことは望んでいない」と一蹴したものの、「暁の寺」では、タイの王女ジン・ジャンが勲の生まれ変わりとして登場する。ところが、ジン・ジャンは日本人の生まれ変わりであると言った自身の幼少期の発言を、相手を映す鏡のような子供故の発言とし、否定している。

このように、「奔馬」「暁の寺」間は、輪廻転生の繋がりが綻びを見せ、「春の雪」「奔馬」間のような強固な繋がりが無い。そして、「暁の寺」では、次の転生の可能性についてジン・ジャンの夭逝だけが提示され「天人五衰」へと時が飛ぶ。「暁の寺」までの時間の飛躍を支えてきた輪廻転生の証拠は、回を重ねるごとに減っていった。輪廻転生の証拠が減少していった理由は何か。

唯識、阿頼耶識は、「奔馬」第十九章で言葉として示された後、「暁の寺」では輪廻転生を支える法として提示された。「世界を存在せしめる識」によって、転生者からの転生の証拠を得ずとも、輪廻転生を肯定することが可能になった。それは、転生者によって転生が行われているのではなく、世界が存在している限り、そこに転生が起こるのだという考え方だ。世界がなければ、転生は起こらず、転生が起こらなければ、世界が存在していることが証明できないという相互依存のような関係として、「暁の寺」では提示される。唯識に支えられた輪廻転生は、世界とその世界を観察する本多の間にだけ認知される出来事である。そこに転生者の意思は存在しない。「暁の寺」第一部で圧倒的な存在感を見せた唯識、阿頼耶識という転生の支えは、第二部のジン・ジャンの内面を不明瞭にし、転生に関する一切の発言を剥奪した。

「暁の寺」「天人五衰」間においては、ジン・ジャンから次の転生の証拠や命日が明示されなかった上に、透の生年月日が明確では無いことから、転生者からの証拠が無いままに時間が飛躍した。証拠の少なさと特異性故に転生者の贋物と疑われるものの、透は転生者として迎え入れられた。「天人五衰」の時には、転生者が提示する証拠がなくとも転生があるものとして受け入れられるようになった。

改めて、視点人物が複数存在する理由について考えていく。輪廻転生には、転生者からの転生の証拠や夢による次への予言が必要だったがために、転生者たちの視点に重きを置かれていた。ところが、勲の転生否定により、その条件が崩されてしまう。そこで、輪廻転生の根拠を他に求めた。それが唯識、阿頼耶識であった。これらは、転生者ではなく、世界、そして世界を観察する本多によってのみ証明されるものだ。転生者が否定したとしても、これらが輪廻転生の支えとなった。その結果、本多が輪廻転生の証明者として存在を増していった。

ところが、「天人五衰」では、転生者からの証拠が不十分なことにより、本多は証拠を確認し、それを証明する観察者よりも踏み込んだ輪廻転生の支え手となってしまう。輪廻転生を支える本多は、観察者としてはいびつな存在になってしまう。そこに透が現れた。新たな観察者と、先の転生者たちの持っていた「運命」の不在という欠陥を抱えた転生者。本多が輪廻転生の支え手となったことにより、転生者が輪廻転生を支える立場ではなくなった。輪廻転生と無関係であった本多が輪廻転生を存在せしめ、輪廻転生の権化と言っても過言でなかった転生者は、輪廻転生とは無関係になるという逆転が起こった。

「春の雪」「奔馬」を通し転生という視点から語られた物語は、「暁の寺」で、唯識、阿頼耶識に代表される法という視点から語られ、「天人五衰」では、時間という観点で語られた。これらの視点から語ることで、三島は「世界解釈」を行おうとしたのだ。つまり、「世

界解釈」の視点が複数存在したために、視点人物もまた複数存在したのだ。

改めて、透の複雑性について考えたい。透には、多くの役割や性質が付与されている。それが、転生者、行為者、観察者という役割だ。転生者という役割は、本多によって見出された役割であり、透は慶子に聞かされるまで知りえない。また、最終的に輪廻転生とは無関係となった転生者だ。他者に影響をあたえる行為者としては、他者の排除や懐柔といった相手を掌握していくという行為に終始した。観察者としては、透が本多に出会う前からの性質であり、視力と「自意識」の消失により、放棄している。これらの役割や性質は、「春の雪」「奔馬」「暁の寺」において別々の人物に付与されていた。

「春の雪」の転生者は、転生の起点となった清顕。行為者は、清顕を禁断の恋に走らせた聡子。本多は完全なる観察者であった。「奔馬」では、転生者は勲。行為者は、勲を救うべく嘘の証言をした槙子。勲の救い手として立ち回った本多が観察者だった。「暁の寺」は、転生者がジン・ジャン。行為者が本多の協力者でありジン・ジャンのレズビアンラブの相手である慶子。ジン・ジャンに恋する本多が観察者であった。

ところが、「天人五衰」では、透が一手にそれを引き受けた。勿論、本多は観察者としての役目を担っている。ところが、本多は見えないものを見ることに力を注ぎ、見えるものを正確に観察することが出来なくなっていた。もう一つ、本多では役者が不足しいる点がある。

理智の刃は、すでにいくたびかの転生の襲来によつて、刃こぼれしたまま辛うじて保たれてゐた（「暁の寺」第八章）

このように、経年により観察者としての刃を保てなくなった本多に代わり、経年による劣化の無い透が据えられた。

前三巻において行為者として挙げたのは、全て転生者の傍らにいた女である。彼女たちは、転生者と本多の行動や心情に影響を与えている。ところが、その行為者の役割にも透が据えられている。勿論、先の転生者たちも行為者としての側面があった。ただし、その影響力には例外があった。清顕は最後に聡子の心を変えることは無く、勲は慎子による救済を跳ね除けることは出来なかった。また、ジン・ジャンと関わった慶子に何ら変化は起こっていない。転生者は、その傍らにいる女に影響を与えられないのだ。ところが、透の場合は違う。絹江の世界の中心は透だ。彼女の性質そのものを変化させることは出来ないが、透が居るところに絹江はやってくるという点では、彼女の行動を制御出来る存在として影響力を有している。

このように、前三巻では別々の人物に付与されていた役割を一手に引き受けることで、透は複雑かつ矛盾を孕む存在となった。

透について整理できたところで、再度『豊饒の海』全体について論じていきたい。ここまで、輪廻転生の視点、唯識、阿頼耶識による法の視点、時間の視点の三つの視点から「世界解釈」されてきたとした。転生者という視点から『豊饒の海』を見れば、転生者からの証拠は希薄になっていき、それだけで世界を解釈するのは不可能になっていった。世界という枠組みの視点では、唯識、阿頼耶識との相互依存によって転生が繰り返されるという構図を確立することで、新たな「世界解釈」の方法を加えるに至った。では、時間という視点ではどうか。

まず、時間の流れを象徴するものを挙げていく。一つ目は、本多と透だ。この二人は、「春の雪」から観察し続けてきた本多と、「天人五衰」から新たに観察を始めた透という時間の長さの対比が存在する。言い換えれば、古い目と新しい目の対比だ。本多は、「春の雪」では、同世代として清顕と同じ視点の高さで観察していたが、それ以降は、転生者たちより上の視点から観察している。作中で生じた視点の立ち位置の違いは、知識の有無だ。本多は、時間を重ねるごとに知識が増え、蓄積された知識によって、全てを上から俯瞰する視点へと変えていった。透という新しい目は、無知であり、それ故に彼は見えるままに観察していく。時間の流れによって、二つの観察の目が生まれ、それぞれの視点で世界は観察されるのだ。

続いてもう一つの時間の流れの視点について考えていく。これについては、描かれていない空白の時間を紐解く必要がある。

『豊饒の海』には、空白の時間が二種類ある。まずは、各巻の間に存在する空白の時間だ。それは、次の転生者が生まれ育つ時間と言い換えられる。これらの描かれない時間は、描かれていないという点で断絶しているが、本多の語りに加え、輪廻転生をもって飛躍することで、地続きの時間となっている。

一方、もう一つの空白の時間はどうか。もう一つとは、聡子の時間だ。出家し俗世を捨てた後、聡子の動向が明らかになるのは、「暁の寺」第二十一章の本多と蓼科の会話場面だ。そこから門跡となった聡子と本多が月修寺で会うまで、聡子の時間は再度断絶している。作中、本多が聡子に会いに行こうと考える場面はあるものの、三島は頑なに本多と聡子を会わせなかった。そこに、「世界解釈の小説」のための視点が隠されている。

聡子の断絶した時間は、俗世を離れて過ごした時間のことだ。これと同じだけの時間、俗世にまみれて過ごしたのが本多だ。つまり、俗世から離れた中で徳を積んできた聡子が見てきた世界と、俗世に身を置き本多が見てきた世界の対比だ。門跡となった聡子の発言

は、俗世から離れた聡子の世界での話であり、本多の世界とは隔絶した世界の話だ。つまり、本多が何も無いところに来てしまったと感じたのは、その世界の違いを突き付けられたからなのだ。ここで、時間という視点とは違う四つ目の視点が示された。世界の視点だ。では、本多の世界と聡子の世界は、どこから違ったのだろうか。それを明らかにするために、「春の雪」の聡子と本多の場面を整理していく。

自分のすぐ傍らにゐて心ははるか遠くに託けてゐるこの女（「春の雪」第三十四章）

本多の前に居る聡子は、本多と話しながら、心は別のところへと向けていた。時間を共有しながら、全く別の世界に生きている。この時、本多は聡子を又従妹の名前である「房子」という名で呼んでいる。別の世界に居る聡子に、本多の世界での名を与えた。その結果、「房子の名はちいさな架空の親しみのしるしになつた。」（「春の雪」第三十四章）のだ。では、聡子の世界とはどのような世界か。本多はそれを次のように評している。

聡子がその罪を、清顕と二人だけの住む小さな水晶の離宮のやうに思ひ做してゐるのがわかつた。（「春の雪」第三十四章）

「春の雪」において、聡子は清顕と二人だけの世界に住み、本多は束の間そこに邂逅しているだけであった。その不可侵な聡子の様子を、本多は「他人の女」（「春の雪」第三十四章）故だと考えている。勿論、聡子は本多と直接関係を持つ女では無いのだから、「他人の女」だ。しかし、二人の間にある深淵は、それだけでは説明がつかない。本多と話しながら、聡子には清顕との逢瀬について語り残したいという気持ちが現れた。この気持ちも、全く別の世界に居る本多に伝えることで、二人の世界が壊れた後も残すことができると聡子が考えたからではないか。聡子は、本多が自分と清顕の世界を犯すことの出来ない別の世界の人間であるとわかったからこそ、本多と言葉を交わしたのだ。ところが、本多は「他人の女」故のすれ違いであると認識した。その上、「房子」の名で聡子を縛ることで、恰も同じ世界の人間であるかのように親しみを抱いた。この認識の齟齬は、「天人五衰」の本多と門跡との会話に帰結する。

「えらう面白いお話やすけど、松枝さんといふ方は、存じませんな。その松枝さんのお相手のお方さんは、何やらお人違いでつしやろ」（「天人五衰」第三十章）

本多の立場から見れば、門跡が「未練を見せないつもりでおります。」（「春の雪」第三十四章）の宣言通り、俗世のことと切り捨てた。もしくは、本当は覚えているが、知らない風を装っているといった推測をするだろう。しかし、本多が語るのは、当時聡子が住んでいた清顕と聡子の世界とは別の世界から本多が垣間見た二人の姿だ。同じ場所、同じ時間に同じ体験をしても、感じることは人それぞれだ。違う世界に住んでいた本多と聡子では尚更だ。つまり、本多の世界では六十年間忘れられない出来事であったとしても、門跡の世界では六十年後も記憶しておくべきことでは無かったということだ。それは、『豊饒の海』の法の唯識、阿頼耶識といったものの体現だ。本多が模倣するそれを、聡子は体現している。吉田三陸氏は、「唯識の時間哲学で、この六十何年か前の経験を空間化している。」[注2]とし、聡子の中に唯識が生きていることを指摘している。法を模倣する本多の前に、法の体現者が現れたのだ。

もう一つ留意すべき点がある。この六十年で聡子が門跡となっている点だ。その変化は聡子の出家を契機にしたものであり、同時に清顕と二人の世界の崩壊を指している。門跡となった聡子にとって、松枝清顕は違う世界の住人だ。そして、本多もまた門跡にとっては俗世という違う世界の住人だった。門跡の世界からみれば、自分の世界に入ってきた異世界人が語る異世界の話を聞いているという状況となる。勿論、先に挙げたような意識的、無意識的な忘却であったとしても、門跡の言葉の説明はつく。しかし、本多が門跡と話が噛み合わなかったことで「記憶もなければ何もないところ」に居る心地になっていることは無視出来ない。そもそも、記憶とは、どのように形成されるものなのか。

「見る」という行為やそれによって形成された「記憶」とは、現実そのものではなく、幻の「眼鏡」というレンズを通して作られたものなのだ。[注3]

記憶とは、現実そのものでは無く、それを見て形成されるものなのだ。有本伸子氏の指摘する「幻の「眼鏡」というレンズを通して作られた」記憶は、本論で言う本多の世界と同義であろう。本多が観察者として蓄積してきた「記憶」は、本多の世界そのものと言える。そして、本多の世界について証明出来るのは、本多のみだ。本多の記憶通りの記憶を他者が持っていたとしても、それはお互いの記憶の一致に過ぎず、同じ記憶を共有しているわけではない。門跡の語る世界は、本多にとっては「記憶もなければ何もないところ」であり、「記憶」の一致する部分が全くないところなのだ。この「記憶もなければ何もないところ」について、松本徹氏は唯識と絡めて論じている。

最後、本多が見る、夏の日を浴び「寂寞を極め」た「記憶もなければ何もない」月修寺の庭には、この世界が二つに裂けて、輪廻転生を根底で支える唯識論で言うところの阿頼耶識そのものが、現われ出ているのだ。[注4]

松本徹氏が言う阿頼耶識とは、「存在の果て、無の果ての果てであり、かつ、存在が新たに現われ出て来るところ」[注5]という解釈だ。「無の果ての果て」とは、終わりではなく、「存在が新たに現われ出て来る」[注6]出発点だ。また、「春の雪」では、ジャオ・ピーが喪失について次のように語っている。

喪失といふことは何かですよ。それが僕には、出現のそもそもの根拠のやうに思へるのだ。(「春の雪」第三十三章)

喪失が出現のそもそもの根拠なると言う考えは、「天人五衰」の最後に通ずるものがある。本多の世界が失われたと同時に、本多は聡子の世界の存在を知った。喪失によって、新たな世界に立った。それを証明するように、本多は「記憶もなければ何もないところ」に立ちながら、生きている。この生きながら無へと行きつくという現象は、「天人五衰」以外の三島作品にも見られた。『仮面の告白』の「私」だ。

園子の高い哀切な声が私の耳を貫いた。私は園子のほうへふしぎそうに振向いた。この瞬間、私のなかで何かが残酷な力で二つに引き裂かれた。雷が落ちて生木が引き裂かれるように。私が今まで精魂こめて積み重ねて来た建築物がいたましく崩れ落ちる音を私は聴いた。私という存在が何か一種のおそろしい「不在」に入れかわる刹那を見たような気がした。(『仮面の告白』第四章)

ここでの「私」は、「残酷な力」によって、生きながら二つに引き裂かれた。それにより、「不在」という無へと至る。同じ人間でありながら、この前後の「私」は、全く違う「私」へと変貌したのだ。この衝撃は、「私」の中にあった矛盾に「私」が気づいたことによる衝撃だった。これについて、田中美代子氏は次のように評している。

この小説は、その「私」の認識の曖昧さを衝き、これを逆手にとって「私」をまるごと客体化し、仮構化してゆく過程を「告白」として提出した。[注7]

自身についての「認識の曖昧さ」が、「私」を「不在」へと変えた。自身について語るということは、それほど不確かなことであると言える。これは、「天人五衰」の本多にも言える。無へと行きつく過程は、恰も他者によって引き起こされたようではあるが、本多の認識によるところだ。その認識力の甘さは、転生を観察する前からあったものだ。

生まれ変りとは、ただ、僕らが生の側から死を見るのと反対に、死の側から生を眺めた表現にすぎないのではないだらうか。それはただ、眺め変へてみただけのことではないだらうか（「春の雪」第三十三章）

「春の雪」の本多は、物事を解釈する方法は一つだと考えていた。眺め方を変えたとしても、同じ法で同じように回答を導き出すことが出来ると信じていたのだ。しかし、「暁の寺」の本多は、「もはや手に入れた幾多の法則の一つにあてはめて、その尺度で以て読む事ができた。」（「暁の寺」第二章）と語り、物事を解釈する法則が複数あることを知る。ところが、清顕以降の転生者たちを観察し、「春の雪」の頃よりも法則の数を増やした本多は、その知識の豊富さに胡坐をかいている。つまり、「天人五衰」の本多の認識行為は、本多の知っているという自負によって支えられているということだ。本多の認識力には、彼の「自意識」が根底にある。「自意識」に拠った認識方法は、転生者を見出す際に発揮されている。本多は当初、三つの黒子や清顕の夢日記など、転生者から提示される目に見える形の証拠をもって転生を認識していた。ところが、それは唯識や阿頼耶識にとって代わられ、蔑ろにされるようになった。本多の認識方法は、破棄と出現を繰り返している。これは、唯識、阿頼耶識という法と同じ法則だ。しかし、本多はこの法則を「自意識」によって行っていることから、法を模倣しているに過ぎない。

本多が模倣してきた唯識とは、次のような構造だ。

唯識の本当の意味は、われわれ現在の一刹那において、この世界なるものがすべてそこに現はれてゐる、といふことに他ならない。しかも、一刹那の世界は、次の刹那には一旦滅して、又新たな世界が立ち現はれる。現在ここに現はれた世界が、次の瞬間には変化しつつ、そのままつづいてゆく。（「暁の寺」第十九章）

本多が語るように「次の刹那には一旦滅して、又新たな世界が立ち現れる」のであれば、「記憶もなければ何もない」ことは自然なことだ。松本徹氏の指摘する「阿頼耶識そのものが、現われ出ている」状況そのものと言える。ところが、本多は「自分は来てしまつた」

と絶望している。何故か。それは、本多が生きているからだ。

この時の本多は、死に対する恐怖は持ち合わせていない。

世間から忘れられた老人でも、死といふ無上の破壊力をなほ持ち合わせてゐることが、少し得意だつたのである。本多はいささかも五衰を怖れてゐなかつた。（「天人五衰」第八章）

寧ろ、死ぬことに希望を抱いていた。死が近づいている証拠である「五衰」の現れを、本多の老いと公園での覗きが露見した姿など様々な面から感じられる。そのことを柴田勝二氏は「この作品で「五衰」を示す「天人」とはむしろ本多のことであるといっても誤りではない。」[注8]としているが、本多は最後まで生きている。「五衰」とは、「死を避けることができない」時の兆候だ。しかし、それにも関わらず死が訪れないことに悲劇がある。消失と出現を繰り返す世界を「そのまま続けて」行けるのは、その消失と出現を無感動に行うからだ。しかし、本多はそれに気づき違和感を覚えた。その違和感を残したまま世界が存在することは、阿頼耶識の破綻だ。ここで本多が死を迎えれば何ら問題は無いが、八十を過ぎた本多は良性の腫瘍があるばかりで、すぐさま死ぬほどの大病を患っているわけでは無い。本多自身が阿頼耶識を否定する存在となってしまい、阿頼耶識の守り手が、阿頼耶識を破綻させるという悲劇がそこにはあるのだ。

第二節　「世界解釈」の視点

改めて、世界解釈をするために設けられた四つの視点について整理していく。

まずは、輪廻転生だ。この視点は、典拠『浜松中納言物語』から来るもので、『豊饒の海』を貫流している。当初輪廻転生を牽引したのは、夢や黒子などの転生者たちから提示される転生の証拠であった。ところが、転生者から証拠が提示されなくなると、別のものに根拠を求めるようになる。

「暁の寺」で存在を増したのは、唯識、阿頼耶識を根拠とした法の視点である。輪廻転生を支えると共に、「世界解釈」の根底とも言える世界の在り方について示した。本多の認識行為は唯識、阿頼耶識を基盤とし、その在り方そのものを模倣する形で認識方法を変化させていった。

「天人五衰」で表に出てきたのが時間の視点だ。本多と透の重ねてきた年数の長さの対比という視点は、『豊饒の海』全編を通した時間の流れに基づく視点だ。最初に挙げた輪廻転生の視点と共に『豊饒の海』を貫流する視点ではあるが、その効果を発揮するのは、最

終巻「天人五衰」でのことだ。何故なら、各巻の間に存在する空白の時間は、輪廻転生によって飛躍され、時間の経過が除外されているからだ。この対比の視点は、同じ時代を双方向から観察することを可能にし、「暁の寺」で主軸となった阿頼耶識の視点の欠点である一方向のみに視点が偏る構造を克服した。そのために、「天人五衰」では、本多と透、両方の視点で語られているのだ。

そして、『豊饒の海』に終止符を打ったのが、本多と聡子の対比、世界の視点だ。これにより、輪廻転生を観察してきた世界から弾き出されてしまう。

先に挙げた四つの視点は、水面下で常に存在しながら、主軸の役割を交代することで入れ替わり表舞台に登場した。「世界解釈の小説」という特質上、多角的視点を必要とした『豊饒の海』は、「世界解釈」の視点の主軸を交代することで、それを可能にした。この交代劇により、物語の視点人物が複数になり、それが更に「世界解釈」の視点を増やしたと言える。

転生者から語られる輪廻転生の視点では、清顕や勲の内面が丁寧に語られ、観察者である本多は脇役として存在した。法の視点では、唯識、阿頼耶識を模倣する本多の語りが中心になった。その結果、「暁の寺」の転生者ジン・ジャンの内面はほぼ明かされず、男の本多には不可侵なレズビアンとして描かれた。二つの視点から対比して見る時間の視点では、初めに、『豊饒の海』の時間を生きてきた本多と、「天人五衰」のみ登場する透、双方向から語られた。この時、重ねてきた時間の長さで対比させるために透は本多と「瓜二つ」に設定されたのだろう。二人の視点から語られたことで、法の視点の場合に起こった、転生者の内面が不明瞭になる構図を解消した。しかし、本多と聡子による世界の違いによる対比は、本多の存在が法の破綻を突き付けるに至った。

視点の豊富さによって多角的に観察された『豊饒の海』の世界は、終焉を迎えた。しかし、本多は生き、世界は存在し続けている。ならば、世界解釈を続けることは可能だ。ところが、本多は絶望に立たされた。何故なら、彼には新たに「世界解釈」を始める程の猶予は無いからだ。先に、生きていることが悲劇と述べたが、その生の先が短いこともまた悲劇だ。「世界解釈」を行う場が永遠であっても、それを行う人間の時間は有限だ。時間を掛けて蓄積した知識や経験、記憶全てが無に帰した世界で、本多に残されたのは老いのみだ。そのことに絶望した。

三島は老いを嫌悪し続けていた。自身が老いることも勿論、作品にも老いが悪であるかのように描かれてきた。ところが、『豊饒の海』では例外的に老いが悪でない人物が存在する。聡子だ。八十三歳の門跡は何ら老いの悪に蝕まれていない。「浮世の辛酸が人に与へるやうなものを、悉く免かれてゐた。」（「天人五衰」第三十章）のだ。その影響か、「老ひの

美しさ」（「天人五衰」第三十章）という言葉の通り、老いに美しさを有していた。

三島が描くところの理想の年寄りは聡子によって表されているといえるかもしれない。[注9]

越次倶子氏が指摘するように、老いを憎む三島は、「老ひの美しさ」というものの存在をどこかで願っていたのだろう。このように、世間一般のそれと同じように老いに蝕まれ衰えている本多に対し、聡子は老いによって浄化され、その美しさに磨きがかかっていた。この違いについて本多は次のように評している。

本多が閲（けみ）した六十年は、聡子にとつては、明暗のけざやかな庭の橋を渡るだけの時間だつたのであらうか。（「天人五衰」第三十章）

同じだけ時が流れたはずの聡子が、まるで一瞬でこの時を迎えたかのような様子で現れた。こうした聡子の姿を、吉田三陸氏はこう述べている。

この不思議な時の効果は、聰子が月修寺にあった六十年という歳月をかけて、ようやく体得した唯識の時間概念によるものである。[注10]

つまり、本多が唯識を模倣している間に、聡子はそれを会得していたということだ。

本多と聡子の対比は、正に「心々」の体現だ。そして、「心々」という考え方は、認識者という存在の否定だ。人によってさまざまであるということは、認識者の違いが物事に変化を生じさせてしまうという考え方と言える。この事例は、作中で既に示されている。

本多は、透を贋物と疑いながら、本物として夭折することを願っていた。疑念はあれ、本多にとって、透はジン・ジャンの生まれ変わりだった。ところが、慶子は違う。「私の見るところでは、あなたはきつと贋物だわ」（「天人五衰」第二十七章）と、透が贋物であることを断定している。透という同じ人物を精査した時、本多と慶子では意見が分かれるのだ。それは、認識行為が「心々」であることを示している。

本多が月修寺で門跡から絶望を突き付けられたかのようだが、その絶望の出所は全て本多自身だ。「記憶もなければ何もなゐところ」に行ったのは、本多の認識力の甘さであるし、老いもまた本多自身の経年によるものだ。それらの絶望を、「目に映るものはすべて虚心に見やう」（「天人五衰」第三十章）という心持になって初めて直視した。これこそ、本多と

聡子の違いの根幹をなすものだ。他の人間には見えないものを見ようとした本多と、誰もが見えていながら目を反らしがちなことを真っ直ぐ見据える聡子。『豊饒の海』の世界を最も的確に認識していたのは聡子なのではないか。

「黒い犬ぢやございません？　頭が下に垂れて」

と、聡子は実に率直に言ひ切つた。みんなはそれではじめてそれと知つたやうにざわめきだした。（「春の雪」第三章）

当初から、聡子は目の前のことから目を反らさずに認識していた。それは、誰にでも見える形で出現しているにも関わらず、誰もが目を反らしてしまう不都合な事実であっても同じだった。この素直さは、その場で清顕の自負を傷つけ、後に老いた本多に絶望を見せた。『豊饒の海』における悪が「自意識」であれば、正義は「純粋」だ。これもまた、本多と聡子の対比要素だ。『豊饒の海』は、清顕やその転生者たちを挟んで、本多と聡子を対比させていたのだ。

『豊饒の海』は、「世界解釈」を企てた小説だ。そのために、輪廻転生、法、時間、世界という四つの視点を用いた。これにより、多角的視点で語る壮大かつ緻密な構造を構築した。そして、その終焉には、老いの醜さと自意識が、老いの美と純粋に敗れる様が描かれた。林房雄氏は、この結末を「本多繁邦への厳しい懲罰であろう。」[注11]と指摘している。確かに、本多にとっては大きな罰であろう。しかしそれよりも、三島が憎むものの敗北という面の方が強く出ているのではないか。門跡に「老いの美しさ」という三島の理想を強調している点で、本多個人への懲罰と言うよりは、三島の憎むものの敗北という大きな枠組みへの懲罰になっているのではないか。三島の企てた「世界解釈」は、三島が憎むものたちの敗北という形で、三島由紀夫の望む世界を浮き彫りにする結果となった。つまり、『豊饒の海』において解釈された世界とは、三島の理想世界であったということだ。そして、解釈された三島の理想世界は、三島の憎むものの敗北、理想の勝利で幕を閉じた。

注

（注1）三島由紀夫「『豊饒の海』について」『三島由紀夫全集』第三十四巻　新潮社　一九七六年二月　二七頁

（注2）吉田三陸「『豊饒の海』における空間化する時間」『日本文学』第三十二巻一号　日本文学協会　一九八三年一月　四八頁

（注3）有元伸子『三島由紀夫物語る力とジェンダー　『豊饒の海』の世界』翰林書房

二〇一〇年三月　三一二頁

（注４）松本徹「究極の小説『天人五衰』―三島由紀夫最後の企て」『文学界』六十五巻一号　文藝春秋　二〇一一年一月　二一九頁

（注５）先掲　松本徹「究極の小説『天人五衰』―三島由紀夫最後の企て」『文学界』六十五巻一号　文藝春秋　二〇一一年一月　二一九頁

（注６）先掲　松本徹「究極の小説『天人五衰』―三島由紀夫最後の企て」『文学界』六十五巻一号　文藝春秋　二〇一一年一月　二一九頁

（注７）田中美代子『鑑賞日本現代文学　第二十三巻　三島由紀夫』角川書店　一九八〇年十一月八四頁

（注８）先掲　柴田勝二「憑依の脱落―『天人五衰』の終り―」『國語と國文学』第七十七巻三号　至文堂　二〇〇〇年三月　四十八頁

（注９）越次倶子「「豊饒の海」〈三島由紀〉―本多繁邦に見る老醜―」『国文学　解釈と鑑賞』第五十四巻四号　至文堂　一九八九年四月　一一一頁

（注10.）先掲　吉田三陸「『豊饒の海』における空間化する時間」『日本文学』第三十二巻一号　日本文学協会　一九八三年一月　四八頁

（注11.）林房雄『悲しみの琴　三島由紀夫への鎮魂歌』文藝春秋　一九七二年三月　二三〇頁

結び

本論では、三島由紀夫が「世界解釈の小説」と銘打った『豊饒の海』の「世界解釈」の方法及び、その結果について明らかにしていくことを目的としてきた。ここで、取り上げた問題及びその問題解明の為の考察方法について整理する。

第一章では、「春の雪」を中心に論じた。嘘を核とした作品構造と題し、嘘によって輪廻転生への導入と転生を証明する観察者を生み出した小説であったと結論づけた。嘘を核とした作品構造とは、清顕と聡子の間だけではなく、登場人物がそれぞれの立場で嘘をつくことで、その後の展開を作っている小説であったことから定義した。これを、テクストに沿って精査することで、嘘が「春の雪」を構成する重要な要素であり、次巻以降にも現れるモチーフであったことを明らかにした。作中の嘘について、先行研究の多くがその事実を認めつつもそれを中心として取り上げることは少なかった。その中で、佐藤秀明氏が「〈嘘〉の物語―『豊饒の海』読解―」と題して論じている。ここで、佐藤秀明氏は、テクストに散りばめられた嘘を丹念に拾い上げ、嘘によって物語が展開していくことを証明している。そして、「読者が〈嘘〉を見抜くことで、〈嘘〉の裏に潜む物語が現れ出る。」[注1]と、嘘を見抜くのは「読者」であると指摘した。しかし、本論では、嘘を見抜くのは作中の女だと結論づけた。何故なら、清顕の嘘を見抜くのは聡子であるからだ。そして、嘘は露見することで嘘として現前する。言い換えれば、つかれた嘘を女が見抜くことで、それは嘘になるということだ。嘘は、女性優位の象徴でもある。この女性優位の構図は次巻以降にも引き継がれ、嘘が作品構造の核となっていることが窺える。

そして、嘘にはもう一つ役割があることが明らかになった。それは、輪廻転生への導入装置という役割だ。勿論、転生を決定的に示唆したのは清顕の言葉だ。しかし、清顕が「又、会ふぜ。きつと会ふ。滝の下で」と発言するのは、「春の雪」の最後だ。つまり、嘘によって導かれた結果出た言葉だと言える。そして、そんな清顕と彼の夢日記によって、本多は観察者と言う名の輪廻転生の証明者へと仕立て上げられる。以降続く輪廻転生の証明者を誕生させたのも嘘であった。

第二章では、「奔馬」を中心に論じた。本論では、「奔馬」の主題について、純粋を貫くための死であったと結論づけた。勲の行動は全て純粋を貫くための行動だ。先行研究においても、對馬勝淑氏のように『奔馬』の主題が「純粋」ということにある」[注2]と指摘するなどして、勲の純粋性について多く論じられてきた。田坂昂氏は、「相反する観念の結合、あるいは相互転換ということのなかに「純粋」という観念をみている」[注3]と、勲の語る「純粋」に見られる矛盾の理由を説明した。トマ・サルガン氏は、三島作品に見られる純粋性

について「生き生きした妙に艶かしい「純粋」[注4]」と評した。本論では、こうした、純粋性そのものについても勿論だが、勲が「自刃」することと関連づけて、勲の死の意味について明らかにしてきた。

勲は、父飯沼茂之、母みね、槙子、佐和といった周りの人物たちとの繋がりによって、純粋に生きるということが困難になる。その最たるものが、計画の破綻であり、法廷での槙子の証人尋問での嘘だ。つまり、勲が純粋なままでいるためには他者と隔絶した孤独に身を置く必要があった。究極の孤独、死が必要だったのだ。何故なら、生きたままでは、純粋なままで居ることが困難だからだ。純粋であるための死であった。

勲を死に向かわせたのは、純粋を汚す人物たちだ。その一つに槙子の嘘がある。第一章でも取り上げた嘘の問題であるが、法廷で槙子がつく嘘は、最初から嘘と露見していることから、聡子のそれとは違う。しかし、勲が計画について隠すという形でついていた嘘を見抜き、嘘の証言のために入念な準備をする槙子は、聡子と同じ嘘を見抜く女であった。

「奔馬」では、再度本多の「理智」が後退し、「情熱」が躍り出る。内から出る本物の「情熱」によって、本多は裁判官の地位を投げ打って弁護士となり、勲の救い手として奔走した。この変化を直接的にもたらしたのは勲だが、清顕が観察者という名の輪廻転生の証明者を誕生させた時と本質的には同じ変化であり、勲は清顕の再来であった。脇腹の黒子などの転生の証拠もさることながら、本多の変化を持って勲は清顕の生まれ変わりであることが証明された。これが輪廻転生の証明者の役割だった。

第三章では、「暁の寺」を中心に論じた。ここでは、「暁の寺」において『豊饒の海』における法、唯識や阿頼耶識といった要素が前面に押し出されたことに着目した。

法をその身に宿すジン・ジャンを法の受肉者、法を模倣する本多を法の模倣者と定義した。その上で、二人を個々に考察し、二人の関係を整理することで、唯識や阿頼耶識という法の出現の過程を探った。

本多についてだが、「暁の寺」では、観察者である本多が、ジン・ジャンに「恋」をする。これにより、認識と行為の矛盾が生じ、認識方法にも変化が生じた。「覗見」という方法の出現だ。見るという行為に「情熱」を宿した本多は、「覗見」という手続きを行うことで、見えないものを見ることに傾倒していく。それは同時に、今まで重要視していた目に見える形で示される転生の証拠の放棄であった。

第一章の「春の雪」論にて、嘘が女性優位の象徴であると指摘した。「暁の寺」の慶子も嘘によってその優位性を保っている。慶子は、嘘によって本多が見たいと願っていたジン・ジャンの秘密を本多よりも先に知りながら、それを隠した。しかし、「覗見」という手続きを踏むことで、本多の前に慶子の隠したジン・ジャンの秘密、レズビアンラブが現れる。

一見、本多が慶子の嘘を見抜いたようであるが、本多は嘘の存在に気づかぬままに慶子が嘘をついた理由を見せつけられただけであった。そのため、嘘を見抜くというよりは、見せつけられたと言ったほうが適切だ。レズビアンラブの世界は、本多を完全に拒絶する世界だ。見ることはできても、存在することはできない世界の前では、本多は完全なる弱者だ。このように、「暁の寺」でも、女性の優位性が嘘によって示された。

先に、ジン・ジャンを法の受肉者、本多を法の模倣者と定義した。この定義は、小林康夫氏の「春の雪」の清顕が犯した「至高の禁」についての論に拠った。

なによりも法の禁忌（法による禁止そして禁じられたものとしての法）を侵犯することによって、法そのものに触れること、そして法の聖なるものを受肉することにほかならないからである。(注5)

唯識、阿頼耶識による輪廻転生の解釈は、「一瞬一瞬新たにし、かつ一瞬一瞬廃棄」するものだ。しかし、ジン・ジャンは転生前の記憶を持った状態で登場した。一瞬ごとに断絶しているべきものを、地続きのものとしてしまった。こうして法の禁を犯したジン・ジャンは、法そのものに触れたことにより、「法の聖なるものを受肉」した。その証拠に、彼女はその後「一瞬一瞬新たにし、かつ一瞬一瞬廃棄」を体現している。幼少期に有していた転生の記憶の消失、約束の一方的な破棄など、彼女の行動は連続性が乏しい。それは、唯識、阿頼耶識が示す世界の在り方そのものであり、法の受肉者と言える。以上のように、「暁の寺」において、ジン・ジャンは法を受肉した存在として登場し、本多に法を示す役割を担っていたのだ。法を知った本多は、その法を模倣する存在として、「天人五衰」に登場する。

第四章では、「天人五衰」を中心に論じた。中でも本多と透の自意識に注目してテクストを整理、考察した。本多については、ここまで行ってきた認識行為の終着について明らかにした。「外から人をつかんで、むりやり人を引きずり廻す」という「運命」を人が認識するという行為の否定。それが、「あるがままを心に刻まう」と誓った本多が認識できた唯一のことであったと結論づけた。続いて透については、三好行雄氏の論にある「透は、その複雑に入り組んだ人間模様のどこにも、その出自をもたない。」(注6)という指摘を起点にした。そこで、透と絹江。透と本多。それぞれとの関係について考察することで、透と先の転生者たちとの違いや、本多、絹江との類似性など、透という存在の複雑さが明らかになった。その過程で、慶子が、透は転生者の「贋物」であると本人に伝えることで、「天使殺し」となったことも触れた。それは、慶子の嘘の誘いに透が応じたことで起こり、「天人五

衰」においても、嘘が引き起こす事柄は、女性主導で幕を閉じた。

第五章では、第四章で示した透が『豊饒の海』のどの人物にも出自を持たないという指摘について考察した後、『豊饒の海』全体を総括するような視点で論じた。

透は、転生者でありながら観察者という稀有な存在だ。前三作では別々に付与されていた役割を一手に引き受けることで、透は複雑かつ矛盾を孕む存在となったのだ。つまり、三好行雄氏の「透は、その複雑に入り組んだ人間模様のどこにも、その出自をもたない。」という指摘は、全てを内包することで、唯一無二の性質を手に入れたために、そのように見えると言い換えることが出来るだろう。

「世界解釈」のためには、多角的な視点が必要であると仮定し、『豊饒の海』で示された「世界解釈」のための視点について明らかにしていった。清顕を起点とした輪廻転生。ジン・ジャンが示した唯識、阿頼耶識という法。「春の雪」から「天人五衰」までに流れた時間。本多と聡子の対比による世界の違い。この四つの視点によって、『豊饒の海』という世界は語られて来た。そして、これらの視点は、「天人五衰」の本多と門跡に収束された。老いの醜さを持つ本多と「老いの美しさ」を持つ門跡との対比だ。

『豊饒の海』は、「世界解釈」を企てた小説だ。そのために、輪廻転生、法、時間、世界、という四つの視点を用いた。これにより、視点人物が増え、多角的視点で語る壮大かつ緻密な構造を構築した。そして、その終焉には、老いの絶望と自意識が老いの美と純粋に敗れる様が描かれた。林房雄氏は、この結末を「本多繁邦への厳しい懲罰であろう。」[注7]と指摘している。確かに、本多にとっては大きな罰であろう。ただそれよりも、三島が憎むものの敗北という面の方が強く出ているのではないか。門跡に「老いの美しさ」という三島の理想を強調している点で、本多個人への懲罰と言うよりは、三島の憎むものの敗北という大きな枠組みへの懲罰になっているということだ。三島の企てた「世界解釈」は、三島の憎むものの敗北という形で、三島由紀夫の望む世界を浮き彫りにするものであった。つまり、『豊饒の海』において解釈された世界とは、三島の理想世界であったということだ。そして、解釈された三島の理想世界は、三島の憎むものの敗北、理想の勝利で幕を閉じた。

以上のように、本論では三島由紀夫の『豊饒の海』について論じて来た。『豊饒の海』論と銘打ったことで、全体を見通すことに集中し、細部まで丁寧に見ることが困難であった。今後論じる際には、先行研究を注視し、より細部まで丁寧に考察していきたい。

注

（注1）佐藤秀明「〈嘘〉の物語―『豊饒の海』読解―」「渾沌」五号　近畿大学大学院

文芸学研究科　二〇〇八年三月　七八頁

（注２）對馬勝淑『三島由紀夫『豊饒の海』論』海風社　一九八八年一月　一八四頁

（注３）田坂昂『三島由紀夫入門』オリジン出版センター　一九八五年十二月　一五七頁

（注４）トマ・サルガン「三島由紀夫の『仮面の告白』、『憂国』と『奔馬』における「純粋」と「不純」」『立教大学大学院　日本文学論叢』第十号　立教大学文学研究科日本文学専攻　二〇一〇年八月　二四四―二四五頁

（注５）田中実「『金閣寺』の〈語り手を越えるもの〉―〈作家〉へ」『芸術至上主義文芸』第二四巻　芸術至上主義文芸研究会　一九九八年十一月　十一頁

（注６）小林康夫「無の透視法―『豊饒の海』論ノオト」『ユリイカ』第十八巻五号　青土社　一九八六年五月　一五五頁

（注７）三好行雄『『豊饒の海』論―「天人五衰」を視座として―」『国文学　解釈と教材の研究』第三十一巻八号　学灯社　一九八六年七月　六頁

（注８）林房雄『悲しみの琴　三島由紀夫への鎮魂歌』文藝春秋　一九七二年三月　二三〇頁

参考文献目録

〈テキスト〉

「仮面の告白」
三島由紀夫『決定版　三島由紀夫全集』第一巻　新潮社　二〇〇〇年十一月

「禁色」
三島由紀夫『決定版　三島由紀夫全集』第三巻　新潮社　二〇〇一年二月

「春の雪」「奔馬」
三島由紀夫『決定版　三島由紀夫全集』第十三巻　新潮社　二〇〇一年十二月

「暁の寺」「天人五衰」
三島由紀夫『決定版　三島由紀夫全集』第十四巻　新潮社　二〇〇二年一月

〈参考文献〉

吉村貞司『作家論シリーズ２　三島由紀夫』東京ライフ社　一九五六年二月
小林秀雄編『現代日本文学館　第四十二　三島由紀夫』文藝春秋　一九六六年八月
吉村貞司『三島由紀夫の美と背徳』現文社　一九六六年九月
野口武『三島由紀夫の世界』講談社　一九六八年十二月
高橋文二『三島由紀夫の世界　夭逝の夢と不在の美学』新典社　一九六九年七月
長谷川泉［ほか］共編『三島由紀夫研究』右文書院　一九七〇年七月
いいだ・もも『都市選書　一一四　三島由紀夫』都市出版社　一九七〇年十二月
三枝康高編『三島由紀夫　その運命と芸術』有信堂　一九七一年三月
舟橋聖一［ほか］『三島由紀夫の人間像：評論集』読売新聞社　一九七一年三月
村松剛『三島由紀夫　その生と』文藝春秋　一九七一年五月
武智鉄二『三島由紀夫　死とその歌舞伎観』涛書房　一九七一年八月
奈須田敬『わが友三島由紀夫　レポート・自決の心理と動機』原書房　一九七一年八月
梶谷哲男『三島由紀夫　芸術と病理』金剛出版　一九七一年十月
水津謙二『三島由紀夫の悲劇　病跡学的考察』都市出版社　一九七一年十月
坊城俊民『焔の幻影　回想三島由紀夫』角川書店　一九七一年十一月
日本学生新聞編『回想の三島由紀夫』行政通信社　一九七一年十一月
林房雄『悲しみの琴　三島由紀夫への鎮魂歌』文藝春秋　一九七二年三月
平岡梓『伜・三島由紀夫』　文芸春秋　一九七二年五月

徳岡孝夫・ドナルド・キーン
『悼友紀行　三島由紀夫の作品風土』中央公論社　一九七三年七月
寺田透『戦後の文学』河出書房　一九七三年九月
長谷川泉『彩絵硝子の美学　三島由紀夫の知的運命』至文堂　一九七三年十一月
林房雄［ほか］『浪曼人三島由紀夫　その理想と行動』再版　浪漫　一九七三年十二月
白川正芳編『三島由紀夫　批評と研究』　芳賀書店　一九七四年十二月
県威生樹『三島由紀夫論　天皇の仮面とニヒリズム』三一書房　一九七四年四月
平岡梓『伜・三島由紀夫　没後』文芸春秋　一九七四年六月
光栄尭夫『三島由紀夫論』五月書房　一九七五年一月
福島鑄郎『三島由紀夫　資料総集』新人物往来社　一九七五年六月
日本文学研究資料刊行会編
『日本文学研究資料叢書　三島由紀夫』有精堂出版　一九七五年十月
長谷川泉,武田勝彦共編『三島由紀夫事典』明治書院　一九七六年一月
三島由紀夫『三島由紀夫全集』第三十三巻　新潮社　一九七六年一月
三島由紀夫『三島由紀夫全集』第三十四巻　新潮社　一九七六年二月
ジョン・ネイスン著　野口武彦訳
『三島由紀夫　ある評伝』新潮社　一九七六年六月
堂本正樹『三島由紀夫の演劇　幕切れの思想』劇書房　一九七七年七月
三枝康高『三島由紀夫・その血と青春』桜楓社　一九七七年八月
佐伯彰一『評伝三島由紀夫』新潮社　一九七八年三月
戸田義雄・永藤武『よみがえる三島由紀夫　霊の人の文学と武と』日本教文社
一九七八年十一月
山本舜勝『三島由紀夫　憂悶の祖国防衛賦　市ケ谷決起への道程と真相』日本文芸社
一九八〇年六月
清水昶『三島由紀夫　荒野からの黙示』小沢書店　一九八〇年十月
田中美代子編『三島由紀夫』角川書店　一九八〇年十一月
保阪正康『憂国の論理　三島由紀夫と楯の会事件』講談社　一九八〇年十一月
北垣隆一『三島由紀夫の精神分析』北沢図書出版　一九八二年二月
山本舜勝『君には聞こえるか三島由紀夫の絶叫』パナジアン　一九八二年十一月
菅原洋一『三島由紀夫とその海』近代文芸社　一九八二年十二月
越次倶子『三島由紀夫文学の軌跡』広論社　一九八三年十一月
渋沢龍彦『三島由紀夫おぼえがき』立風書房　一九八三年十二月

ヘンリー・スコット＝ストークス著　徳岡孝夫訳
『三島由紀夫死と真実』ダイヤモンド社　一九八五年十一月
田坂昂『三島由紀夫入門　三島美学の核心と作品にみるその構造』
オリジン出版センター　一九八五年十二月
小川和佑『三島由紀夫　反『日本浪曼派』論』林道舎　一九八七年十月
野坂昭如『赫奕たる逆光　私説・三島由紀夫』文藝春秋一九八七年十一月
対馬勝淑『三島由紀夫『豊驍の海』論』海風社　一九八八年一月
安藤武『三島由紀夫研究年表』西田書店　一九八八年四月
小阪修平『非在の海　三島由紀夫と戦後社会のニヒリズム』河出書房新社
一九八八年十一月
橋川文三『三島由紀夫論集成』深夜叢書社　一九八八年十二月
佐々木孝次『三熊野幻想　天皇と三島由紀夫』せりか書房　一九八九年三月
村松剛『三島由紀夫の世界』新潮社　一九九〇年九月
秋山駿『群像日本の作家　十八　三島由紀夫』小学館　一九九〇年十月
佐藤秀明編『日本文学研究資料新集　三十　三島由紀夫　美とエロスの論理』
有精堂出版　一九九一年五月
堀江珠喜『薔薇のサディズム　ワイルドと三島由紀夫』英潮社　一九九二年四月
河村政敏『滅びの美学　太宰治と三島由紀夫』至文堂　一九九二年七月
吉村貞司『近代作家研究叢書　一一八　三島由紀夫』日本図書センター
一九九二年十月
奥野健男『三島由紀夫伝説』新潮社　一九九三年二月
堂本正樹『劇人三島由紀夫』劇書房　一九九四年四月
富岡幸一郎『仮面の神学　三島由紀夫論』構想社　一九九五年十一月
猪瀬直樹『ペルソナ　三島由紀夫伝』文藝春秋　一九九五年十一月
ドナルド・キーン著・角地幸男訳
『日本文学の歴史』第十四巻（近代・現代篇５）中央公論社　一九九六年七月
福島次郎『三島由紀夫―剣と寒紅』文藝春秋　一九九八年三月
安藤武『三島由紀夫の生涯』夏目書房　一九九八年九月
山内由紀人『三島由紀夫の時間』ワイズ出版　一九九八年十一月
西本匡克『三島由紀夫　ダンディズムの文芸世界』双文社出版　一九九九年六月
小埜裕二編『日本文学研究論文集成　四十二　三島由紀夫』若草書房　二〇〇〇年四月
松本徹・佐藤秀明・井上隆史編『三島由紀夫事典』勉誠出版　二〇〇〇年十一月

安藤武『三島由紀夫全文献目録』夏目書房　二〇〇〇年十二月
柴田勝二『三島由紀夫　魅せられる精神』おうふう　二〇〇一年十一月
瀧田夏樹『川端康成と三島由紀夫をめぐる二十一章』風間書房　二〇〇二年一月
橋本治『「三島由紀夫」とはなにものだったのか』新潮社　二〇〇二年一月
伊藤氏貴『告白の文学　森鴎外から三島由紀夫まで』鳥影社　二〇〇二年八月
出口裕弘『三島由紀夫・昭和の迷宮』新潮社　二〇〇二年十月
小室直樹『三島由紀夫が復活する』毎日ワンズ　二〇〇二年十一月
吉田達志『三島由紀夫の作品世界　『金閣寺』と『豊饒の海』』高文堂出版社
二〇〇三年五月
三島由紀夫著　山内由紀人編『三島由紀夫　ロゴスの美神』岳陽舎　二〇〇三年七月
藤田寛『三島由紀夫論』せせらぎ出版　二〇〇四年六月
松本徹『三島由紀夫エロスの劇』作品社　二〇〇五年五月
上総英郎『三島由紀夫論』パピルスあい　二〇〇五年八月
清水正『三島由紀夫・文学と事件　予言書『仮面の告白』を読む』D文学研究会
二〇〇五年九月
松本徹『あめつちを動かす』試論社　二〇〇五年十二月
佐藤秀明『日本の作家一〇〇人　三島由紀夫』勉誠出版　二〇〇六年二月
伊藤勝彦『最後のロマンティーク三島由紀夫』新曜社　二〇〇六年三月
田中美代子『三島由紀夫神の影法師』新潮社　二〇〇六年十月
井上隆史『三島由紀夫虚無の光と闇』試論社　二〇〇六年十一月
宮崎正弘『三島由紀夫の現場　金閣寺、豊饒の海から市ケ谷事件現場まで』並木書房
二〇〇六年十一月
松本健一『三島由紀夫亡命伝説』増補・新版　辺境社　二〇〇七年三月
高橋和幸『三島由紀夫の詩と劇』和泉書院　二〇〇七年三月
田坂昂『三島由紀夫論』増補　風濤社　二〇〇七年六月
杉山欣也『「三島由紀夫」の誕生』翰林書房　二〇〇八年二月
佐藤秀明『三島由紀夫の文学』試論社　二〇〇九年五月
山口基編著『三島由紀夫研究文献総覧』出版ニュース社　二〇〇九年十一月
佐久間隆史『三島由紀夫論　その詩人性と死をめぐって』土曜美術社出版販売
二〇〇九年十一月
有元伸子『三島由紀夫　物語る力とジェンダー　『豊饒の海』の世界』東京書籍
二〇一〇年三月

村上建夫『君たちには分からない　「楯の會」で見た三島由紀夫』新潮社
二〇一〇年十月
井上隆史『三島由紀夫幻の遺作を読む　もう一つの『豊饒の海』』光文社
二〇一〇年十一月
三島由紀夫著　中央公論編集部編
『三島由紀夫と戦後』再版　中央公論新社　二〇一〇年十一月
島内景二『三島由紀夫　豊饒の海へ注ぐ』ミネルヴァ書房　二〇一〇年十二月
林進『意志の美学　三島由紀夫とドイツ文学』鳥影社・ロゴス企画　二〇一二年九月
椎根和『平凡パンチの三島由紀夫』[完全版]　茉莉花社　二〇一二年十月
川上陽子『三島由紀夫「表面」の思想』水声社　二〇一三年三月

〈雑誌論文〉

川村二郎「貫ぬかれた様式化への意志―三島由紀夫「春の雪」」『文芸』第八巻四号
河出書房新社　一九六九年四月
野口武彦「ライフワークたる本面目を発揮：三島由紀夫「春の雪」「奔馬」」『群像』
第二十四巻四号　講談社　一九六九年四月
中島誠「三島由紀夫試論―文化意志としての「豊饒の海」」『新日本文学』第二十四巻
十号　新日本文学会　一九六九年十月
長谷川泉「豊饒の海（三島由紀夫のすべて）―（三島由紀夫の七つの仮面）」
『国文学　解釈と教材の研究』第十五巻七号　学灯社　一九七〇年五月
千頭剛「三島由紀夫―「憂国」から「豊饒の海」まで」『民主文学』第五十五巻
日本民主主義文学会　一九七〇年六月
磯田光一「見えすぎる眼の情欲―三島由紀夫「暁の寺」」『群像』第二十五巻十号
講談社　一九七〇年十月
磯田光一「「豊饒の海」四部作を読む―“滅び”の構図のゆくえ」『新潮』第六十八巻
二号　新潮社　一九七一年一月
三島由紀夫「「豊饒の海」ノート」『新潮』第六十八巻二号　新潮社　一九七一年一月
宗谷真爾「「豊饒の海」を読んで―三島由紀夫のバイヨン」『新潮』第六十八巻三号
新潮社　一九七一年二月
佐藤静夫「涸渇の海に死す―「豊饒の海」論」『民主文学』第六十四巻
日本民主主義文学会　一九七一年三月
渋沢竜彦「ニヒリズムとの凄惨な格闘―三島由紀夫「天人五衰」」『文芸』第十巻五号

河出書房新社　一九七一年五月
高橋英郎「三島由紀夫論·下·優雅なる復讐　「春の雪」（劇的）」『新劇』第十八巻七号
白水社　一九七一年七月
荒木精之「「奔馬」と神風連」『日本及日本人』一四九九号　日本及日本人社
一九七一年七月
寺田透「「豊饒の海」」『文芸』第十一巻八号　河出書房新社　一九七二年八月
平野幸仁「『豊饒の海』または〈陶酔の美学〉」『横浜国立大学人文紀要·第二類語学・文
学』第二十巻　横浜国立大学一九七三年十月
位藤邦生「「豊饒の海」論」『近代文学試論』第十二巻　広島大学近代文学研究会
一九七四年二月
奥野健男「評伝・三島由紀夫―十二「盗賊」と「豊饒の海」」『自由』第十六巻九号
自由社　一九七四年九月
武田勝彦「豊饒の海」『国文学　解釈と鑑賞』第四十一巻二号　至文堂　一九七六年二月
遠丸立「三島由紀夫のナルシシズム―「豊饒の海」を中心に」『国文学　解釈と鑑賞』
第四十一巻二号　至文堂　一九七六年二月
栗栖真人「情熱の終焉―「天人五衰」論」『語文』第四十二巻　日本大学国文学会
一九七六年十一月
出口裕弘・飯島耕一・磯田光一
「「豊饒の海」の時代（昭和四〇～四五年）（共同討議）」
『国文学　解釈と教材の研究』第二十一巻　十六号　学灯社　一九七六年十二月
神谷忠孝「三島由紀夫「豊饒の海」の文体」『国文学　解釈と教材の研究』第二十二巻
十四号　学灯社　一九七七年十一月
長谷川泉「「豊饒の海」論―神話か近代小説か」『国文学解釈と鑑賞』第四十三巻十号
至文堂　一九七八年十月
加納英年「「豊饒の海」論（第1回）」『国文学研究ノート』第十巻　神戸大学
一九七八年十二月
河村政敏「「豊饒の海」を軸として」『国文学　解釈と鑑賞』第四十四巻十一号　至文堂
一九七九年十月
伊藤守幸「「浜松中納言物語」と「豊饒の海」―輪廻転生思想と文学」『文芸研究』
第九十三巻　日本文芸研究会　一九八〇年一月
白石喜彦「「豊饒の海」覚え書―作品論」『国文学　解釈と鑑賞』第四十五巻三号
至文堂　一九八〇年三月

清家浩「『失われた時を求めて』と『豊饒の海』」『広島経済大学研究論集』
第二巻四号　広島経済大学　一九八〇年三月
大久保典夫「三島由紀夫「春の雪」の聡子」『国文学　解釈と教材の研究』第二十五巻
四号　学灯社　一九八〇年三月
佐伯彰一「私小説・オペラ的―「豊饒の海」再訪」『新潮』
第七十七巻十二号　新潮社　一九八〇年十二月
深沢三千男「「豊饒の海」のいわゆる藍本の謎について（子午線）」『日本文学』第三十巻
四号　日本文学協会　一九八一年四月
野口武彦「三島由紀夫の作品を読む―仮面の告白・金閣寺・鏡子の家・憂国・十日の菊・
英霊の声・豊饒の海（共同討議）」『國文學』第二十六巻九号　學燈社　一九
八一年七月
青木保「文化人類学からみた三島由紀夫―夕刻のメタファー「暁の寺」のバンコック」
『國文學』第二十六巻九号　學燈社　一九八一年七月
田中美代子「三島由紀夫「豊饒の海」」『国文学解釈と鑑賞』第四十七巻二号　至文堂
一九八二年二月
椿実「三島由紀夫と「天人五衰」」『日本及日本人』一五六六巻　日本及日本人社
一九八二年四月
永藤武「三島由紀夫・『豊饒の海』の思想」『神道学』第一一三巻　神道学会
一九八二年五月
石黒由紀子「「豊饒の海」論　歴史に関わろうとする意志の行方」『島大国文』第十一巻
島根大学　一九八二年十二月
吉田三陸「「豊饒の海」における空間化する時間」『日本文学』第三十二巻一号
日本文学協会　一九八三年一月
野口武彦「三島由紀夫と北一輝―「豊饒の海」をめぐって」『文学界』第三十七巻四号
文芸春秋社　一九八三年四月
奥野健男「「鏡子の家」と「豊饒の海」―三島由紀夫論のうち」」『文学界』第三十七巻
十号　文芸春秋社　一九八三年十月
田中美代子「「豊饒の海」三島由紀夫―小説の二重構造」『国文学　解釈と鑑賞』
第四十九巻六号　至文堂　一九八四年五月
四方田犬彦「「春の雪」異聞（偽書渉猟―一―）」『ユリイカ』第十八巻一号　青土社
一九八六年一月
小林康夫「無の透視法―「豊饒の海」論ノオト（三島由紀夫〈特集〉）」『ユリイカ』

第十八巻五号　青土社　一九八六年五月
山折哲雄「「禁色」と「豊饒の海」―装置としての輪廻転生（三島由紀夫〈特集〉）」
『ユリイカ』第十八巻五号　青土社　一九八六年五月
三好行雄「「豊饒の海」論―「天人五衰」を視座として（いま三島由紀夫を読む〈特集〉）」
『国文学　解釈と教材の研究』第三十一巻八号　学灯社　一九八六年七月
富岡幸一郎「世界像の解体―「豊饒の海」解説」『新潮』第八十四巻一号　新潮社
一九八七年一月
大久保典夫「「豊饒の海」論ノオト」『国文学　解釈と鑑賞』第五十二巻四号　至文堂
一九八七年四月
高橋和幸「『豊饒の海』の構想（二）『暁の寺』論」『文化研究』第一巻
大阪樟蔭女子大学　一九八七年五月
有元伸子「三島由紀夫「豊饒の海」論―「客観性の病気」のゆくえ」『近代文学試論』
第二十五巻　広島大学近代文学研究会　一九八七年十二月
鈴木貞美「三島由紀夫「豊饒の海」―空無への意志」『国文学　解釈と教材の研究』
第三十三巻四号　学灯社　一九八八年三月
小澤保博「「豊饒の海」の構造（上）―第一巻、第二巻の分析―」
『琉球大学教育学部紀要　第一部・第二部』第三十三巻　琉球大学教育学部
一九八八年九月
小林恭二「必ずしも三島の良き読者でないわたしが「豊饒の海」について考えること」
『すばる』第十巻十二号　集英社　一九八八年十一月
小林和子「「春の雪」雑感」『稿本近代文学』第十一巻　筑波大学　一九八八年十二月
伊藤守幸「優雅の変質　『春の雪』への一視点」『弘前大学国語国文学』第十一巻
弘前大学　一九八九年三月
小沢保博「「豊饒の海」の構造―下―第三巻、第四巻の分析」
『琉球大学教育学部紀要　第一部・第二部』第三十四巻　琉球大学教育学部
一九八九年三月
越次倶子「「豊饒の海」〈三島由紀〉―本多繁邦に見る老醜―」『国文学　解釈と鑑賞』
第五十四巻四号　至文堂　一九八九年四月
西本匡克「三島由紀夫『豊饒の海』序論（1）」『研究紀要』第二十八巻
プール学院大学　一九八九年十二月
小林和子「「奔馬」試論　「剣」の次郎から「奔馬」の勲へ」『稿本近代文学』第十三巻
筑波大学　一九八九年十二月

野口武彦「輪廻転生のパラドクス―『豊饒の海』における行為者と認識者をめぐって―」
『国文学 解釈と教材の研究』第三十五巻四号 学灯社 一九九〇年四月
青木保・田中優子「三島由紀夫をめぐって―「暁の寺」そしてアジア」
『国文学 解釈と教材の研究』第三十五巻四号 学灯社 一九九〇年四月
越次倶子「三島由紀夫「豊饒の海」―世界を開く秘密の鍵を手に入れるまで」
『国文学 解釈と鑑賞』第五十五巻十二号 至文堂 一九九〇年十二月
下河部行輝「三島の「豊饒の海」の巻三「暁の寺」の女主人公と「浜松中納言物語」
―素材論として」『岡山大学文学部紀要』第十五巻 岡山大学文学部
一九九一年七月
下河部行輝「構成から見た「豊饒の海」巻二「奔馬」の文章―タイ革命の取扱いを視座
にして」『岡山大学文学部紀要』第十七巻 岡山大学文学部
一九九二年七月
先田進「三島由紀夫の《覗見》の理論『豊饒の海』第三巻「暁の寺」論」『人文科學研』
第八十一巻 新潟大学 一九九二年七月
鈴木貞美「「豊饒の海」について」『国文学 解釈と鑑賞』第五十七巻九号 至文堂
一九九二年九月
村松剛「「豊饒の海」と夢の支配―その構想の変容」『国文学 解釈と鑑賞』
第五十七巻九号至文堂 一九九二年九月
許昊「『奔馬』論―「神風連史話」を中心に―」『日本語と日本文学』第十七巻
筑波大学 一九九二年九月
有元伸子「『豊饒の海』の基層構造」『金城学院大学論集 国文学編』第三十五巻
金城学院大学 一九九三年三月
大森郁之助「「春子」と「暁の寺」の間の虚空 三島由紀夫の lesbianism の位相について
の一仮説」『札幌大学女子短期大学部紀要』第二十一巻 札幌大学
一九九三年三月
若森栄樹「物語の構造―「豊饒の海」四部作を読む」『国文学 解釈と教材の研究』
第三十八巻五号 学灯社 一九九三年五月
田崎英明「オリエンタリズム―「春の雪」「奔馬」「暁の寺」「天人五衰」から」
『国文学 解釈と教材の研究』第三十八巻五号 学灯社 一九九三年五月
柳瀬善治「『春の雪』論 あるいは空虚としての「みやび」」『三重大学日本語学文学』
第四巻 三重大学日本語学文学研究室 一九九三年五月

井上隆史「『豊饒の海』における輪廻説と唯識説の問題」『国語と国文学』第七十巻六号
至文堂　一九九三年六月
有元伸子「綾倉聡子とは何ものか　『春の雪』における女の時間」『金城学院大学論集
国文学編』第三十六巻　金城学院大学　一九九四年三月
井上隆史「『豊饒の海』における世界解釈の問題」『国語と国文学』第七十一巻九号
至文堂　一九九四年九月
太田雅子「『豊饒の海』論――転生へと展げる読解の可能性――」『椙山国文学』
第十九巻　一九九五年三月
小林和子「現代文学における輪廻転生についての一断想―三島由紀夫、深沢七郎、中上
健次をめぐって―」『茨女国文』第七巻　茨城女子短期大学　一九九五年三月
有元伸子「『豊饒の海』における「転生」―妄想の子供たち―」『日本文学』第四十四巻
六号　日本文学協会　一九九五年六月
柳瀬善治「『豊饒の海』論（2）―『奔馬』を中心にして―
「優雅」の政治学とその臨界点」『三重大学日本語学文学』第六巻
三重大学日本語学文学研究室　一九九五年六月
有元伸子「『豊饒の海』における「沈黙」の六〇年」『日本近代文学』第五十三巻
日本近代文学会　一九九五年十月
有元伸子「『豊饒の海』における月・富士・女性―『竹取物語』典拠説の検討」
『国文学攷』第一五一巻　広島大学国語国文学会　一九九六年九月
柳瀬善治「『絹と明察』・『月澹荘綺譚』・『天人五衰』―認識を越えるものの表象について」
『近代文学試論』第三十四巻　広島大学近代文学研究会　一九九六年十二月
竹原崇雄「三島由紀夫『春の雪』と『更級日記』いま一つの証拠」『国語国文学研究』
第三十二巻　熊本大学　一九九七年二月
木村敦英「物語と聖性『豊饒の海』」『国文学試論』第十三巻　大正大学
一九九七年四月
奈良崎英穂「『豊饒の海』における「天皇」欲望される（絶対者）」『日本近代文学』
第五十八巻　日本近代文学会　一九九八年五月
先田進「『豊饒の海』論（一）「春の雪」における《禁忌の侵犯》」『人文科學研究』
第九十七巻　新潟大学　一九九八年八月
宮崎正弘「三島由紀夫“以後”６奔馬と神風連の乱」『自由』第四十巻八号　自由社
一九九八年八月
柴田勝二「優雅の行方―三島由紀夫『春の雪』論」『日本文学』第四十七巻九号

日本文学協会　一九九八年九月
柴田勝二「模倣する行動―三島由紀夫『奔馬』論」『近代文学論集』第二十四巻
日本近代文学会九州支部　一九九八年十月
井波真弓「『豊饒の海』論―二重拘束を解釈の軸として」『語文』第一〇三巻
日本大学国文学会　一九九九年三月
柴田勝二「『暁の寺』と唯識論―『豊饒の海』への視角」『日本近代文学』第六十巻
日本近代文学会　一九九九年五月
柳瀬善治「『暁の寺』論　芸術＝救済の否定」『三重大学日本語学文学』第十巻
三重大学日本語学文学研究室　一九九九年六月
吉田達志「超越への渇望（1）―三島由紀夫『豐饒の海』の世界」『静岡近代文学』
第十四巻　静岡近代文学研究会　一九九九年十二月
中澤明日香「『豊饒の海』論『竹取物語』典拠説の再検討」『国文白百合』第三十一巻
白百合女子大学　二〇〇〇年三月
柴田勝二「憑依の脱落―『天人五衰』の〈終り〉」『國語と國文學』第七十七巻三号
至文堂　二〇〇〇年三月
大石加奈子「『天人五衰』研究―結末の謎クローズアップの盲点」『阪神近代文学研究』
第三巻　阪神近代文学会　二〇〇〇年七月
有元伸子「『豊饒の海』人物関係図／時系列データ表」『国文学　解釈と教材の研究』
第四十五巻十一号　学灯社　二〇〇〇年九月
有元伸子「『豊饒の海』―物語る力とジェンダー」『国文学　解釈と教材の研究』
第四十五巻十一号　学灯社　二〇〇〇年九月
浅利誠「『豊饒の海』論―海あるいは相対／絶対の永劫の攪拌」
『国文学　解釈と教材の研究』第四十五巻十一号　学灯社　二〇〇〇年九月
吉田達志「超越への渇望（2）―三島由紀夫『豊饒の海』の世界」『静岡近代文学』
第十五巻　静岡近代文学研究会　二〇〇〇年十一月
Pollack David・高橋　くみこ
「〈詩〉と〈小説〉の転生　あらゆるものへの批評―三島由紀夫『豊饒の海』」
『ユリイカ』第三十二巻十四号　青土社　二〇〇〇年十一月
高原英理「〈詩〉と〈小説〉の転生　「豊饒の海」を読むという物語」『ユリイカ』
第三十二巻十四号　青土社　二〇〇〇年十一月
安藤武「未発表書簡と『豊饒の海』後の作品」『国文学解釈と鑑賞』第六十五巻十一号
至文堂　二〇〇〇年十一月

清田文武「『豊饒の海』における鴎外の遺響（中）」『鴎外』第六十八巻　森鴎外記念会
二〇〇一年一月
奈良崎英穂「『豊饒の海』における主人公たちの年齢について」『日本文藝研究』
第五十二巻四号　関西学院大学　二〇〇一年三月
大石加奈子「自然の物質による生命再生世界『暁の寺』の構造性試論」『鶴山論叢』
神戸大学　二〇〇一年三月
秋山公男「春の雪―禁忌への侵犯と逆説」『愛知大学文学論叢』第一二四巻
愛知大学文学会　二〇〇一年七月
谷口敏夫「『春の雪』の小説構造可視化　三島由紀夫『豊饒の海』の絵解き」
『京都光華女子大学研究紀要』第三十九巻　京都光華女子大学
二〇〇一年十二月
趙南弼「三島由紀夫『豊饒の海』における局面を表す複合動詞の研究」『岡大国文論稿』
第三十巻　岡山大学文学部日本語日本文学研究室　二〇〇二年年三月
中沢明日香「『豊饒の海』における『松風』・『羽衣』の効果」『国文白百合』三十三巻
白百合女子大学国語国文学会　二〇〇二年三月
武内佳代「三島由紀夫『暁の寺』、その戦後物語―覗き見にみるダブルメタファー」
『お茶の水女子大学人文科学紀要』第五十五巻　お茶の水女子大学
二〇〇二年三月
山崎義光「物語の断片への回帰―三島由紀夫『天人五衰』」『文芸研究』第一五三巻
日本文芸研究会　二〇〇二年三月
岩田真志「三島由紀夫『豊饒の海』論」『文学と教育』第四十三巻　文学と教育の会
二〇〇二年六月
谷口敏夫「『奔馬』の小説構造可視化　三島由紀夫『豊饒の海』の絵解き」
『京都光華女子大学研究紀要』第四十巻　京都光華女子大学
二〇〇二年十二月
中沢明日香「『豊饒の海』における神と仏の問題」『国文白百合』第三十四巻
白百合女子大学国語国文学会　二〇〇三年三月
奈良崎英穂「隠蔽された転生者―『暁の寺』における転生の表象」『昭和文学研究』
第四十六巻　昭和文学会　二〇〇三年三月
阿部孝子「三島由紀夫における塔　ワット・アルン（暁の寺）の問題」新大国語
第二十九巻　新潟大学　二〇〇三年三月
谷口敏夫「『暁の寺』の小説構造可視化　三島由紀夫『豊饒の海』の絵解き」

『京都光華女子大学研究紀要』第四十一巻　京都光華女子大学
二〇〇三年十二月
木下圭文「〈魂の物語〉としての『豊饒の海』『奔馬』における〈魂〉回復の試み」
『兵庫教育大学近代文学雑志』第十五巻　兵庫教育大学　二〇〇四年一月
茂木健一郎「脳のなかの文学（5）閉じた空間の中で豊饒の海を夢見て」『文學界』
第五十八巻八号　文藝春秋　二〇〇四年八月
谷口敏夫「『天人五衰』の小説構造可視化　三島由紀夫『豊饒の海』の絵解き」
『京都光華女子大学研究紀要』第四十二巻　京都光華女子大学
二〇〇四年十二月
森元綾奈「三島由紀夫『豊饒の海』論」『大谷大学大学院研究紀要』第二十一巻
大谷大学大学院　二〇〇四年十二月
竹内さなえ「清顕という男　三島由紀夫『豊饒の海』研究（一）」『弘前大学国語国文学』
第二十六巻　弘前大学　二〇〇五年三月
森元綾奈「『豊饒の海』と河」『文芸論叢』第六十五巻　大谷大学文芸学会
二〇〇五年九月
佐藤秀明「ある「忠誠」論―「昭和七年」の『奔馬』」『三島由紀夫研究』第一巻
鼎書房　二〇〇五年十一月
武内佳代「三島由紀夫『暁の寺』にみるサロメ表象―月光姫（ジン・ジャン）再考の
機縁として」『国文』第一〇四巻　お茶の水女子大学国語国文学会
二〇〇五年十二月
大石加奈子「三島由紀夫『春の雪』　綾倉聡子の逆説的母性」
『沼津工業高等専門学校研究報告』第四十巻　沼津工業高等専門学校
二〇〇六年一月
徳永直彰「「盗み」の系譜―『豊饒の海』における『マヌの法典』をめぐって」
『埼玉大学紀要　教養学部』第四十二巻二号　埼玉大学教養学部
二〇〇六年二月
下田城玄「三島由紀夫『豊饒の海』論」『民主文学』第四八七巻　日本民主主義文学会
二〇〇六年五月
武内佳代「三島由紀夫『暁の寺』　表象としてのレズビアンが語りうるもの」『日本文学』
第五十五巻六号　日本文学協会　二〇〇六年六月
大井映史「失われる記憶、もしくは隠された記憶　三島由紀夫の豊饒の海（四）
『天人五衰』の結末をめぐって」『大手前大学人文科学部論集』第七巻

大手前大学・大手前短期大学　二〇〇六年三月
高松さなえ「白い仮面の女、蓼科―三島由紀夫『豊饒の海』研究（2）」
『弘前大学国語国文学』第二十八巻　弘前大学国語国文学会
二〇〇七年三月
蘭香代子「「夢」の心理学的考察―『豊饒の海』（「春の雪」、「奔馬」、「暁の寺」、「天人五衰」）の三島由紀夫の四部作に表現された夢を引用して」『日本文化研究』
第七巻　駒沢女子大学日本文化研究所　二〇〇七年三月
工藤正義・佐藤秀明
「未発表「豊饒の海」創作ノート（1）翻刻」『三島由紀夫研究』第四巻
鼎書房　二〇〇七年七月
長谷川郁美『『春の雪』における〈恋愛〉―綾倉聡子をめぐって」『近代文学論集』
第三十三巻　日本近代文学会九州支部　二〇〇七年十一月
井上隆史・工藤正義・佐藤秀明
「未発表「豊饒の海」創作ノート（2）大長篇 Sketch（1）」『三島由紀夫研究』
第五巻　鼎書房　二〇〇八年一月
高松さなえ「綾倉聡子と『天人五衰』結末解釈―三島由紀夫『豊饒の海』研究（3）」
『弘前大学国語国文学』第二十九巻　弘前大学国語国文学会
二〇〇八年三月
竹西寛子「耳目抄（二七〇）立春の雪のあとに―「哀愁」と「秘花」」『ユリイカ』
第四十巻三号　青土社　二〇〇八年三月
稲田大貴『『豊饒の海』試論（一）聡子の言葉『天人五衰』から『春の雪』へ」『九大日文』第十一巻　九州大学日本語文学会　二〇〇八年三月
佐藤秀明「〈嘘〉の物語―『豊饒の海』読解」『渾沌』第五巻
近畿大学大学院文芸学研究科　二〇〇八年三月
武内佳代「レズビアン表象の彼方に―三島由紀夫『暁の寺』を読む」
『人間文化創成科学論叢』第十巻　お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学
研究科　二〇〇八年三月
井上隆史・工藤正義・佐藤秀明
「未発表「豊饒の海」創作ノート（3）大長篇ノオト（尼寺）」『三島由紀夫研究』
第六巻　鼎書房　二〇〇八年七月
稲田大貴『『豊饒の海』試論（2）物語られる「転生」をめぐって」『九大日文』
第十二巻　九州大学日本語文学会　二〇〇八年十月

鍋島弘治朗「文脈主義におけるメタファーとシミリー三島由紀夫「豊饒の海」を中心に」
『ことば工学研究会』第三十巻　ことば工学事務局　二〇〇八年十月
工藤正義・佐藤秀明
「未発表「豊饒の海」創作ノート（4）奔馬　三島由紀夫」『三島由紀夫研究』
第七巻　鼎書房　二〇〇九年二月
稲田大貴「『豊饒の海』試論（3）物語の終焉、そして聡子は「どこ」にいる？」
『九大日文』第十三巻　九州大学日本語文学会　二〇〇九年三月
有元伸子「三島由紀夫「天人五衰」の原稿研究　結末部を中心に」『表現技術研究』
第五巻　広島大学表現技術プロジェクト研究センター　二〇〇九年三月
岩田真志「三島由紀夫「月澹荘綺譚」論―『豊饒の海』を読み解く鍵」『現代文学史研究』
第十二巻　現代文学史研究所　二〇〇九年六月
佐藤秀明・工藤正義・井上隆史
「未発表「豊饒の海」創作ノート（5）」『三島由紀夫研究』第八巻　鼎書房
二〇〇九年八月
野坂昭雄「六〇年代の三島由紀夫―『美しい星』から『豊饒の海』へ」『原爆文学研究』
第八巻　花書院　二〇〇九年十二月
井上隆史・工藤正義・佐藤秀明
「未発表「豊饒の海」創作ノート（6）大神神社」『三島由紀夫研究』第九巻
鼎書房　二〇一〇年一月
大野雅子「「夢浮橋」と〈ポスト・テクスト〉―大和和紀『あさきゆめみし』、橋本治『窯
変源氏物語』、三島由紀夫『豊饒の海』」『帝京大学外国語外国文化』第三巻
帝京大学外国語学部外国語学科　二〇一〇年三月
白鳥新「百日紅の喪失　『豊饒の海』における本多の同一化願望をめぐって」
『横浜国大国語研究』第二十八巻　横浜国立大学　二〇一〇年三月
田中美代子「夜もすがらの旅路（月報）」『決定版　三島由紀夫全集』第三巻　新潮社
二〇〇一年二月
トマ・ガルサン「三島由紀夫の『仮面の告白』、『憂国』と『奔馬』における「純粋」と
「不純」」『立教大学大学院日本文学論叢』第十巻　立教大学大学院文学
研究科日本文学専攻　二〇一〇年八月
安藤礼二「迷宮と宇宙（5）夢の織物　三島由紀夫『豊饒の海』の起源」『すばる』
第三十二巻十号　集英社　二〇一〇年十月
佐藤秀明「豊饒の海（春の雪　奔馬　暁の寺　天人五衰）」『別冊太陽』第一七五巻　平凡社

二〇一〇年十一月
佐藤秀明・工藤正義・井上隆史
「未発表「豊饒の海」創作ノート（7）暁の寺」『三島由紀夫研究』第十巻
鼎書房　二〇一〇年一一月
松本徹「究極の小説『天人五衰』―三島由紀夫の最後の企て」『文學界』第六十五巻一号
文藝春秋　2011年1月
久保田裕子「王妃の肖像―三島由紀夫『暁の寺』におけるタイ国表象」
『福岡教育大学国語科研究論集』第五十二巻　福岡教育大学国語国文学会
二〇一一年二月
松本道介「視点（五一）「天人五衰」最終章」『季刊文科』第五十一巻　鳥影社
二〇一一年二月
古屋　麻衣「「春の雪解」小考（半七捕物帳（1））」『成蹊人文研究』第十九巻
成蹊大学大学院文学研究科　二〇一一年三月
富岡幸一郎『『豊饒の海』の謎―昭和四十一年の転機」『国文学　解釈と鑑賞』
第七十六巻四号　ぎょうせい　二〇一一年四月
吉村誠『『成唯識論』における阿頼耶識の譬喩について」『印度學佛教學研究』第六十巻
二号　日本印度学仏教学会　二〇一二月三年
工藤正義・井上隆史・佐藤秀明
「未発表「豊饒の海」創作ノート（9）」『三島由紀夫研究』第十二巻　鼎書房
二〇一二年六月
谷口　敏夫「三島由紀夫『豊饒の海』の小説構造可視化」『京都光華女子大学研究紀要』
第五十巻　京都光華女子大学　二〇一二年一二月
佐藤秀明・工藤正義・井上隆史
「未発表「豊饒の海」創作ノート⑽」『三島由紀夫研究』第十三巻　鼎書房
二〇一三年四月
安達敬子『『春の雪』覚書　三島由紀夫と『源氏物語』』『和漢語文研究』第十一巻
京都府立大学国中文学会　二〇一三年十一月
嶋津拓「三島由紀夫著『豊饒の海』とタイの留学生「シャムの王子」たちのモデルは
誰か」『埼玉大学日本語教育センター紀要』第八巻　埼玉大学日本語教育
センター　二〇一四年三月
田中あゆみ『『春の雪』清顕の優雅の行方」『白百合女子大学言語・文学研究センター言
語・文学研究論集』第十四巻　白百合女子大学言語・文学研究センター

二〇一四年三月
森正人「転生譚をめぐる事実と虚構　浜松中納言物語・豊饒の海の夢と記憶」
『文学部論叢』第一〇五巻　熊本大学　二〇一四年三月
石原千秋「「誤配」された恋人たち（最終回）空虚な中心・三島由紀夫『春の雪』」
『すばる』第三十六巻四号　集英社　二〇一四年四月
井上隆史・工藤正義・佐藤秀明
「未発表「豊饒の海」創作ノート⑾」『三島由紀夫研究』第十四巻　鼎書房
二〇一四年五月
岡山典弘「三島由紀夫と神風連『奔馬』の背景を探る」『三島由紀夫研究』第十四巻
鼎書房　二〇一四年五月
執行草舟・樋渡優子「武士道への道（4）三島由紀夫『奔馬』のモデルといわれて」
『歴史通』第三十五巻　ワック　二〇一五年三月
長谷川郁美「『奔馬』とその時代（1）「昭和神風連」をめぐる時代状況」『近代文学論集』
第三十四巻　日本近代文学会九州支部　二〇一五年八月

〈辞書・辞典〉

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編
『日本国語大辞典　第二版』第二巻　小学館　二〇〇一年二月